

平成 27 年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

輪中における水制御と水の神性
— 水共同体のエートス —

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻 文化人類学・宗教学・日本思想史専門

下本英津子
平成 27 年 6 月

序論 3

1. 本論文の目的
2. 先行研究と本論文の課題
問題の所在 環境民俗学の可能性 輪中の研究史 十六輪中の特殊性 本論の課題
3. 調査方法と研究の経緯
4. 本論文の構成

第1章 輪中の自然環境と歴史 15

第1節 輪中の自然環境

1. 木曾三川と濃尾平野の形成
木曾三川 濃尾平野の堆積と地形 濃尾平野の傾動
2. 降水量と地下水
降水量と気温 地下水
3. 河道の変化

第2節 輪中の歴史

1. 輪中以前
遺跡の分布 条里地割と稲作 海民と教団の世界
2. 輪中の形成
輪中の形成と新田開発 輪中の定義 水共同体と水制御 輪中の発展
3. 輪中の変容
輪中の矛盾 三川分流と輪中の解体 現存する輪中堤防

第2章 十六輪中の環境 37

第1節 水環境と輪中の形成

1. 水環境と水害
地形 河川環境 地下水の分布と水質 水路と排水 十六輪中の水害
2. 集落のおこりと輪中の形成
集落のおこり 輪中の形成と地域間調整 輪中堤防と切割

第2節 社会組織と生業

1. 人口と社会組織
人口 社会組織
2. 生業
稲作の特化 稲作の決まり 水害と稲作 稲作離れ

第3章 水制御の技術 63

第1節 水利用

1. 農業の水

(1) 西濃用水

(2) おたれ

おたれの水源 取水口と取水方法

(3) 電動ポンプ式井戸

2. 生活の水

3. 弘法の井戸

第2節 水防

1. 家ごとの対応

水害に備えた住居 水かたづけと炊飯

2. 輪中としての対応

輪中堤防の維持管理 年中行事 出水時の出動体制 出水時の堤防警固

3. 水害への意識

第3節 水管理

1. 水の管理装置

2. 水管理の方法

平常時の取排水 稲作と湛水 出水時の取排水

第4節 昭和20年代の水利用

1. 農業の水

(1) 自噴井

数と分布 形状 管理調節 掘鑿方法

(2) 相川からの取水

取水口 取水方法と管理 水量と水質

2. 生活の水

第5節 19世紀の水利用

おたれの取水口 相川からの取水

第4章 水の神性 103

第1節 十六輪中の宗教と祭礼

寺院 神社 祭礼行事 祭礼への奉仕

第2節 水と神性

1. 相川と神明神社

2. 自噴井と水神

3. 弘法の井戸の伝説

二種の伝承 近世の記録 「特別性」の衰退と現代的位置づけへ

4. 記念碑祭り与水防

記念碑 記念碑祭と川ざらえ

第5章 考察 127

1. 水制御技術の革新

水利用の変遷 水防体制の維持

2. 水共同体の変化

3. 水の神性にみる紐帯

水防をめぐる紐帯 水利用の紐帯

4. 受け継がれる水共同体のエートス

結論 137

文献 141

図、表、写真リスト 145

序論

1. 本論文の目的

本論文の目的は、水害のリスクを抱える輪中地域における水と人との歴史的動態を、水制御技術と水の神性から解明することにある。

「輪中」とは、濃尾平野の木曽三川流域において、集落や耕地を水から守るために輪形堤防で囲み、そのなかでいとなまれた社会をいう。豊かすぎる水が洪水をもたらす輪中地域では、どのように水を利用し、どのように水を防ぐかが重要な課題となる。ここでいう「水制御」とは、そうした水を利用、あるいは水害を防ぐための活動をいう。

また「水の神性」とは、水神と称されるもの、あるいは水にまつわる祭礼、伝説、しきたりなど水にたいして付与された宗教的な次元をふくむ言説や行為の総体を指している。

つまり本論文の目的は、輪中地域における水を利用／防ぐための技術と、水にあたえられた宗教的な言説や行為の動態を分析し、輪中住民が水とのあいだにつくりあげてきた関係性の現状を明らかにすることと言える。

2. 先行研究と本論文の課題

問題の所在

水は、人間が生きるうえで欠かせない基本的要素のひとつである。それゆえに水は、つねに現実の社会問題でありつづけてきた。現在も世界各地には水をめぐる様々な問題がある。水不足、水質汚染、塩害、温暖化にともなう水害など、日々の生活をおくるうえで、いずれも深刻な状態を呈している。

ひるがえって日本の場合はどうだろうか。インフラ設備、水量、水質などをみても、世界の現状にくらべてめぐまれた環境にあるだろう。とはいえ日本が世界の水問題と無関係なわけではない。近年日本の水問題として注目されているのが「バーチャルウォーター」あるいは「仮想水」と呼ばれるものである。これは、日本が農産物の輸入を介して利用する水をいう。食料輸入の割合が多い日本では、バーチャルウォーターの消費量が甚だしい。地球的に水不足の加速が懸念される昨今、水資源にめぐまれた日本が世界の水に依存し大量消費していることは、グローバルな観点からみて改善しなければならない問題である〔柴田 2007：172-198〕。

この問題の難しさは、この水が「バーチャル」であることにある。我々は、袋詰めされた小麦粉をとおしてそこに使用された水を感じとることができない。蛇口をひねれば、一定の水質に整えられた水をつねに必要なだけ得ることができる。10 数年に 1 度程度の水害であれば、計画的に建設された河川堤防と排水設備が対応してくれる。つまり、高度に水環境が整備された日本列島に暮らす我々にとって、水問題は生活の中で実感しづらいテーマとなっているのである。

この点にこそ、現代日本における水問題の一面があらわれている。

環境社会学者の鳥越皓之（1944-）は、著書『水と日本人』のなかで、現代日本における水問題を「水と人間との関係の疎遠化」にあるとしている。古典文学や歌などで示されているように、日本では水に人生を見出し、親しみを感ずる感性があった。しかしそうした感性は失われ、水に対して関心を失いつつある。こうした状況を、鳥越は次のように表している。

現在の私たちの国の水にたいする政策は貧しい、と思い切って言うておこう。水というのは、本来、人間の精神から社会の構造に至るまで深い関わりをもっているのものであった。蛇口をひねると水がでる上水道システムや、人を水辺から遠ざける河川改修は、じつはこの流れから遠いものだ。水が「人間の精神」から棚上げにされて久しい。そして私たちは、棚上げされたことに気づかないふりをして、日々、水とつきあっている [鳥越 2012：viii]。

我々は、近代科学技術によって列島の水を一定程度制御しえた。そして、それとともに、水に対する精神性を失ってきた。技術の発展と反比例するように、水にたいする我々の感覚は、きわめて脆弱になっているのである。

こうした状況に警鐘をならすべく、水と人間との関係を取り戻そうとする市民団体の活動が、全国各地でおこっている。豊かな自然は人間の癒しや充足のためにも重要であり、我々には自然本来の水環境が必要なのである。行政側もまた、環境に配慮した治水の建設を目指してきた⁽¹⁾。しかし 2011 年の東北地方太平洋沖地震以降の日本列島では、各地域が抱える津波や氾濫リスクが次々と明らかになり、災害から命や財産を守るためのより高度な水制御技術が求められるようになっている。

一方では自然本来の姿を求め、もう一方では水害を避けるための水制御技術を求める。そこでは、水をめぐる技術と価値意識の乖離がおこっている。こうした技術と精神性を統合するべく、文理を問わずさまざまな研究がすすめられている⁽²⁾。そのひとつが、自然環境と人々の心性の関係を解明しようとする環境民俗学である。

環境民俗学の可能性

環境民俗学を提唱した鳥越は、民俗学が対象とする自然環境は生物学や生態学が対象とする自然とは異なる「人間の手によって加工された不純な自然」であるとする。そのうえで環境民俗学を、加工された自然環境と人間のかかわりのカラクリを民俗学的視点から研究する分野であると位置づけた。[鳥越編 1994：iii]。

「環境民俗学」を打ち出した鳥越の研究以降、環境や自然をめぐる民俗学研究は拡大してきた。たとえば民俗の生成基盤である環境に注目することで民俗を見つめ直そうとした野本寛一 [野本編 1996]、「人々の自然にたいする民俗的知識の束を取りだす」ために「民俗自然誌」を描く篠原 [篠原 1990、2005]、コモンズを通して人と環境の民俗の関係性を問う菅 [菅 2006]のほか、環境をとおして共同体論ではない個々の習俗を読みとろうとする山 [山ほか 2008]らによって、環境や自然に関する民俗学研究は深められてきた。

環境民俗学の隆盛の背景には、我々が「環境」について真剣に考えざるをえない時代を生きている」という危機意識があり、「かつての人々の暮らしの知恵や工夫を学び取ることによって、眼前に進行している急激な近代化とそれがもたらした、実にさまざま負の側面に対処していこうとするきわめて現実的な目的」がある〔山 2008：1〕。

古い民俗伝承の聞き取りという形でおこった民俗学であるが、それは単に伝統を称揚するアナクロニズムではない。篠原が「農村生活や漁村生活の身近な自然への人びとの対峙の方法にこそ再生への道程が隠されている。民俗学は人びとの生活世界の叙述を通して、人の「生きる」方法を模索してきた」〔篠原 2005：183-184〕と述べ、野本が「日本人が、自然環境とどのようにかかわって生きてきたのかを探り、今後の指針を得」〔野本編 1996：3〕ように、そこには未来へ向けた視点があるのである。

すなわち環境民俗学において自然環境にたいする習慣や行為を歴史の変遷を含めて具体的に明らかにすることは、現実におこなわれている行為のなかから未来へ向けた可能性を見出そうとする試みなのである。そこで見出される可能性は、机上の理論ではなく現実実践されてきたという点で、打たれ強く、持続力が強いと考えられる。

本論文はこうした環境民俗学の立場にもとづいて、輪中地域に形成された水をめぐる技術と精神性の関係を考察する。水とのかかわりが濃密な地域で、技術的にあるいは精神的にどのような関係性が形成されているかを知ることは、「水と人間との関係の疎遠化」を解決する手がかりになると考えられる。

輪中の研究史

本論文でとりあげる輪中地域については、これまでに厚い研究の蓄積がある。まずは輪中の研究史を概観し、整理してみよう。

輪中に関するまとまった研究の嚆矢となるのは、昭和11年（1936）に出版された中澤辨次郎監修『輪中聚落地誌』である。本書は埼玉生まれの農村経済問題研究家である中澤（1891－1946）が、輪中地域の農民運動にたずさわったのをきっかけとして、地理学者の秋山恒士、山田清らとともに執筆したものである。昭和4年（1929）、輪中地域では「犀川事件」と呼ばれる騒動がおこった。この事件は、水害防止のための犀川改修計画にたいして下流地域の住民が反対運動をおこした、言わば輪中同士の対立であった。反対運動は激化し、反対派住民と警官の衝突にたいして軍隊が出動する騒ぎとなった。本書はこの事件についての中澤論文も掲載しており、事件によって高まった輪中への学術的関心にこたえるものとなっている。

本書は「我が学会の鋭敏なる研鑽の目から逃れ、濃尾大平野の真只中に学問上放任されてみた、特異の地域に対する研究故、この程度の荒起こしの鋤入れでも、尚多少斯界に寄与する所あり」とあるように、広大な輪中地域を概説的に論じることを優先しているため、個々のデータの詳細な分析や地域的配慮には不十分な点もある。だが輪中地域の自然条件の特殊性、御囲堤や宝暦治水工事による河川の変遷、水屋やあげ舟という居住形式、用水組合と水防など、輪中の特性として知られる基本的な要素はほぼカバーしている。輪中を学術界にひろく知らしめた研究として、金字塔的な意義を有していると言えよう。

時をあげずして、昭和 14 年（1939）に松尾国松（1874－1958）によって『濃尾に於ける輪中の史的研究』が出版された。著者の松尾は、輪中の一村に生まれ育ち、22 年間にわたって岐阜市長を勤めた人物である。「私は小輪中の小なる水難部落に生育し、直接水難の惨苦をなめ、水難克服の辛勞を味わった祖母と父母とより広く深く説き教えられ、自分も体験した者である」とあるように、本著は実体験をもとに論じられている。「地理と人情と輪中」「輪住民の心理」「矛盾の現実」など、輪中同士の利害関係や輪中住民の気質は、住民ならではの視点であろう。こうして辛酸をなめてきた輪中住民であるが、「今日においては科学の進歩により、自然の脅威を多分に防除し得るに至った」というように、日々発展する近代技術は輪中地域の水害を克服しつつあった。そのためいずれは「多年朝野を煩わした美濃平野の水難・水論も自ら解消し、人心も自ら改新される」はずである。本著は、水難克服という進歩史観にもとづいて、往時の艱苦を忘れないための資料として位置づけられている。

第二次大戦以降、輪中に関する研究論文は増していく。中心となるのは、地理学、農学からのアプローチである。とくに 1960 年代から 70 年代前半にかけては、輪中地域の土地改良をめぐる研究が多くなされた。例をあげれば、白井義彦 1964「土地改良・その他による西濃輪中地域の変貌」『地理科学』、川本彰 1967「農業発展と村落組織 輪中地帯村落組織に及ぼした大規模土地改良事業の社会的影響」『明治学院論叢研究年報』、木本凱夫 1975「岐阜県高須輪中の土地基盤整備の進展」『三重大学農学部学術報告』などである。「変貌」「改良」「進展」などがキーワードとなっていることから分かるように、これらの研究がおこなわれた当時、輪中では土地改良がさかんにおこなわれた。松尾が想定していたとおり、輪中地域には技術による近代化の波がもたらされたのである。

そうしたなか昭和 50 年（1975）に安藤萬壽男編『輪中 その展開と構造』が上梓された。編者の安藤（1915－2003）は、森部輪中生まれの経済地理学者である。彼はこれまでの輪中研究には、輪中とは何かという基本概念、輪中地域全体の定量的な研究、輪中の類似例の体系的な分析が欠けていることを指摘する。さらに戦後の急速な近代化のなかで輪中が改変されているが、輪中の無理解のうえに進む都市化が新たな水災を惹起しつつあることを危惧している。こうした問題意識の上に記された本著は、定義と定量的研究、体系化に強いこだわりを持っている。もとより対象地域が広大なため、15 名のグループ研究の形をとり、輪中の自然的基礎、歴史的形成、分布と形態、水防、人口と集落、経済構造という全 6 テーマに分けて執筆された。各テーマは、具体例が量的データとともに論じられており、安藤の目的を達成していると言える。

さらに安藤は、昭和 63 年（1988）には単著で『輪中 その形成と推移』を出版する。前掲書では各輪中の歴史的形成の分析が不十分であったとして、およそ 80 のすべての輪中についての形成過程をまとめあげた。史料分析および隣接輪中との自然地理的關係の考察によってなした労作である。これら一連の安藤の研究によって、輪中地域全体は体系的に整理された。今日でも輪中理解のための基礎的研究と位置づけることができる。

昭和 52 年（1977）の松原義継による『本阿弥輪中 藩政時代における輪中農業の成立と変貌』は、安藤とは対照的に、一輪中にしぼるがゆえに可能となる綿密な地域研究である。地理学者の松原（1915－2006）は、岐阜県海津市の大地主である佐野家が所有する古文書をもとに本阿弥

輪中の歴史地理学的研究をおこなった。著者が追求したのは、「後背湿地を基盤とした、輪中村落の農業生産の展開を、時代に即して系統的・数量的に復原」することである。本阿弥輪中は、全体にしめる後背湿地の割合が高い。そのため開発された当初は生産が高かったが、河床が高まり排水が悪化したことで低生産へ落ち込んでいく。そうしたなかで田の一部の土を盛り上げる「堀上田」が開発される。このように松原は、古文書の分析をとおして 220 年あまりにわたる本阿弥新田の発達過程を、農業生産のメカニズムを中心として解明した。

松原が指摘しているように、これまでの輪中研究においては広大な輪中における地域的な配慮が乏しく、平板かつ羅列的な記述に終始するきらいがあった。そうしたなかで、後背湿地を中心とした輪中の典型例として本阿弥輪中の生活様態を歴史的に明らかにした本著は、あらたな視点を切り開いた。

現在の輪中研究の中心的存在とも言える伊藤安男（1929 - ）は、昭和 54 年（1979）に青木伸好との共著『輪中 洪水と人間その相克の歴史』を記した。本書は、岐阜県海津市の高校地理教諭であった伊藤のフィールドワークの成果をまとめた一冊であり、輪中を正しく理解するための入門書と位置づけられている。本書は輪中を「洪水から集落や耕地を守るために、その周囲に堤防をめぐらし、水防を紐帯として強固な共同体意識によって結ばれた地域社会」と定義し、物理的構造物ではなく社会共同体にその本質を見出している。輪中の内部構造の解明を目指す本書は、水屋建築、助命壇、屋敷森のほか水上交通などをふくめた「水防を基盤とする生活様式の総称」としての「輪中文化」を描く。200 数頁の小著のため各項目の内容は簡潔だが、多面的に輪中の生活を描く意図はじゅうぶん果たしているだろう。また伊藤は、「人間と水との争い」から生み出された輪中の水防能力を高く評価しており、土木工事のみに依存しない「真の治水」の可能性を示唆している。

本書から 17 年後の平成 8 年（1996）、伊藤は『変容する輪中』を編んだ。ここでは輪中の景観、水屋建築、農業、交通、食生活など、かつて輪中独自の文化とされた諸事象が近代化を経て衰退したことが論じられている。すなわち輪中景観の特色であった水屋や堀田は失われ、河川交通にかわってモータリゼーションが進み、伝統的な川魚食は過去のものとなった。そして意識調査によれば、目に見える部分だけではなく輪中の中核にあると考えられた共同体としての水防意識まで著しく低下している。伊藤はこうした輪中住民の意識変化に警鐘を鳴らしており、「輪中ボランティア精神」の復興を提唱している。

以上主な輪中研究をとりあげ歴史を参照したが、このような輪中の研究史は実際の輪中地域の歴史を反映している。すなわち初期の輪中研究は水害という社会問題への関心が背景にあった。現実には水害や水論がおこる中で、輪中研究は学術的な意義とともにそれらの問題を解決するために特殊な社会形態が注目されたのである。

そして第二次大戦以降の輪中研究は、土地改良や土地整備などのキーワードが増えているように、輪中地域がいかに近代化していくかという関心が背景になっている。水害は多発するが、水が豊富な平地である輪中地域は、穀倉地帯としての可能性を秘めていた。戦後の増産政策の一環として、輪中はなるべくして近代化したのである。また積極的に輪中を変革していこうとする

動きの一方で、安藤や伊藤らは輪中地域を構造的な視座でとらえ、輪中の定義や歴史、生活文化の特性を体系的に明らかにしていった。

そして近代化の進展とともに輪中は姿を変えていく。1996年の『変容する輪中』では、これまでに解明されてきた輪中の特色とされるさまざまな事象が、変容し、失われてきていることが論じられている。これ以降、輪中についてまとまった研究がないことは、現実世界の輪中が衰退していることと無関係ではないだろう。

伊藤は著書のなかで、昭和51年(1976)の長良川決壊により輪中堤防が再注目され、薄れかけていた水防意識がふたたび高まったと指摘しているが⁽³⁾、長良川の決壊からすでに40年近い年月が経過し、輪中においても洪水を知らない世代も増えている。もはや輪中は過去の遺物となったのだろうか。

十六輪中の特殊性

こうした状況のなかで、特異な位置にあるのが十六輪中である。

十六輪中は岐阜県大垣市十六町にある輪中であり、現在でも成立当時の輪中堤防をそのまま維持している。岐阜県の治水担当者が「河川改修によって、ほとんどの輪中堤は切られているし、閉めれるところも少ない。(中略)輪中自体が明治くらいに解体されたから、輪中自体が管理されているのは十六輪中くらい。あそこは特殊⁽⁴⁾」と語るように、十六輪中は完全な懸廻堤が今も維持されているという「特殊性」で知られている。

輪中堤防が維持されているということは、その必要性が現在まで維持されてきたことを意味する。そこには水と人との密接な関係が築かれ、今なお続いていると考えられる。本研究では、この十六輪中を事例地域として水制御技術と水の神性を分析していく。

十六輪中については、これまでに次のような研究がおこなわれてきた。

1980年には、馬淵、安田の共同執筆により「十六輪中の成立と現況」が岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済』に報告された。本論では、Iで輪中成立までの歴史が、IIで戦後にうけた水害被害の現況がまとめられ、上げ舟や水屋などの水防対応がおこなわれていること、治水にまつわる祭礼があることを報告し、「輪中堤防」の重要性が衰えていないことを論じている。

1983年には同じく岐阜経済大学地域経済研究所が「特集十六輪中」と題し、十六輪中の共同研究をおこなった。輪中形成の歴史、農業土地利用や生活圏の変化、水防対応、農耕儀礼など、多様なテーマについて計10本の論文が執筆された。本特集は、現在までにおこなわれている十六輪中研究としてもっともまとまった調査報告書であるとともに、特定輪中の総合的研究としても貴重である。本特集では、戦後の土地改良や経済発展にともなって生業や農業的土地利用が変容しつつあることが報告されるいっぽうで、水防対応や儀礼行事が維持されている実態が明らかにされている。

そして1996年の『変容する輪中』では、安田が「十六輪中の景観変遷」と題して輪中成立の歴史を論じたうえで、戦後も水害を受けていること、水屋や上げ舟などの水防対応が減少しつつも保たれていること、水神信仰がおこなわれていることを紹介し、今なお水防活動への高い意識が維持されていることを報告している。

近年では、2008 年名古屋大学文学部社会学研究室『水環境の再構築 大垣市を事例として』が、大垣市街地と比較される農村地域として十六輪中をとりあげ、その水環境の変遷を報告している。本書では、治水・利水・環境の一体的なありかたを模索するための事例研究として、大垣市街地と十六輪中における水環境の変遷を比較している。報告によれば大垣市街地では「原・水都」的水環境が経済成長により空間的变化を遂げ、その後意識的に「水環境の再構築」がおこなわれている過程が確認できる。それに対して十六輪中では遊水地であるという大きな水環境の変化がおきておらず、堅固なコミュニティをもつ「治水共同体」として水防体制、年中行事が維持され続けていること、高齢化のなかでそれをいかに持続していくかという方法が課題となっていることが論じられている。

これらの研究を見ると、輪中地域全体で近代化による変容と衰退が進んでいるなかで、十六輪中では「大きく変化していないこと」「維持されていること」が強調されている事が分かる。その契機となっているのが、水防の重要性である。安田が「扇状地河川の相川と大谷川の遊水地に囲まれているのが十六輪中である」と述べているように⁽⁵⁾、十六輪中は2つの河川に挟まれているが、そのうち1河川には洗堰が設けられ、地域一帯が遊水地としての機能を果たしている。伊藤が輪中を「水防を紐帯として強固な共同体意識によって結ばれた地域社会」と位置づけたように、水害リスクを持ち続けていることは、十六輪中が輪中意識と共同体を維持し続けるときの中心的柱となっている。

しかし、水と人間との関係を想定したとき、水防はそのひとつの大きな要素であるがすべてではない。輪中地域における豊富な水は脅威でもあるが資源でもあり、水害を防ぐと共に人々は水を利用してきたはずである。その意味では、水防とともに水利用の動態を知ることではじめて輪中における水と人との歴史的動態の全体像を明らかにすることができるのではないだろうか。

水防に関する充実した記述に反して、十六輪中における水利用についての報告はすくない。特集のなかで農業的土地利用を担当した高橋は、土地改良以前の輪中内で湧水と井戸を利用した灌漑がおこなわれていたことを指摘しているが⁽⁶⁾、具体的な取水方法、場所、数などの詳細は不明である。また農業用水以外の生活用水について、どのような方法で水利用がおこなわれていたのかは詳らかでない。

また共同体意識の維持には、水利用や水防など技術的側面に加え、精神的側面も重要な鍵となっていると考えられる。人々は水をめぐってどのような精神性を形成していたかという視点が必要となる。安田は十六輪中における水防意識のあらわれとして、治水にまつわる神明祭りと天王祭りを紹介しているほか、治水功労者記念碑の祭りがあることを論じている〔安田 1980、1983、1996〕。神明祭りのように堤防に祭られた水神を祀る信仰は、十六輪中が輪中地域における水神信仰の系譜につらなっていることを示しているが⁽⁷⁾、水と人との宗教的な関係性は、水防のみにしか現れず、水利用には神性が語られることはないのだろうか。あるいは、日本列島全体で見れば水の神性は、神社・祭礼にとどまらない多層なレベルで展開しているが⁽⁸⁾、十六輪中には、水に関する伝説やしきたりはないのだろうか。

本論文の課題

以上の点をふまえ、本論文はつぎの3点を課題とする。

- (1) 輪中における水と人との関係性を、農業用水利用、生活用水利用、水害対応の3つに分け、その具体的方法と歴史的変遷を明らかにする。
- (2) 水にまつわる祭礼、伝説、しきたりの内容を明らかにする。
- (3) 両者が、十六輪中の共同体のなかでどのように結びついているかを明らかにする。

これら3点を分析することで、十六輪中における水と人との関係性の全体が明らかになる。そしてそれによって、水をめぐる技術的側面と精神的側面が乖離しないあり方を探る手がかりを得ることができるだろう。

3. 調査方法と研究の経緯

本論文の調査方法としては、(1) 参与観察と聞き取り、資料収集により水制御の方法や水の神性に関するデータを集め、(2) データの分析をとおして両者の関係を考察する、という方法をとった。

筆者は名古屋大学文学研究科博士前期課程1年次在籍の2008年から、輪中地域におけるフィールドワークおよび資料収集をおこなっていった。当初の関心は、近世期の輪中地域における水害見舞いと、そのさい贈られる和菓子の関係性を問うことにあったため、古文書調査が中心であった。2008年には名古屋大学人文学フィールドワーカー養成プロジェクトの助成をうけた。このときの調査をもとに、「見舞い」行為と「菓子」—近世期木曾三川輪中における水害の事例を通して—と題した修士論文を提出した。

修士論文を執筆した後、水害見舞いのような慣習がはぐくまれた背景にある、輪中の生活における水と人間の関係性に関心をもった。そこで、2009年以降は大垣市、海津市、輪之内町、弥富市、桑名市などをフィールドとして自転車でめぐり、水環境や水利用の特性について調査をおこなってきた。そうしたなかで十六輪中については、2010年から2012年にかけて、集中的な調査をおこなった⁽⁹⁾。

十六輪中では、現地の水制御装置を調査するとともに、祭礼への参与観察、聞き取り調査をおこなった。聞き取り調査では、自治会長をはじめとして、農業に従事しており水利用について詳しい住民の方々、あるいは農業には従事していないが水防などの形で輪中の取り組みに参加しているの方々、歴史的な水利用方法の変遷に詳しい「古老」とされるの方々などに繰り返し話を聞く機会をいただいた。また十六輪中住民として十六輪中についての論文を発表してきた、安田氏、北山氏にも直接お会いして貴重な話を聞くことができた。表0-1はこうした聞き取り調査のうち、本論で語りを引用させていただいた方々を掲げたものである。また旧地主宅ではご厚意によって文書を見せていただき、それによって水制御技術の歴史を僅かではあるがひもとくことができた。本論文は、こうして得られた調査データをまとめたものである。

表 0-1 本論中に語りを引用させていただいた方々

氏名	プロフィール
Kh 氏	清水屋敷在住の男性。生まれも育ちも十六村で、2011 年の聞き取り当時 80 歳であった。現在にいたるまで農業をおこなってきた。「十六の古いことを聞くなら」と言われるように物知りで知られる。
St 氏	清水屋敷在住の男性。2011 年の聞き取り当時 89 歳であった。米づくりが達者で人より収穫が多いことで知られている。
Ts 氏	清水屋敷在住の男性。2010 年当時の自治会長であった。清水屋敷内で飲食店を経営している。
Ky 氏	海戸在住の男性。昭和 30 年に十六輪中に移住してから、旧地主家の古文書調査、古老への聞き取りなどを通して、十六輪中の歴史を研究してきた。
Yd 氏	海戸在住の男性。2011 年当時 63 歳であった。高校教員や岐阜県図書館などに勤務する傍ら、十六輪中で米づくりをつづけている。改良組合に所属しており、水管理を担当している。
Tg 氏	北屋敷在住の男性。2010 年当時 59 歳であった。かつて小学校教諭をつとめていた。田んぼは所有しているが、現在稲作はおこなっていない。
Wd 氏	北浦在住の男性。Wd 氏は 2011 年当時 48 歳であった。改良組合、営農組合に所属しており、現役で農業をおこなっている。
Og 氏	大野在住の男性。前自治会長をつとめた。
Yk 氏	清水屋敷在住の男性。2011 時点で 68 歳であった。市議会議員をつとめていた。
Km 氏	清水屋敷在住の男性。2011 年当時 69 歳であった。
Tn 氏	清水屋敷在住の男性。慶円寺の住職をつとめている。

※氏名は、匿名性を高めるためにイニシャルで記している

なお調査にあたっては、2011 年から 2012 年にかけて「持続可能な地域づくりからみた災害時の地域連帯に関する基礎的研究 木曽三川輪中地域における水防活動を事例にして」とのプロジェクト名で、日本科学協会より研究助成をうけた。

これらの研究の成果は、日本宗教学会、日本民俗学会、日本生活学会で報告などを重ねてきた。国内学会のほか、2012 年には、北京でおこなわれた The Second Asian Forum of Anthropology and Ethnology で、日本の氾濫原における灌漑の事例として発表した。また学術的な場のみならず、2014 年には中部 E S D 拠点協議会による「伊勢・三河湾流域圏 ESD 講座」において揖斐川下流域講師を担当し、伊勢・三河流域圏の持続可能性について議論した。

4. 本論文の構成

本論文は、以下の5章からなる。

第1章「輪中の自然環境と歴史」では、輪中の舞台となる木曾三川下流域の自然環境を論じ、そのなかで輪中がどのように開発され、それによって何がおこり、どのように近代化していったのか、歴史的経緯と変容を明らかにする。

第2章「十六輪中の環境」では、十六輪中の水環境と水害の仕組みを整理したうえで、どのように輪中堤防が形成されてきたかを論じる。さらに社会組織と生業の特性を述べ、その現代的変容を分析する。

第3章「水制御の技術」では、十六輪中でおこなわれている水利用、水防、水管理方法について、技術の詳細を明らかにする。現代の水制御方法に加え、聞き取りや古絵図を用いることで、歴史的変遷についても論じていく。

第4章「水の神性」では、十六輪中における寺社と年間の祭礼行事についてまとめたうえで、水にまつわる神性をあらわす具体例を提示する。

第5章では、考察として各章で論じてきたデータをまとめ、十六輪中における水制御技術と水の神性が、共同体の構造にどのようなかたちで結びついているかを分析する。

最後に結論において、本論文における問題意識を再確認したうえで、考察の全体像を提示した。

注

(1) それを表しているのが、河川法の改定である。平成9年（1997）に改訂された河川法では、河川管理の目的を以下のように定めている。

第一条 この法律は、河川について、洪水、津波、高潮等による災害の発生が防止され、河川が適正に利用され、流水の正常な機能が維持され、及び河川環境の整備と保全がされるようにこれを総合的に管理することにより、国土の保全と開発に寄与し、もつて公共の安全を保持し、かつ、公共の福祉を増進することを目的とする〔法令データ提供システム HP〕

改正後の河川法においては、従来の目的であった災害を防ぐための「治水」、適正に利用するための「利水」という二柱にくわえて、「河川環境の整備と保全」が加わっている。「河川環境の保全」が、河川管理の目的のひとつになったのである。目指されているのは、治水や利水の機能だけでなく、「公共の福祉を増進」するような、つまり河川と人間のよりよい関係を築けるような河川管理である。この改正の背景には、河川と人間の関係が悪化している（「福祉」が失われている）という問題意識が読み取れる。

(2) たとえば技術思想的研究においては、科学技術の構造と、そこにどのような問題が潜んでいるかを指摘した村上陽一郎の研究のほか、科学技術という理性にたいする感性の必要性を提唱する研究や、技術批判の変遷と技術への合意形成の可能性を問う研究が展開されてきた〔村上 1986、1994、吉田 1972、加藤 2001〕。また自然と人間の関係をどのように位置づけるかという環境生態史や環境倫理学の研究がさかんにおこなわれている。たとえば、環境考古学の立場で人間と自然環境のかかわりから文明のもつ思想性を解明してきた安田喜憲

(1946-)の研究群が知られているほか、蓄積されてきた地域研究・事例研究を体系化する動きもすすんでいる。両者はいったいどのような関係にあるのが望ましいのかという哲学的な研究も蓄積されており、学際的に注目の高いテーマとなっている〔安田 1991、2004、2006、池谷 2003、2009、伊東編 1996、加藤 1998〕。

(3) 〔伊藤編 1996:148〕

(4) 岐阜県庁の河川管理課職員からの聞き取りによる(2011年2月22日)。また国土交通省木曽川上流河川事務所職員もまた、十六輪中の特殊性を次のように語った。「荒崎の十六町は特別。そのまま堤防が残っている。あの辺りは揖斐川の水が帰って来ちゃって、抜けない水が集まっている。十六輪中は単純に輪中として残ってる。河川堤防としてではなく」(2011年2月18日聞き取り)。

(5) 〔馬淵ほか 1980:67〕

(6) 〔高橋 1983:40〕

(7) 輪中地域では、水神信仰があることが報告されている〔中澤編 1936:221-222〕〔安藤編 1975:216-217〕〔伊藤ほか 1979:100-104〕。これらの記述によれば、輪中地域の水神の多くは堤防の上に祀られている。なかには洪水で漂着したものをその場に祀った場合もあるが、多くは堤防の守護神としての神である。水神は、過去の決壊地点あるいは危険箇所祀られている。つまり洪水からまもってくれる、「水難除けの守護神」という位置づけをもつ。同時に洪水時の避難所や、危険箇所を後世に伝えるために、実際の防災的機能も果たしている。

(8) 国文学者であり民俗学者である石上堅(1908-1994)や、その息子で上代文学の民俗学的研究が専門の石上七鞘(1947-)は、日本における水の神性が、和歌や地誌などの文学テキストのほか、伝承、祭礼、しきたりなどのさまざまなかたちで、多彩な内容でもってあらわれていることを明らかにしている〔石上 1964〕〔石上 1979〕。

(9) 十六輪中の水環境について調査をおこなった名古屋大学文学部社会学研究室的田中先生から、十六輪中についての話をうかがったことも、十六輪中をフィールドとするきっかけとなった。

第1章 輪中の自然環境と歴史

本章では、輪中の舞台となる木曽三川の下流域の自然環境を論じたうえで、輪中がどのように形成され、現代に至るまでにどのような変容をみせてきたかを論じる。濃尾平野はどのような特性のある土地であり、そこになぜ輪中が形成されたのだろうか。そして輪中はどのように発展し、それによって何がもたらされたのだろうか。

第1節 輪中の自然環境

1. 木曽三川と濃尾平野の形成

木曽三川

「木曽三川」とは、木曽川、長良川、揖斐川、の三川を合わせた呼称である。国土交通省による河川区分では、「木曽川水系」にあたる。現在これらの三川は、河口部で揖斐川と長良川が合流しているほかは、独立して流れている。その意味では「同じ流域内にある本川、支川、派川およびこれらに関連する湖沼」という「水系」の概念にあたらない〔国土交通省ホームページ〕。しかし後述するように、かつて三川は、複数の支川によってつながっていた。そうした歴史的な形態から、三川をひとまとまりにした「木曽三川」の呼称が定着している。

図 1-1 は、木曽三川の流域を表す地形図である。

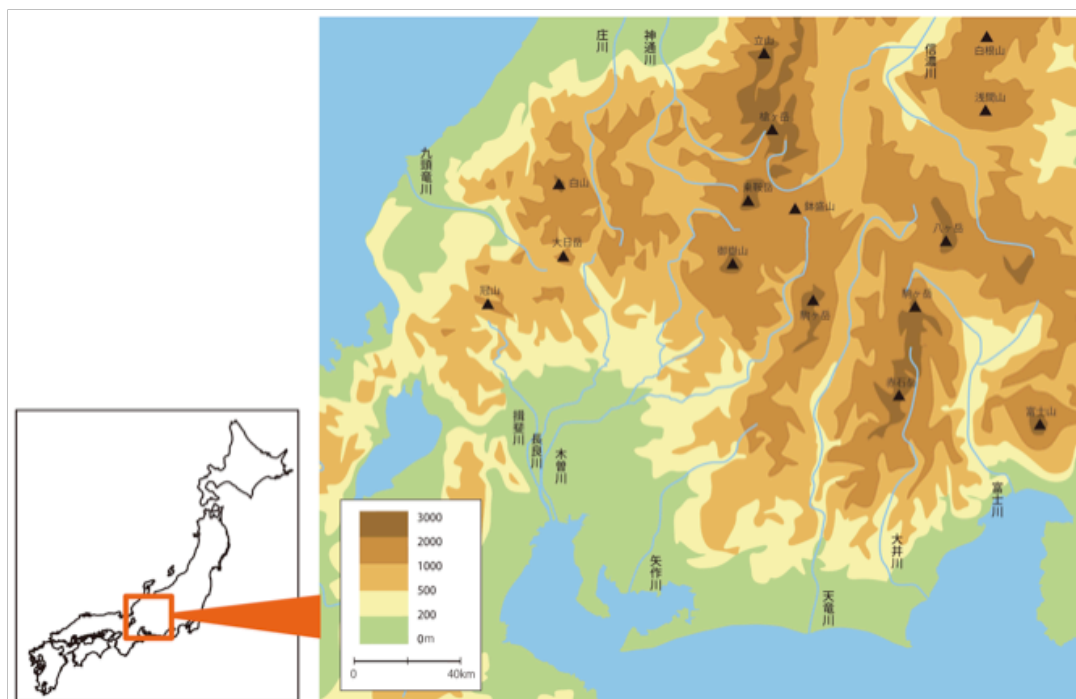


図 1-1 木曽三川全域地形図

国土地理院日本周辺図 500 万分の 1 をもとに作成

木曽川は、長野県に位置する標高 2446 m の鉢盛山を水源とする。木曽谷の溪谷を抜けて最大の支流飛騨川と合流する。そして濃尾平野に出たあとは、長良川と併流して伊勢湾に注ぐ。河川延長 229km、流域面積 5275km²の、三川でもっとも大きな河川である。

長良川は、岐阜県に位置する標高 1709 m の大日岳を源とする。山間を流下したのち濃尾平野に流れ出て、東側に木曽川、西側に揖斐川をあわせて流れ、河口部で揖斐川と合流して伊勢湾に注ぐ。河川延長 166km、流域面積 1985km²の河川である。

揖斐川は、岐阜県に位置する標高 1257 m の冠山を水源とする。山間を南流しながら濃尾平野に流れ出て、長良川と併流したのち河口部で合流する。河川延長 121km、流域面積 1840km²の河川である。

木曽三川を合計した流域面積は、9100km²という広大な範囲にわたる。そのうち流域に占める山地の割合が大きく、急峻な山間部を流れた水が平野部に注ぐ形態をとっている。またそれぞれの水源は離れているが、濃尾平野に流れ出たあとは平野西部に集合する。

表 1-1 河川延長と流域面積

河川	河川延長 (km)	流域面積 (km ²)
木曽川	229	5.275
長良川	166	1.985
揖斐川	121	1.840

国土交通省データより作成

濃尾平野の堆積と地形

山地に発する木曽三川は、流下とともに土砂を運ぶ。濃尾平野は、(1) 氷期の海面低下期に河川から運びこまれた土砂 (礫層)、(2) 間氷期の海面上昇期に侵入した海底の泥層、が重なりあうように堆積して形成された [東海三県地盤沈下調査会 1985 : 35]。

海津は、地形、地質、遺跡などから濃尾平野における土砂堆積域の変遷を検討した。図 1-2 は、それによって明らかにされた平野の形成過程である。濃尾平野においては、後氷期の急激な海面上昇 (縄文海進) によって、深く入り込んだ内湾が形成された。しかし縄文時代中期頃に若干の海面低下が起こり、土砂の堆積が進んだ。土砂の堆積域は、北東部から南西部へと徐々に移行し、木曽川の主流は、縄文時代中期後葉 (4300yrsBP) 以降、東部から西部へと移行した。これらの

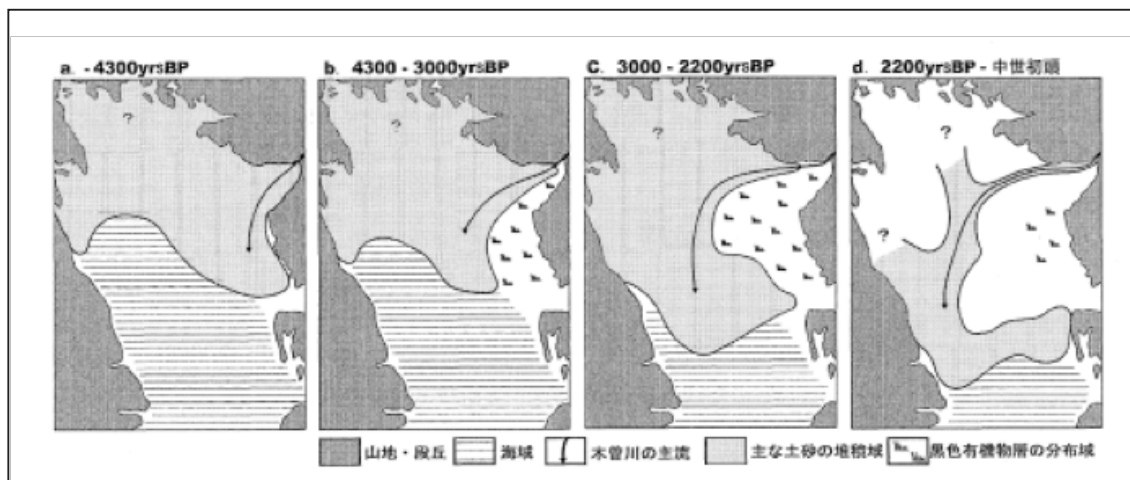


図 1-2 濃尾平野における地形環境の変遷

海津ほか 2004 : 292 より転載

移動傾向は、後述する濃尾平野の傾動運動と対応している。縄文時代後期に再び海進がおこるが、その後若干の海面低下があった。縄文時代晩期（3000yrsBP）以降には木曽川が顕著に西流し、海側地域で土砂が集中的に堆積した。これによって、海岸線の海側への急速な前進が進んだと推測される〔海津ほか 2004〕。

このように濃尾平野の成立は、河川がもたらす土砂の堆積が海進を上回ることによってはじめて可能となった。こうしてできた濃尾平野の地形は、図 1-3 のように扇状地の発達した地域、自然堤防と後背湿地からなる氾濫原、三角州の発達した地域、人為的な埋立地に分けることができる。それぞれの範囲が、北東から南西にむけて斜めに配列しているのが特徴的である。これは、木曽川の勢力がもっとも大きかったことと、後に述べる濃尾平野の傾動運動が影響している。

扇状地は、山間から平野に出た河川が運搬してきた土砂のうち、砂礫部分が堆積して形成される。河川は氾濫のたびにより低いところを求めて流れるため、砂礫はまんべんなく堆積する。ゆえに扇状地は、半円錐形の地形となる。等高線から分かるように、濃尾平野の扇状地は海拔 10m 以上の緩やかな傾斜地となっている。比較的荒い砂礫が堆積しているため排水条件は良好だが、地表水が少なく土壌が保水性に欠けることで、水不足になりやすい。ただし扇状地の末端部分では、地下水が地表付近にあらわれるため湧水がみられる。

氾濫原は、自然堤防と後背湿地によって特徴づけられる。自然堤防は、河川の氾濫によって



図 1-3 濃尾平野地形図

東海三県地盤沈下調査会 1985：8 頁をもとに作成

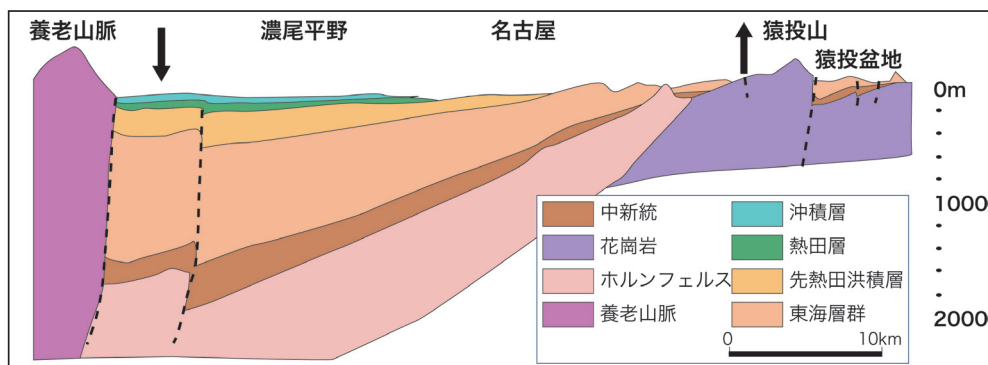


図 1-4 濃尾平野傾動図

東海三県地盤沈下調査会 1985：39 をもとに作成

形成された帯状の微高地である。洪水時に河道から溢流した水が流速を失い、運搬していた土砂のうち比較的粗粒な砂を河道沿いに堆積させることによって形成される。後背湿地は、自然堤防にはさまれた部分にあたる。一般に低湿で、河川の氾濫であふれた水がしばしば湛水する。濃尾平野の氾濫原は、標高 0 m から 10 m の範囲に該当する。とくに平野東部で自然堤防が顕著に発達していることは、木曽川とその支流が縦横無尽に流れていたことをあらわしている。

三角州は、河川が運搬する土砂が河口付近に堆積して形成される。比較的細かい粒土からなり、低平な地形となる。濃尾平野の三角州は、ほとんどが海拔 0 メートル以下となっている。傾斜がないため、自然排水が困難になりやすい。そして三角州以南の臨海域には、江戸時代以降に造成された埋立地が形成されている。埋立地は三角州と同様に低平で傾斜がなく、干満や塩の影響を受ける。

濃尾平野の傾動

図 1-4 は、濃尾平野の地質構造を表したものである。

濃尾平野の西側は養老山脈の断層につきあたるが、東側は丘陵地帯に漸移的に移行している。東西をむすぶ地層は非対称となっている。これは、養老山脈の断層を境にして西側が沈降し、東部の猿投山塊が隆起する地殻運動がおこなわれていることを表す。濃尾平野は、この沈降部に形成された堆積平野である [濃尾平野の地盤沈下と地下水 1985：9]。

こうした地殻傾動の影響により、濃尾平野は東が高く西が低いという傾斜が形成されている。この傾動によって木曽三川は、濃尾平野に流れ出たあとは平野の西部に集中することになる。

2. 降水量と地下水

降水量と気温

図 1-5 は、木曽三川流域における年間の降水量を表したものである。

図から分かるように、三川流域の降水量のうち、とくに揖斐川、長良川上流域の降水量は多く、2000mm から 3000mm におよぶ。これは、日本の平均降雨量の 1718mm をはるかに上回る数値である [国土交通省ホームページ]。この大量の雨が、木曽三川の豊かな水源となっている。降水量は、下流域にいくほど降水量が少なくなり、河口にほど近い桑名の年間降水量は、

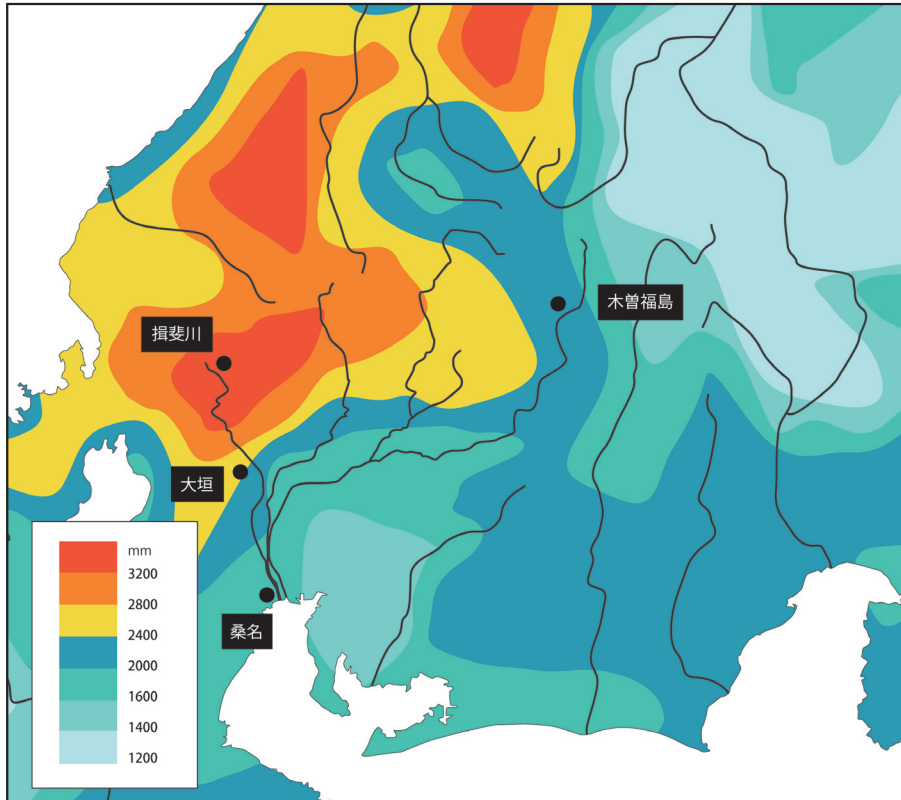


図 1-5 木曾三川流域雨量図

ナショナルアトラス 1990 年をもとに作成

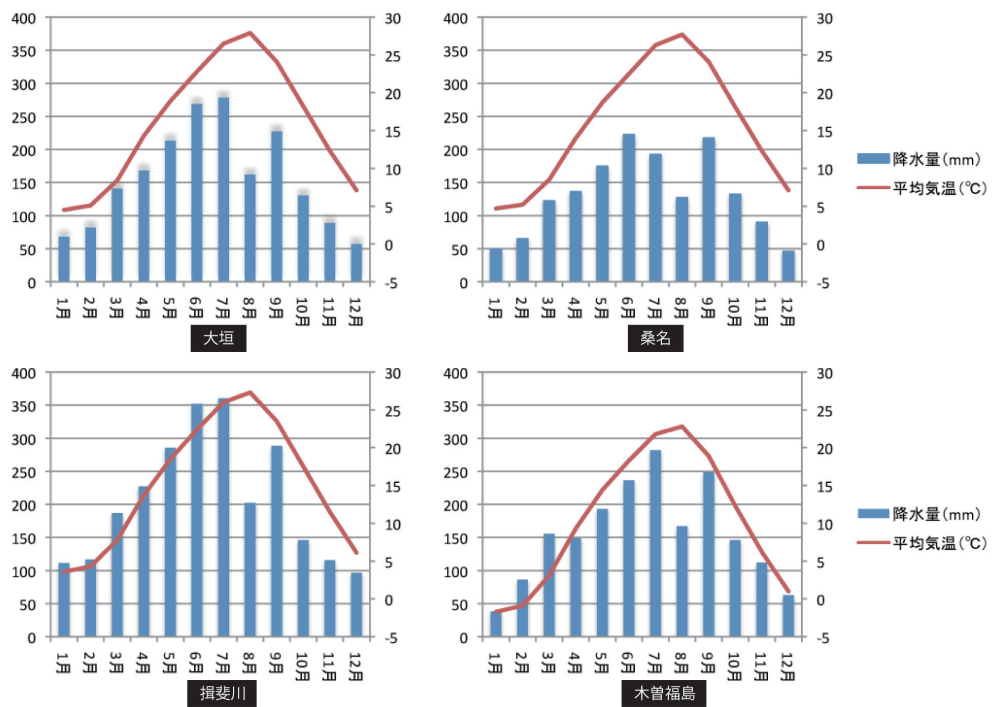


図 1-6 大垣、桑名、揖斐川、木曾福島の雨温図

気象庁過去の気象データをもとに作成

1500mm 程度である。なお揖斐川、長良川流域に比すれば、木曽川流域は降水量が少ない。

これらの降水量は、1 年のうちでどのように推移しているのだろうか。図 1-6 は、三川の上流域、中流域、下流域の四箇所における年間の降水量と気温の推移をあらわしたものである。1981 年から 2010 年までの気象庁観測値をもとに作成した。

まず降水量についていえば、いずれの地域も 6 月、7 月の降水量がもっとも多い。そして 9 月に二次的なピークを迎える。これらは、梅雨と台風の影響による降水である。反対に、もっとも降水量がすくないのは、12 月、1 月である。揖斐川上流域では 1 月の降水量が 100mm を超えているが、これは降雪をあらわしている。このように木曽三川流域においては、上流、中流、下流のすべての地域で、夏期に大量の雨をかかえこむことになる。

また気温についても、上流、中流、下流域ではほぼおなじ放物線を描いている。つまり 1 月にもっとも下がり、8 月に高温のピークを迎える。以上のことから、輪中地域は夏期に多雨高温となる気候条件であると言える。この気候は夏期作物の育成に適した条件であるが、栽培の最中に出水のピークを迎えることを表す。

地下水

豊富な降水は、地下水をも涵養する。なかでも濃尾平野の扇状地末端以南では、「自噴性の地下水」が湧くことが知られている。図 1-7 は、自噴性地下水の仕組みを表したものである。

地中のうち、地下水によって満たされている部分を「帯水層」とよぶ。帯水層は、不圧地下水と被圧地下水に分けられる。不圧地下水は、地下の浅い場所に存在し、土壌の粒子のすき間を通して地表とつながっているため、圧力は一気圧である。被圧地下水は、地下の深いところに存在し、水をほとんど透さない「難透水層」という地層にはさまれている。難透水層でふたをされているので、大気圧より大きな圧力を受ける。この被圧地下水が地上に噴出したのが、自噴性の地下水である [井田 2009:103]。この性質を利用した井戸を「自噴井」と呼ぶ。輪中地域では、ひろい範囲で自噴井が利用されてきた。

なぜ、濃尾平野でこうした自噴性地下水がみられるのだろうか。先述のように濃尾平野は、

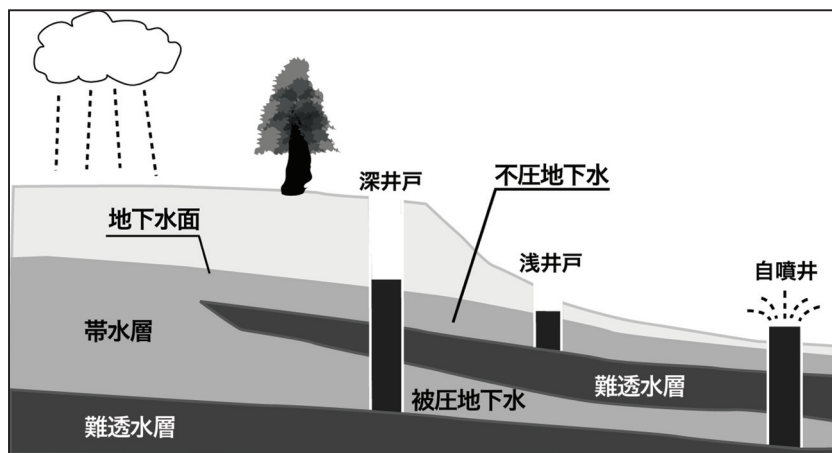


図 1-7 自噴性地下水の仕組み
井田 2009 : 103 をもとに作成

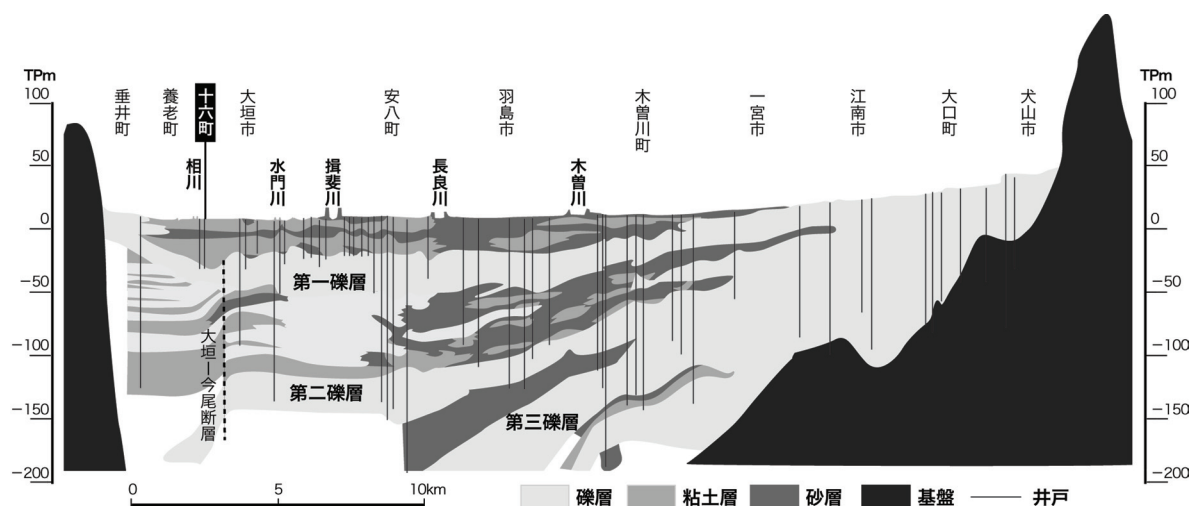


図 1-8 濃尾平野地質断面図

東海三県地盤沈下調査会 1985：69 をもとに作成（縦の棒線は、調査に使用した井戸の深度を表している。）

河川がもたらす土砂の礫層と、海底の泥層が重なりあうように堆積して形成された。その地質の断面は、図 1-8 のようになっている。この図は垂井町から犬山市まで濃尾平野を東西に分断した断面図である。これをみると、礫層と粘土や砂層が交互に堆積していることが分かる。このうち、粒径の大きな礫層は、地下水を導く帯水層の役割をする。また粒径の小さな泥層は、より深い層にある礫層の地下水を被圧地下水にする加圧層の役割をする〔東海三県地盤沈下調査会 1985：35〕。こうした地質の堆積構造により、濃尾平野にはひろい範囲で被圧地下水つまり自噴性の地下水帯が分布している。

しかし濃尾平野の自噴性地下水帯は、近代以降縮小しつつある。図 1-9 は、自噴性地下水帯の変遷を表したものである。図から分かるように、その分布域は大幅に縮小している。1930 年代には木曽三川下流域の全体と春日井市をつなぐひろい範囲に分布していた自噴性地下水帯は、1960 年代には木曽川以東では見られなくなる。その後も縮小の一途をたどり、1970 年代後半には、揖斐川以西でしか自噴が確認できなくなった。このように濃尾平野における自噴性の地下水帯は、西へ西へと後退し

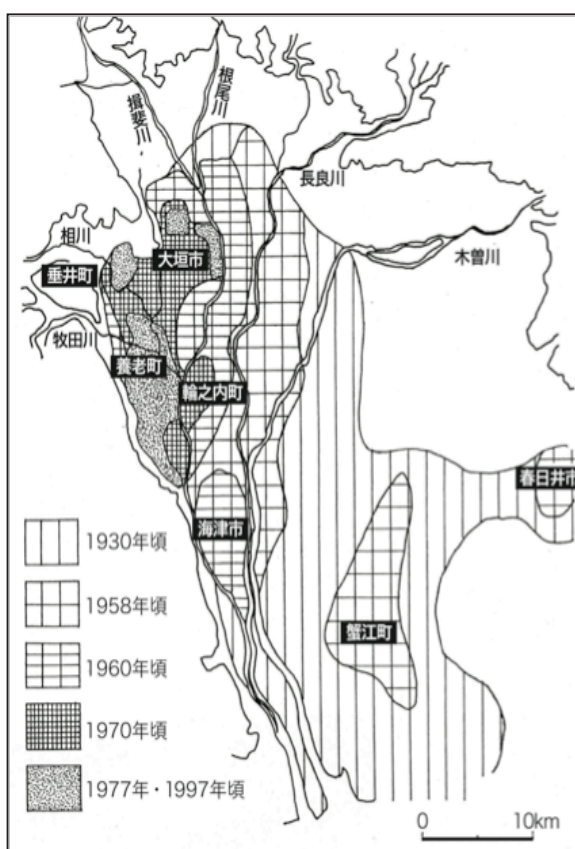


図 1-9 濃尾平野の自噴性地下水帯分布の変遷

大垣市 b 2010：283 に一部加筆

てきた。地下水帯の分布域が縮小している原因のひとつは、高度経済成長を背景にした工業のための揚水量の増大にあると考えられる。

3. 河道の変化

多量の降水をあつめて流れる木曾三川は、濃尾平野を縦横無尽に流れることで土地をつくりあげてきた。三川の流れは現在のように固定されたものではなく、堆積の過程でその道筋を変化させることもあった。また、人間がはたらきかけて河川の河道を変化させることもあった。

(1) 自然の力による河道の変化

自然の力による河道の変化とは、洪水による流路変更を指す。洪水によって大量の水が流出した河川は、それまでの流路をはずれ、新たな河道を探しだして流れていく。図1-10は、三川の河道の変化をあらわしたものである。とくに木曾川は現在とおおきく異なる流路をとっていた。井関によれば、1586年以前の木曾川本流は、現在の境川のあたりを流れ長良川に合流していた。そしてその支川は、幾筋も分派する形で南下し、現在の日光川や庄内川の方面に流れ込んでいた。

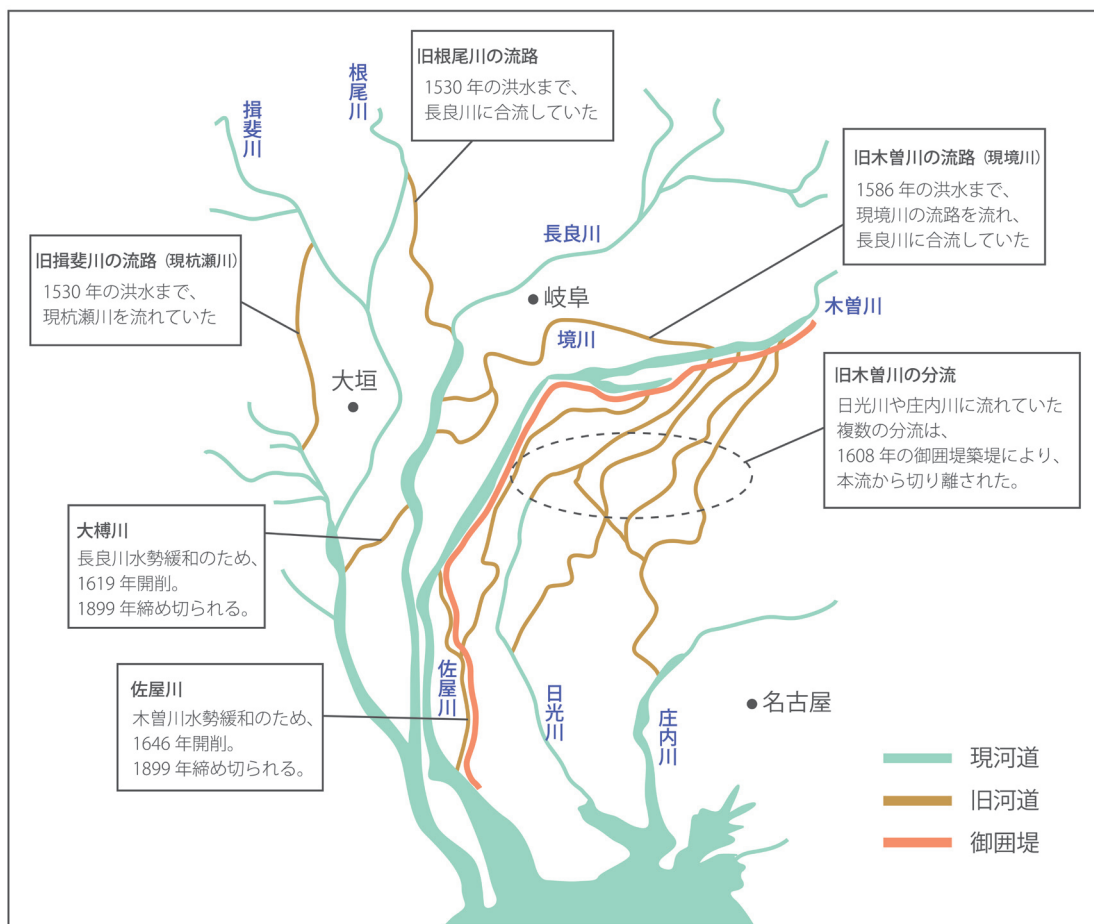


図 1-10 木曾三川の河道変遷図

水資源開発公団ほか 1988：47-49、木曾三川その流域と河川技術編集委員会 1988：155-168 をもとに作成

それが、1586年（天正14）におこった大洪水によって、木曾川の主流はほぼ現在の状態におおきく流路を変えた。激流は尾張国葉栗郡、中島郡にあった村々を押し流し、「境川」の文字通り国境を変えることとなった〔木曾三川その流域と河川技術編集委員会 1988：163〕。

（2）人為的な河道の変化

このように圧倒的な自然の力のみならず、人間もまた人為的に河道を変容させてきた。人間が河川を変化させる方向性は、河川流路を増やすものと減らすものに分けられる。

河川を増やすもの、これは新たな流路の開削を指す。図1-10でいえば大樽川、佐屋川がこれにあたる。これらの河川は、三川本流の放水路的な性格を持つ。佐屋川は木曾川の、大樽川は長良川の水流を逃がすことを目的として開削された。しかしこれらの河川は、最終的には廃川となる。大樽川の開削によって、水量の増えた揖斐川筋の水害は大きくなった。そのため後に述べる宝暦治水において、大樽川の流量を減らすことが試みられる。そして1899年には締め切られることになった。また佐屋川は、放水路のみならず水運としても活用した。しかしそののち河床に土砂の堆積がすすみ、本来の役割を果たすことができなくなる。大樽川とおなじく1899年には分派口と合流口が締め切られ、廃川となった〔木曾三川その流域と河川技術編集委員会 1988：165〕。

河川流路を減らす例としては、御囲い堤の築堤にともなう旧木曾川支流の締切があげられる（図1-10）。御囲い堤とは、1608年に木曾川左岸に47kmにわたって築かれた堤防である。御囲い堤の築堤によって、本流が移動した後も流れていた複数本の支流は締切られ、木曾川本流の河道はほぼ現在の位置に固定されることになった⁽¹⁾。

そして河川を減らす試みの典型例であり、木曾三川下流域において長期間にわたって最大の目標とされたのが、「三川分流」である。三川分流工事は、輪中の歴史と密接にむすびついているため、詳細については次節で述べる。

以上で見てきたように、濃尾平野の木曾三川流域は、豊富な降水を集めた三川が土砂を運びながら乱流することで形成された。豊富な水とそれゆえの不安定さが、この土地の性質の基盤となっている。しかし人々は、そうした不安定な土地へ積極的にはたらきかけていった。輪中は、そのはたらきを端的に示すものである。次節では、輪中が形成される歴史的経緯について論じていこう。

第2節 輪中の歴史

1. 輪中以前

遺跡の分布

図1-11は、濃尾平野における縄文および弥生時代の遺跡分布図である。

縄文遺跡は、木曽川扇状地とその前縁部の氾濫原、また平野南東部の段丘に集中している。現在の平野周縁部にあたる、傾斜地や自然堤防などの微高地が利用されていた。それにたいして三角州や、木曽川以西の氾濫原においては遺跡が出土していない。第1章で論じたように、濃尾平野の堆積は北東部から南西部にかけて進んだ。縄文遺跡が出土する場所は、土砂堆積によって安定した土壌がすでに形成されていた土地と考えられる。

なお遺跡の分析から濃尾平野の堆積過程を考察した海津は、次のことを指摘している。濃尾平野西部の扇状地には、縄文時代中期前半に最盛期をむかえる庭田貝塚と、その3km南に位置する縄文時代後期後半に最盛期をむかえる羽沢貝塚がある。前者がアサリなどの主鹹貝塚であるのに対して、後者はシジミなど主淡水貝塚となっている。つまり庭田貝塚の全盛期（縄文時代中期前半）には塩水の影響が強かった内湾が、羽沢貝塚の最盛期（縄文時代後期後半）までには堆積が進んで淡水の影響が強くなっていたのである〔海津 1994：238〕。縄文時代のさなかにも、濃尾平野の形成は進行し、それにともない人の居住可能地域は拡大しつつあった。

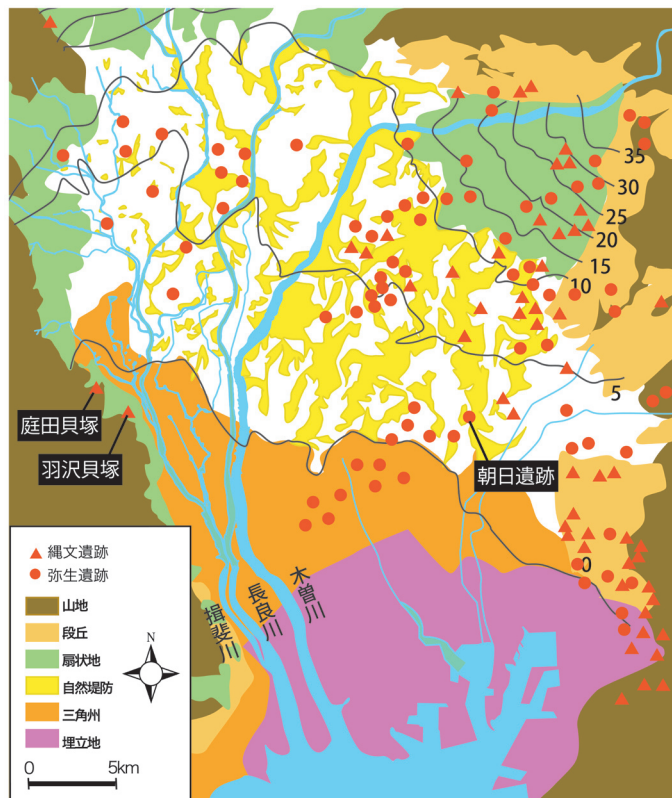


図1-11 濃尾平野における縄文、弥生遺跡

東海三県地盤沈下調査会 1985：23、海津 1994：221 より作成

弥生時代になると遺跡数は増加する。遺跡は、縄文遺跡の分布範囲に加えて、平野の西側と南側の氾濫原、一部三角州へと拡大している。さらに現在は長良川と揖斐川に挟まれた、三川が合流する氾濫原へも進出している。弥生時代にかけて、安定的に居住できる範囲が広がったものと推測される。

さて、不安定な濃尾平野に進出してきた彼らは、どのような生活を営んでいたのだろうか。濃尾平野南東部の氾濫原に位置する朝日遺跡（愛知県清須市）は、東海地方でも有数の規模を誇る遺跡である。出土品からは、彼らの生業をうかがうことができる。

彼らは、動物資源としては、湖沼や河川を含んだ低湿地に生息する貝類（オオタニシ、クロダカワニナ）、魚類（コイ科、ナマズ属など）、鳥類（カモ亜科、ガン亜科）を積極的に利用していた。また低湿地を好むイノシシも多く出土しており、遺跡周辺の低湿地に生息する各種の動物を利用していたことが分かる。また遺跡からやや離れた森林地帯に生息するシカも出土していることから、森林に出向いて狩猟をおこなっていたものと考えられる。また植物資源としては、オニグルミ、ドングリ、クリ、トチノキ、ブドウなどを採集していた。栽培植物と考えられるものとしては、モモ、イネ、キビ、アワ、エゴマ近似種、シソ近似種、メロン仲間、ヒョウタンなどがある。また水田跡や炭化米も見つかっており、稲作もおこなわれていた〔愛知県埋蔵文化財センター 2007〕。以上のことから朝日遺跡の住民は、水田を利用した稲作、植物採集、野菜栽培、魚介類や鳥類、ほ乳類の狩猟、などを複合的にこなう生活を営んでいたと推測できる。

条里地割と稲作

7世紀の古代日本では、律令国家のもとで土地管理がおこなわれていた。その基本となるのは、戸籍によって権利を確立した人々に口分田を分与して税を負担させ、死亡後に収公する「班田収授」のシステムである。しかし養老7年（723）には、あらたに灌漑設備を開発して開墾した土地について3代の保有を許す「三世一身法」がみとめられる。さらに天平15年（743）には、開墾地の永久保有をみとめる「墾田永年私財法」が發布され、死後収公せずともよい私有地が認められることになった。こうした一連の経緯によって水田の開発は進み、墾田は増大した。

地理学者の金田（1946-）によれば、それまで以上に正確な土地管理が必要になったために整備されたのが「条里プラン」である。金田は、これまで班田収授法と同時に成立したと考えられてきた「条里制」と差異化するため、「条里プラン」の用語を用いている。条里プランとは、面積一町の各方格に番号をつける条里呼称法と、それに由来する地割による土地表示体系を指す。条里プランにおいては、面積一町（1ヘクタール）の方格を「坊」と称し、それを縦横六個ずつ集めた正方形を「里」と名付け、里の列を「条」と呼ぶ。条里と呼ばれるゆえんである。これによって、精度の高い土地管理が可能になった〔金田 1999：36-44〕。

こうした条里プランの形跡を分析することで、古代日本に整備・開墾された土地状況を垣間見ることができる。濃尾平野の条里地割については、歴史地理学者である水野時二（1914-2014）がその詳細を明らかにした〔水野 1971〕。次頁の図1-12はその分布範囲を単純化して示したものである。濃尾平野における条里地割の分布域は、縄文および弥生遺跡の分布域を大きく抜け出るものではない。段丘部など傾斜が著しい地域には少ない代わりに、平野周縁部の扇状

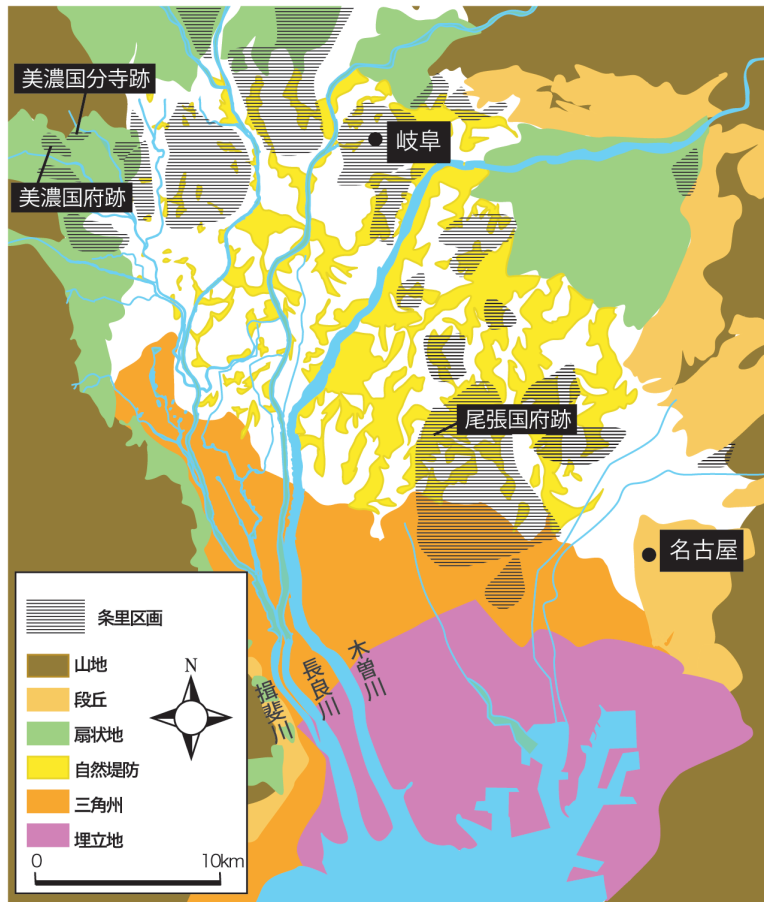


図 1-12 濃尾平野における条里地割の分布域 水野 1971 をもとに作成

地末端部から自然堤防が発達した氾濫原にかけて分布している。こうした地域では、地形がゆるやかに傾斜しており、また湧き水が発達している。これは、平坦な水田をもうけること、人工灌漑のために導水すること、中干しのために排水すること、など高度な技術を要する灌漑稲作に適した条件である。そしてまた、濃尾平野における国府や国分寺跡は、それぞれ条里地割の分布域と合致している。すなわち濃尾平野の周縁部は、中央集権国家の影響のもと、高度な技術をそなえた稲作技術や、それにまつわる文化の影響下にあったものと考えられる。

海民と教団の世界

以上のように濃尾平野の開拓の歴史は古く、また活発であった。ただし遺跡や条里の分布は、いずれも扇状地や氾濫原など濃尾平野の周縁部にとどまり、南西部や河口部には及んでいない。安藤は、木曽三川が合流する南西部の氾濫原や三角州地帯は、わずかな微高地を利用するにとどまる状態で近世を迎え、近世をむかえるまでは積極的には利用されなかったであろうと推測している [安藤 1988 : 32]。

もっとも安藤自身が指摘しているとおり、これは水田稲作を基調とした見方である。以下の先行研究では、中世の三川の河口部において、稲作とは異なる生業を持つ人々の世界があったことが明らかにされている。

歴史学者の網野善彦（1928－2004）は、中世の桑名（三重県桑名市）を中心とした伊勢湾海域において、「海民」と呼べる人々が活動していたことを解明した。網野は、桑名周辺の益田荘について書かれた宝治二年（1248）の申状を分析した。この申状を読み解くと、平安末期から鎌倉初期の桑名周辺は、次のような独自の繁栄を見せていたことが分かる。

伊勢湾周辺、木曾三川の河口には、「嶋々」とよばれる中州が多数散在していた。それは大地震が来れば海塵となって消え、それが数十年を経てふたたび陸地となってくるような、不安定な土地である。しかしそうした場所に作られる「瀬」は、漁場として好適である。そこでは漁撈に従事し、天皇に牡蠣を貢納する「供御人」が活動していた。彼らは荘園の単位を超えて活動する集団であった。彼らが他の供御人と同様の特権を与えられていたと考えるならば、漁撈のほかに、製塩、交易などをおこなう「海民」とも呼べる集団であったと考えられる。非農業民である彼らが生活する桑名は、税の免除、私的な隷属関係からの解放、自由通行権の保証、縁座制の適用外、商いの平等な資格、などの点から「自由都市」であっただろう。ただし益田荘に棲む彼らは、嶋々の陸化が進行するとともに、田地を開発して農業をおこなう、農耕民としての性格をつよめていったと考えられる〔網野 1978〕。

また郷土史家の伊藤重信は、三川の合流地点に位置する長島（三重県桑名市長島町）において、中世に宗教的な一大拠点が形成されていたことを論じている。

13世紀、長島の杉江郷に浄土真宗の願証寺が開かれた。願証寺は、親鸞の遺命で桑名に寺を開いた安田信慶の息子、仲祐によって結ばれた寺院である。東海地方の真宗教団は、本願寺第8世門主蓮如の巡錫によって発展し、三河、尾張、美濃に勢力を持っていた。願証寺はその拠点となったのである。願証寺を中心とした門徒集は、伊勢、美濃、尾張の農民漁民、十万余を擁したという。阿弥陀如来の本願によって来世の光明を求める彼らは、門徒による仏法王国の形成を目指していた。しかしこの巨大な勢力は、天下統一に乗り出した信長の足下の障害となった。また願証寺側が、石山本願寺の顕如上人の檄文に応じて仏法王国を護るために蜂起したことによって、抗争に発展した。これが長島一向一揆と呼ばれる、五カ年（1570－1574）にわたる抗争である。長島は、幾多の水路によって隔てられた島々からなる天然の要塞である。信長は二度にわたって長島を攻めたが、国侍である服部党と結んだ願証寺のゲリラ戦に手こずることとなった。しかし三度目の攻勢において長期にわたる兵糧攻めをおこなったため、願証寺側は兵糧が尽きて餓死者が増大、ついには降伏することとなった。さらに信長は、降伏した生存者にたいして一斉射撃をおこなったうえ、砦に追い込み二万人を焼き殺すという、徹底した制圧をおこなった。それほど、長島に形成されていた勢力は強大だったのである〔伊藤 1974：26-89〕。

このように濃尾平野木曾三川流域は、輪中が形成される以前から開拓がすすめられていた。そこでは稲作、漁撈や交易など、いずれも豊富な水を利用する生業が営まれ、独自の文化を形成していたものと考えられる。そして、水の豊かなこの土地で、さらなる恵みを享受しようという試みが輪中の形成を促すことになる。

2. 輪中の形成

輪中の形成と新田開発

安藤は、濃尾平野にはじめて「輪中」が形成されたのを1600年頃と推測している〔安藤1988：320〕。その背景には、日本列島に新田開発の機運が高まったこと、河川の流れに耐えうる堤防を築くための土木技術が発展したこと、があげられる。

図1-13は、輪中の発達過程をモデル化したものである。安藤によれば輪中は、「部分堤」から「懸廻堤」へ発達する過程で形成された。部分堤とは、連続して流れる河川に対して、限られた一部分にだけ設けられた堤防である。部分堤は、洪水の激流が集落や耕地に直撃することを防ぐ。水衝部に限って堤防を築き、下流部が尻無しになっているため、築捨堤や尻無堤とも呼ばれる。あくまでも激流の直撃を防ぐものであるため、静かに侵入してくる水を防ぐものではない。よって、堤防の下流部から、洪水は緩やかに侵入する。ただし侵入は緩やかで、かつこの段階では周囲に多くの遊水地があるため、侵入する洪水の水位は高くない。自然堤防などの微高地に集落や耕地が設けてあれば、洪水の被害は大きくなかったものと考えられる。

部分堤の段階を経て、住民が自然堤防の周囲にひろがる後背湿地の開拓を試みたでしょう。つまり耕地を拡大しようという試みである。その場合、それまで堤防の下流部から自由に流入していた洪水を防ぐための堤防が必要となる。すなわち部分堤は懸廻堤となり「輪中堤防」が誕生する。これによって、低湿な後背湿地も水田として開発することが可能になる。すなわち輪中堤防とは、新田開発を目的として築かれたものであった。輪中堤防は、直接的には水防の役割を果たすが、それを必要とするのは、後背湿地における新田の開発なのである。

輪中の定義

「輪中」という語は、どのように定義することができるだろうか。安藤によれば「輪中」は、学術的な分析用語ではなく、自然発生的で慣用的な用語である。そのため多義的な要素を含んでいる。たとえば日本で見られる輪中の用法として、「惣中」「郷中」「村中」のように地域住民の

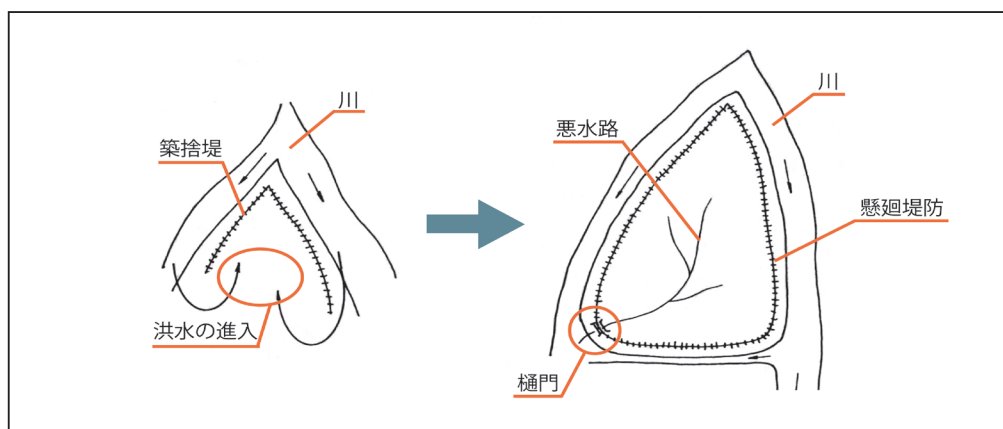


図1-13 輪中堤防の発達モデル

安藤1988：19に一部加筆

社会関係を表す意味で使用される場合や、山や川によって自然に区画された一定地域を指す場合がある。つまり、濃尾平野の木曽三川下流域に形成された輪中以外のものを指し示す場合にも、輪中の語を用いる事例はひろく確認できる。

それら広義の語彙を踏まえた上で安藤は、木曽三川下流域につくられた狭義の輪中を「懸廻堤によって囲繞された範囲内の地域の人命・財産、さらには耕地を外水から守るために組織された共同体」と定義している。「輪中」と言うとき、それが輪中堤防の存在する「場所」を指す場合もあるが、輪中の本義はあくまで「共同体」にある〔安藤 1988：10-12〕。伊藤もこの点を強調しており、輪中を「洪水から集落や耕地を守るために、その周囲に堤防をめぐらし、水防を紐帯として強固な共同体意識によって結ばれた地域社会」と定義している〔伊藤 1979：19〕。すなわち囲堤防があるだけでは輪中とは呼ばず、そこに暮らす人々の存在によってはじめて輪中と呼ばれるのである。

なお輪中を構成する物的要素としては、懸廻堤と樋門がある（図 1-13 右）。第一の要素である懸廻堤は、共同体の集落と耕地を包含する形に築かれた堤防である。ただしこれは、「その輪中の水防の必要の限度において囲繞されていれば十分」であり、完全な懸廻堤となっていない輪中もある〔安藤 1988：13〕。この懸廻堤によって、輪中外から入ってくる水を防ぐことができる。ただし、集落を懸廻堤で完全に囲ってしまえば、輪中内の水を外に排出することができなくなる。そこで設けられるのが、輪中内の水（悪水）を排水するための樋門である。樋門は開閉式となっており、排水するときは開き、水防の際は閉じる仕組みになっている。このふたつが、すべての輪中に共通する、基本的構成要素である。

水共同体と水制御

輪中堤防は、水を防ぎ、また内部の水を排水する機能をもつ。ただし、言うまでもなく輪中住民の生活にとって水は必要不可欠である。そのため輪中住民は、輪中の内部あるいは外部から生活あるいは農業用水を取り入れる。その方法は、輪中の水環境によって異なる。いずれにせよ輪中では、懸廻堤を介して「取水」「排水」「水防」がおこなわれる。言わば輪中堤防は水の出入を管理しコントロールするひとつの水管理装置であり、水管理システムとして機能する。

水を得ることと水を防ぐことは相対することのようだが、輪中堤防を介した水管理という点ではおなじである。こうした水の出入管理のための活動全体を、「水制御」と位置づけることができる。この水制御は、輪中住民全体の協働によって維持されている。安藤や伊藤は、輪中の定義においてそれが「共同体」であることを強調した。それは輪中住民の生活が、輪中の水管理システムの上に成立していることを指している。

河川研究者の宮村忠（1939-）は著書『水害』のなかで、水防と農業用の水利用を両立する、自然発生的な地域社会を「水共同体」と呼んだ。〔宮村 1985：200〕。輪中住民は、輪中堤防という人工的な水管理装置のもとで水防と水利用を両立させていた。水を紐帯とした輪中住民のありかたは、まさに「水共同体」と言えるだろう。すなわち輪中住民は、輪中という水管理システムのなかで協働して水制御をおこなう「水共同体」と位置づけることができる。

輪中の発展

図1-14は、安藤が明らかにした濃尾平野木曾三川下流域における輪中形成の推移を、50年ごとに図示したものである。

輪中開発の最盛期は、江戸時代初期の17世紀である。そのうち、1600-1649年にかけては、標高5メートル以下、とくに海拔0メートルの三角州地帯における輪中の発達が著しい。これは、低湿でそれまで積極的な水田利用がおこなわれていなかった三角州の開発が進んだことを表している。すなわち「開発のため」の輪中形成である。1650-1699年には、標高5-10メートルの自然堤防と後背湿地からなる氾濫原において、集中的に輪中が形成されている。これらの地域は、輪中築堤以前から自然堤防などの微高地を中心に集落が形成されていたと考えられる。さらなる「後背湿地の開発」を目指して、輪中が形成されたもの、あるいは、下流域の三角州における輪中開発の影響によって、「水防」の必要性が高まった可能性もある。

18世紀以降における輪中の開発は、17世紀の大規模な輪中形成に比べれば鈍化している。この時期に輪中が開発された場所は、標高10メートル前後の高位部や、輪中と輪中の間にある河川敷地内、河口部の干拓地、などである。そのうち標高10メートル前後という高位部の扇状地末端部における輪中は、それまで未開発であった場所が開発されたことで排水不良や逆水が増加し、水防の必要性が高まったために形成されたものと考えられる。既成の輪中と輪中のあいだの河川敷地内に形成された小規模な輪中は、河川敷に土砂が堆積して陸化が進んだ場所や、いまだ遊水地として残されていた場所であろう。なお河口部においては、土砂の堆積がすすむとともに輪中の干拓が拡大している。

なお輪中形成の特徴のひとつとして、輪中形成の推移とともに輪中が合同拡大していく傾向がある。小規模な輪中を取り込み、大規模な外廓輪中が形成されていくのである。それは、輪中の外を流れる水害の危険性をもつ河川に対して輪中同士が共同の懸廻堤をつくる作業であった。これは、築堤が小規模であった当時において、水害を防ぐための有効な方策であった。そのため、ひとつの外廓輪中に併合されても、拡大以前の小輪中が持っていた堤防が撤廃されることはなかった〔安藤 1988: 327-328〕。

3. 輪中の変容

輪中の矛盾

以上のような輪中の発展によって、それまで積極的に農地として利用されていなかった濃尾平野の木曾三川西部には新田が拡大していった。あらたな生産地を獲得しえたことは「開発」を目的に進められた輪中がなした大いなるプラスの側面である。ただし、輪中開発が引き起こす問題もあった。ここでは輪中形成がもたらしたマイナス面について、指摘しておきたい。

新田開発のために輪中が形成されると、洪水が自由に浸入する遊水地の役割を果たす土地はなくなる。また河道が固定されたことで土砂の堆積がすすみ、陸地より河川床のほうが標高が高い天井川化がすすむ。これらの影響によって、輪中内の水を外部に排水することが困難になり、輪中内部に悪水が湛水しやすくなる。さらに出水時には、河川の水圧が高まり堤防決壊の危険性が高まり、水が流下できず湛水が長期化する。こうした変化を受けて、それまで輪中堤防を必要

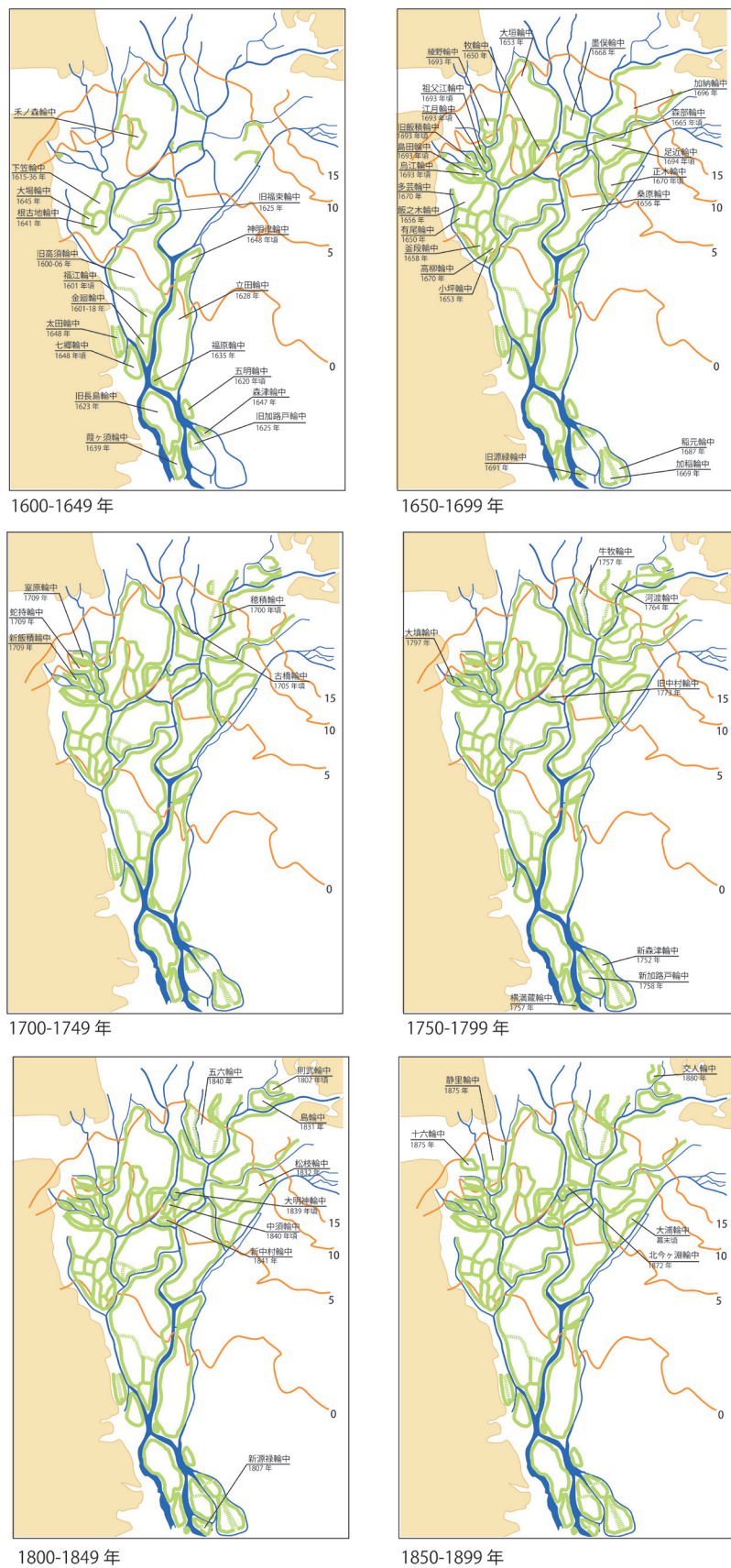


図 1-14 濃尾平野における輪中形成の推移 (50 年ごと)

安藤 1988 をもとに作成

としていなかった地域にも「水防」を目的とした輪中形成がおこなわれる。しかし新たに輪中が形成されることで、上記の過程は繰り返される。むしろ輪中が増えれば増えるほど、上記の状況は加速していく。少々の増水でも洪水が起りやすくなり、さらに被害は甚大となる。

こうして、「開発のための輪中」は、次第に「水防のための輪中」の側面を強くする。洪水が起これば、稲の収穫は減少する⁽²⁾。稲の収量を増やすための新田開発であったはずの輪中形成が、逆に洪水被害を増やして、稲の収量を減らす要因となる。ここに輪中の矛盾があった。

三川分流と輪中の解体

20 世紀を迎えるころには、輪中は飽和状態となっていた。それによって上記のような輪中の矛盾が著しく露呈していた。こうした状況を打開するためにおこなわれたのが、三川を分離するための河川改修であった。

図1-15は、江戸時代の本曾三川を描いたものである。現在のように本曾川、長良川、揖斐川の三川が明確になっておらず、幾筋もの支流が網目状の様相をなしていた。あたかも巨大な河川に島々が浮かんでいるようである。大雨が降れば、これらの河川は上流から下流へ、また東から西へと乱流・停滞し、洪水氾濫の被害を増大させていた。三川分流は、このように入り組んだ三川を文字通り分かつことによって、複雑な流域を安定化させる試みであった。ただし巨大な三川を分流させるのは容易ではなく、実現は段階的に進んだ。図1-16は、その過程を表したものである。

図左は、はじめて大々的に三川分流を目指した「宝暦治水」の計画絵図である。

宝暦治水は、薩摩藩が幕府に命じられて実施した御手伝普請であり、宝暦3年(1753)から宝暦5年(1755)にかけておこなわれた。宝暦治水において、もっとも重要でかつ難工事とされたのが、逆川の洗堰工事、大樽川の洗堰工事、油島の締切工事である。洗堰とは、周囲の堤防より一段低く設けた堤防をいう。完全な締切ではないが、一定の水量までは河川水を分断することができる。また油島締切工事は、下流で合流する木曽川と揖斐川の流れを目指したものである。

宝暦治水は完遂された。しかし、大樽川は

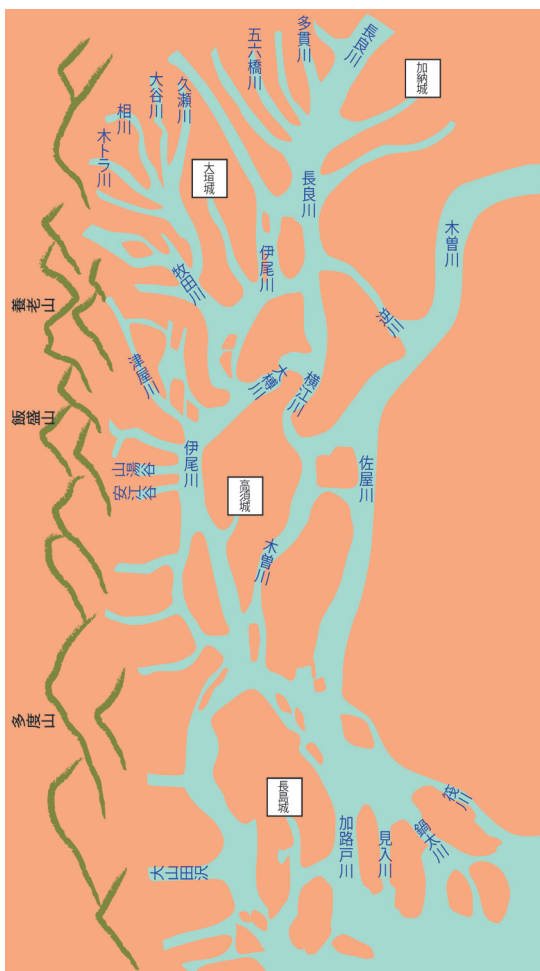


図 1-15 江戸時代の木曾三川

東京国立博物館情報アーカイブ「江戸期写本木曾川
下流図」をもとに作成

2ヶ月とたたずに洪水で流路を変更したため、洗堰の効果は失われた。また油島締切は、完全に締め切ると流下に差し支える可能性があるということで、中央部分は開いた状態にするという計画変更がなされていた。そのため宝暦治水は、三川を完全に分離する効力をもたなかった〔木曾三川その流域と河川技術編集委員会 1988：293-309〕。

実質的に三川が分流されたのは、明治の改修工事においてであった。明治20年(1887)、オランダ人ヨハネス・デレーケ(1842-1913)の指導のもと木曾三川の河川改修工事が始まった。工事の目的は、三川の分流と、河床への土砂堆積による流下鈍化の解消にあった。大量の土砂を含んだ水を速やかに流下させるには、河川が直線的に流れる必要がある。そのために、図1-17右のような計画がとられた。すなわち、三川本流をつなぐ複数の支流を廃川とし、三川にを直線的に開削し、それぞれ直線的な連続堤防を築いたのである。改修工事が完成したのは、明治44年(1911)であった。これによって木曾川、長良川、揖斐川は下流域において独立した河道をもち、直線で一気に流下する河川へと大きく形を変えた。この工事によって、木曾三川下流域における水の停滞は抜本的に改善された。

そしてまた、三川分流は輪中の解体をも意味した。元来輪中は、網目状の河川に沿うかたちで懸廻堤を形成していた。その河川自体が直線になることによって、懸廻堤防は分断され、切り離されたのである。さらに1927年以降におこなわれた大正河川改修によって、河川堤防は強化されていく。河川の流下がすみやかになり、また木製の樋門にかわって整備された排水機によっ

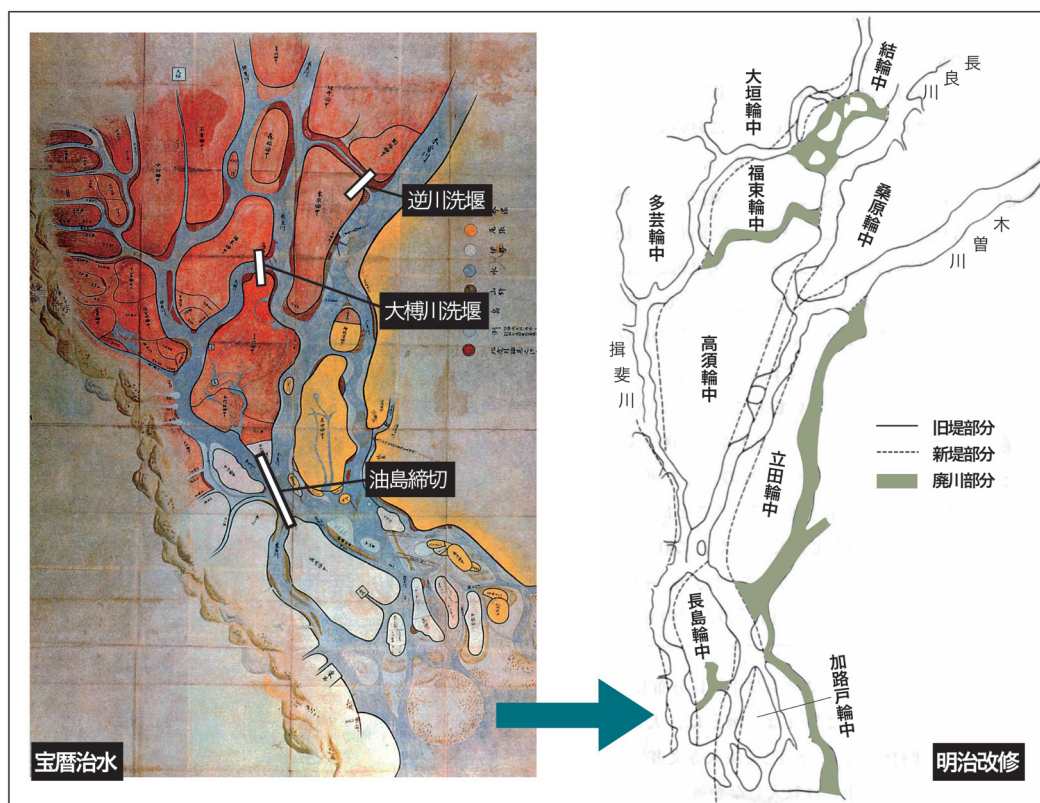


図1-16 三川分流の過程

吉岡勲監修 1986「薩摩藩御手伝普請目録見絵図」「三大河水利分流改修計画」をもとに作成

て、輪中における洪水被害は減少した。輪中堤防の必要性は薄れていき、部分的に残された輪中堤防も土地改良や道路整備のために取りこわしが進んだ。まさに、輪中が解体されていく過程であると位置づけられる。

現存する輪中堤防

とはいえ、旧来の輪中堤防がすべて取り壊されてしまったわけではなく、現在でも部分的に輪中堤防を見ることができる。それを示したのが図1-17である⁽³⁾。

図から分かるように、大垣市、安八町、輪之内町、海津市では旧来の輪中堤防が現在でも残されている。このうち、安八町、輪之内町、海津市の輪中堤防は、線状の形態で残存している。これは上記の河川改修の際に取り残された輪中堤防を維持しつづけたものである。これらの輪中

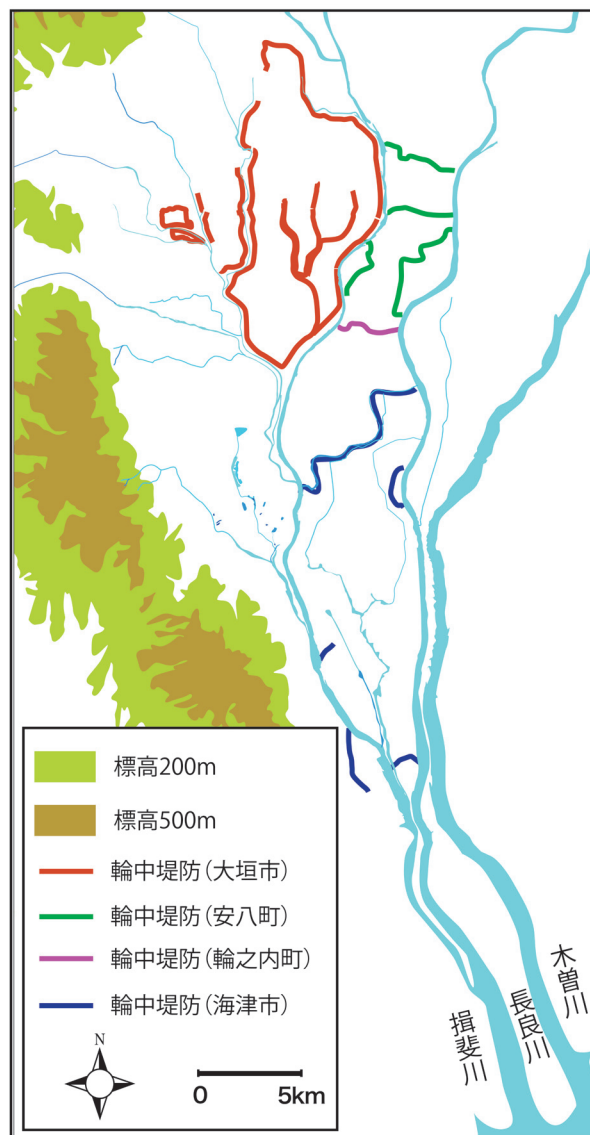


図 1-17 現存する輪中堤

国土交通省木曽川下流事務所提供資料、大垣市教育委員会提供資料をもとに作成

堤防は、河川に面していないため、岐阜県や国土交通省など河川管理主体の所有になっていない。堤防上面が道路として利用されているため、各市町村が道路用地として管理している⁽⁴⁾。

また輪中地域のなかでは上位部にある大垣市には、もっとも多くの輪中堤防が残されている。これらは、大垣輪中水防事務組合の組織が管理所有をおこなっている。大垣市に輪中堤防が多く残されている理由としては、揖斐川の西に位置する大垣市域では河川改修において河道が大きく変化しなかったことがあげられる。もっとも、大垣市においてもすべての輪中堤防が維持されているわけではなく、必要性が失われたと判断された部分は取り壊されている。

このように部分的に残されている輪中堤防のなかで、現在まで輪型の懸廻堤が完全に維持されているのが、大垣市十六町の十六輪中であつた。次章からは、十六輪中に焦点をあてて論じていく。

注

(1) 御囲い堤を築堤した目的としては、①木曽川左岸(尾張側)を洪水から守ること、②西側諸国からの防衛強化、③木曽川を安定化させることによる水運の発達、などが考えられる[木曽川文化研究会 2004: 130]。なお、対岸の美濃側は御囲い堤より堤防を高くしてはならないとの不文律があり甚大な被害を受けた、との言い伝えが広く知られている。それを指示する史料は残っていないが、もとより濃尾平野が西下がりな地形であること、小国が入り交じる美濃側には長い連続堤を築堤することが出来なかったことなどの理由から御囲い堤築堤以後、木曽川右岸、つまり美濃側での水害被害が大きくなったものと考えられる。

(2) 17世紀半ばに形成された本阿弥輪中(現在の岐阜県海津市)では、当初は灌漑による水田稲作がおこなわれていた。しかし排水の悪化によって1メートル近い湛水状態が長期間続くようになり、稲の植え付けすらできない状態となった。それを打開するため、水田の一部を掘り取り、その土を隣の田に積み上げて地盛りをする「堀上田」が発案された。堀上田によって湛水状態でも稲作が可能になったが、耕地面積は通常の水田にくらべ減少することになる[松原 1977: 157-159]。

(3) 木曽川上流河川事務所の管理係長(2011年当時)が独自で調査したデータに基づいている。なお大垣市については、大垣市教育委員会の資料と一部異なっていたため、大垣市提供資料にしたがった。

(4) ただし堤防としての機能を失っているわけではない。たとえば、昭和51年(1976)の長良川決壊の際、輪之内町の輪中堤防が水の流入を防ぎ、輪中堤防が再注目された。

第2章 十六輪中の環境

本章では、十六輪中の自然環境、歴史環境、社会環境について論じる。まず水環境を示したうえで、そうしたなかでどのように輪中が形成され、それがなぜ現在にいたるまで維持されてきたのかを分析する。さらにどのような社会組織のもと、水をめぐってどのような生業が営まれてきたのか、具体的な水制御の前提となる環境をみていこう。

十六輪中は、行政区分では岐阜県大垣市十六町にあたる。図2-1 左に示したように十六町は、十六輪中と大野輪中というふたつの輪中をもっている。それぞれの輪中のなかに集落が形成され、十六町を構成している。このうち本研究では、十六輪中に焦点をあてて論じていく。

第1節 水環境と輪中の形成

1. 水環境と水害

地形

図2-1 右にあるように、十六輪中が位置する大垣市は、濃尾平野の北西部にあたる。地形は、揖斐川の支流が形成した扇状地の末端から自然堤防・後背湿地帯への移行地帯にあたる。十六輪中は、輪中分布域においては、最北西部にあたる。

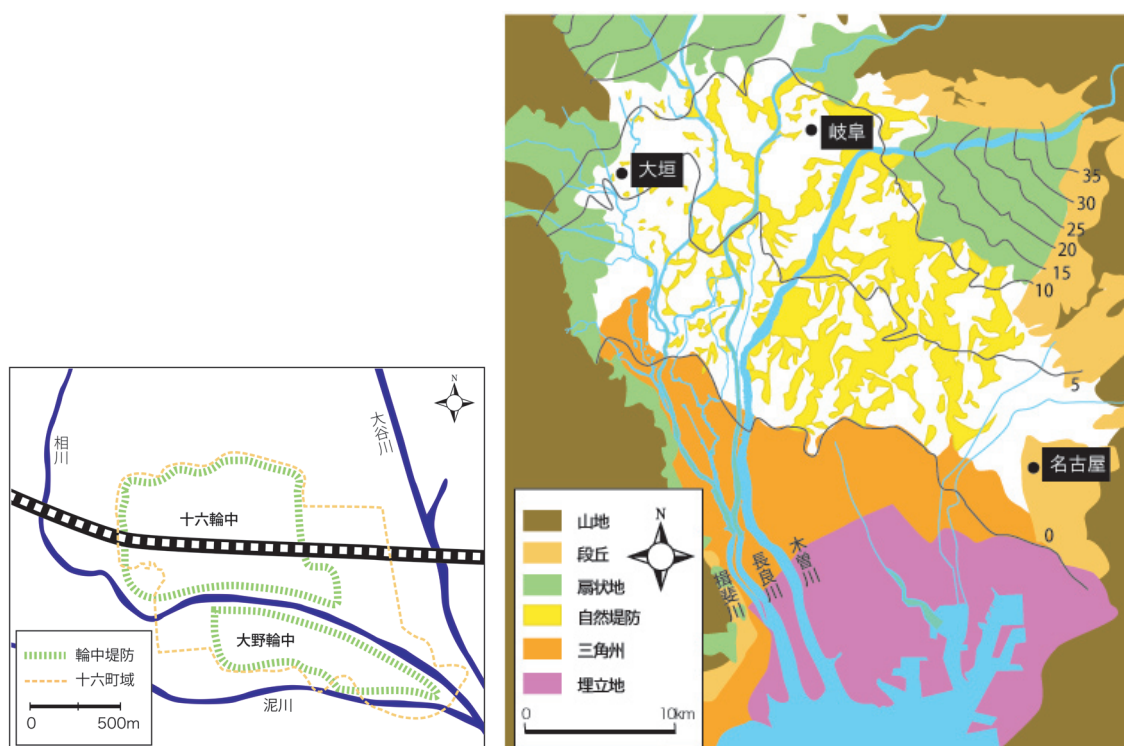


図2-1 大垣市十六町の町域（左）と地形（右）
国土地理院日本周辺図 500 万分の 1 をもとに作成

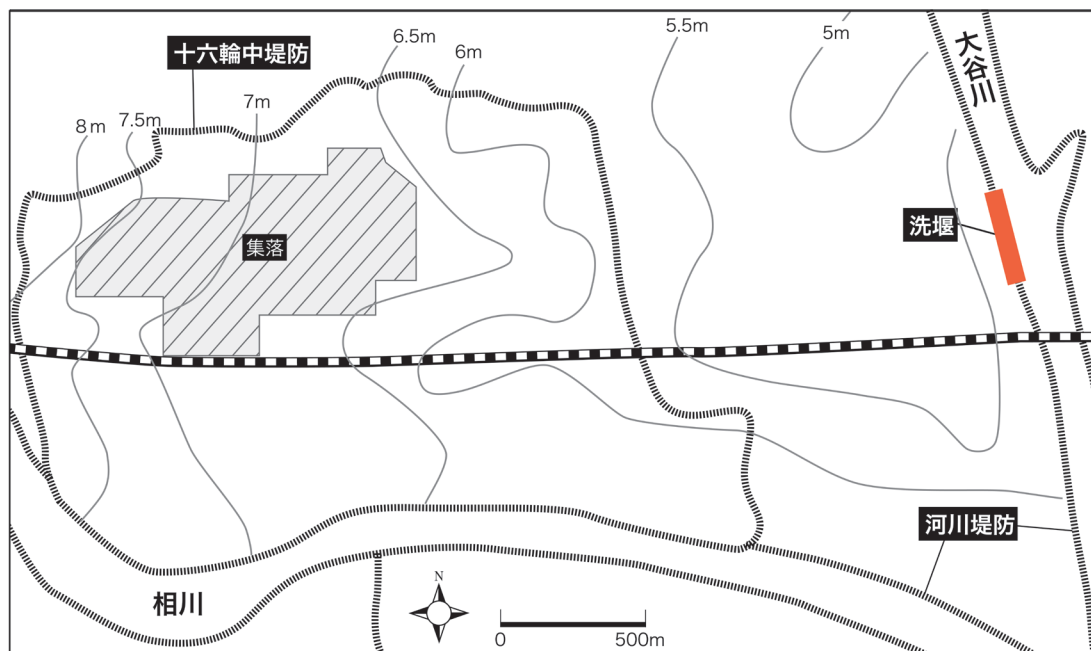


図 2-2 十六輪中の地形

国土地理院地図をもとに作成。等高線は、国土地理院 2500 分の 1 地図の標高点をもとに作成した

図 2-2 は、十六輪中内部の輪中堤防と微地形をあらわしている。十六輪中では、南部に隣接して相川が東流し、輪中堤防の 600m ほど東を大谷川が南流している。そのため輪中の南側は相川の河川堤防と一体化している。十六輪中のなかで最も標高が高いのは、輪中北西部の 8.8 メートル地点である。その地点から東へかけて、輪中内は緩やかに傾斜している。十六輪中の集落は、河川から離れた比較的標高の高い位置に集中している。なお輪中内を東海道新幹線が横切っているが、これは陸橋で輪中堤防の上を通過している。

河川環境

図 2-3 は、十六輪中周辺を流れる河川の関係を示したものである。図から分かるように、相川、大谷川は、いずれも揖斐川の支川である。十六輪中南東部で相川、大谷川、泥川が合流し、そしてその後杭瀬川、牧田川などをあわせて揖斐川の本流へと流れ込んでいく。すなわち十六輪中は、河川の合流地点に設けられていることになる。

(1) 相川

相川は、伊吹山麓を源として東流し、関ヶ原の山間を抜けて濃尾平野に流れ出る。濃尾平野の扇状地で複数のカーブを経て南流し、ふたたび東へ向きを変えて杭瀬川に合流する。河川延長 18127km の一級河川である [岐阜県 2014]。

相川の特徴は、急激な水位変動にある。図 2-4 は、2011 年の相川の年間水位変動である。相川の年平均水位は、0.26 メートルであり、水量がすくない。地表水の少ない典型的な扇状地河川と言えるだろう。特に 11 月から 4 月は水位が低く、河川床が見えていることも珍しくない。

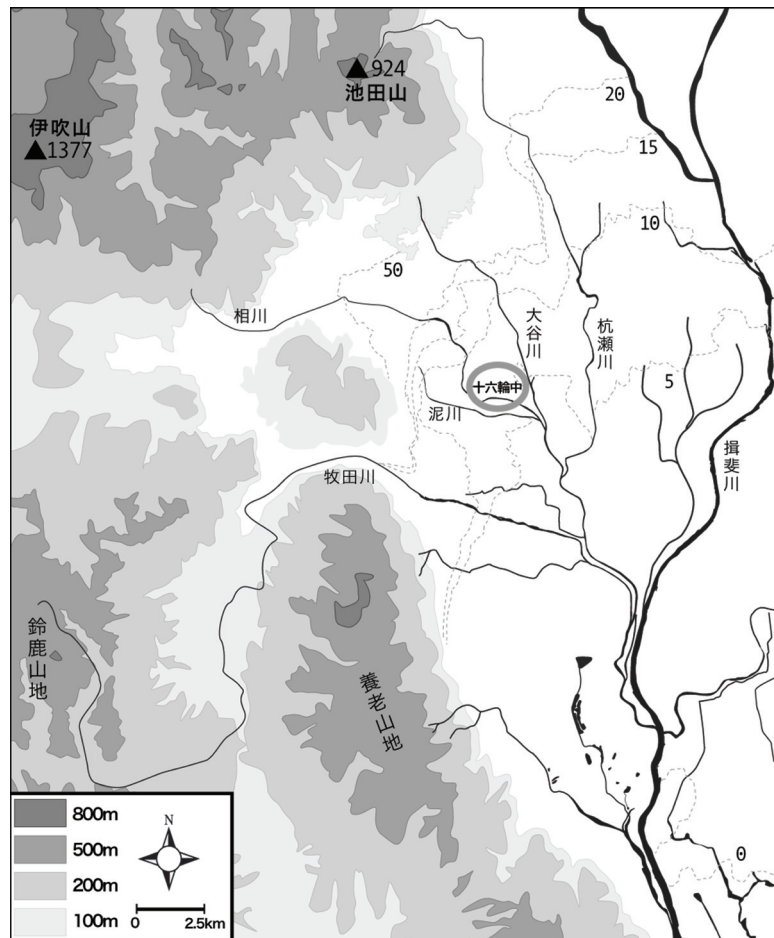


図 2-3 十六輪中周辺の河川環境
国土地理院地図を元に作成

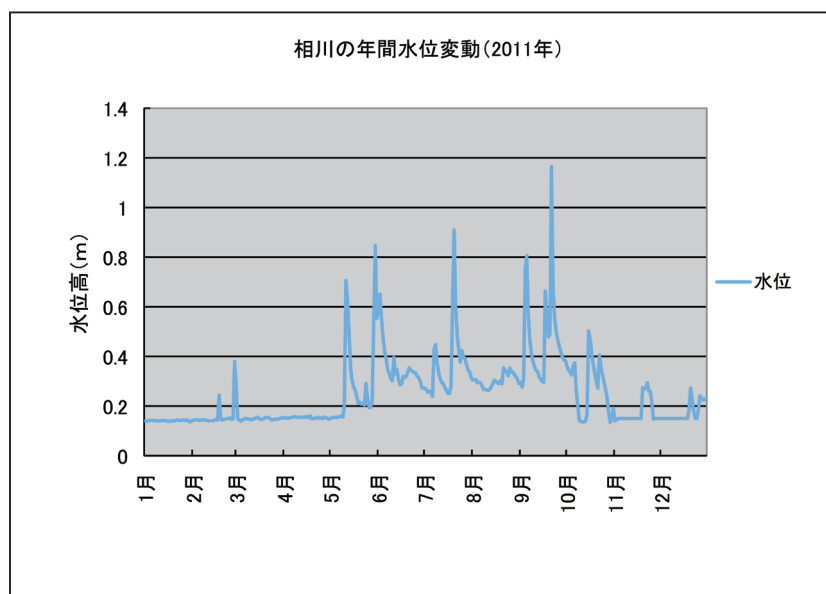


図 2-4 相川の年間水位変動

岐阜県庁河川課提供データ（2011 年分）により作成。起点の 0 は T.P.（零点高、標高 12.3470m）を示す。観測地点は、相川地藏橋であり、十六輪中から 1 キロメートルほど上流の地点である。

ただし降水量が増える5月から10月は、水位が上昇して平均水位が0.34メートルになる。そして時おり急激に水位が上昇している。これは、上流の山間部での降雨が要因である。水位が0.8メートルを越えている様子も確認でき、最大時には1.165メートルに達している。これは平均水位の5倍に近い値である。このように相川の水位は、夏期に山地からの出水によって急激に上昇する。こうした性質によって相川はしばしば決壊をおこした。

(2) 大谷川

大谷川は、池田山の山麓に発して南東に向かって流れ、相川に合流する。河川延長8443kmの一級河川である。

大谷川を特徴づけるのは、「洗堰」の存在である。洗堰の位置は図2-2に示したように、十六輪中のちょうど東部にあたる。洗堰とは、周辺の堤防より低くすることで、河川の水量が一定量を超えた場合にわざと越流させ、下流域での堤防決壊リスクを抑えるものである(写真2-1参照)。つまり大谷川西部(右岸地域)は、出水時には遊水地として機能することになる。洗堰によって水をわざと氾濫させることによって、河川の流下水量は減少し、堤防決壊というリスクは軽減される。

大谷川の右岸に洗堰が設けられたのには、歴史的経緯がある。

大谷川はかつて「百曲がり川」と呼ばれるほど蛇行しながら流れる河川であった。堤防はなく、出水時には水が周囲にあふれていた。そうした氾濫時の水の侵入を防ぐため、大谷川の東部(左岸地域)では、1677年に綾郷輪中、1875年に静郷輪中が築かれた。それによって出水時の氾濫水は、堤防のない遊水地、つまり大谷川の西部(右岸地域)にあふれることになった。すなわち大谷川は、左岸にのみ堤防がある状態となっていた。

しかし昭和29年から33年にかけて行われた県営土地改良事業には、大谷川右岸の遊水地を農地として開拓するために、大谷川右岸の築堤が盛り込まれた。ただしその際に、遊水地をなくすことで水害リスクが生まれるという反対意見が勘案され、大谷川右岸堤防には110メートルにわたって洗堰が設けられた[岐阜県 2004:5]。



写真 2-1 大谷川の洗堰

地下水の分布と水質

つぎに、十六輪中周辺の地下水について見ていこう。十六輪中の周辺地域において、人が使用することができる地下水は2種類ある。ガマと自噴水である。

(1) ガマ

扇状地末端部では、扇央部で地下に浸透した水が地表に近づき、湧水となってあふれだす。こうした自然に湧きでてくる水を、西濃地域では「ガマ」と呼んでいる。ガマは絶えることなく湧き、とくに水量の多い場所は土が乾くことがなかった。

図2-5は、十六輪中周辺地域におけるガマの分布をあらわしたものである。ガマは、相川の扇状地末端部のうち、標高8メートルから14メートル付近で湧く。なかでも標高10メートル付近で多く分布していた。十六輪中は標高8メートル以下に位置するため、ガマは見られない。しかし、北西に位置する島町島町から流れてくるガマを間接的に利用してきた。

このように十六輪中周辺地域に広く分布したガマであるが、近隣の工場の揚水によって地下水量が減少し、1990年代には分布域がかなり縮小した。また土地改良によって暗渠が整備され、ガマは地上へ噴出せず直接排水されるようになり、旧来のようなガマを見ることはできなくなった。ただし現在でも雨が多く降った際などに、相川左岸では一時的にガマが湧くのを見ることができる（写真2-2）。

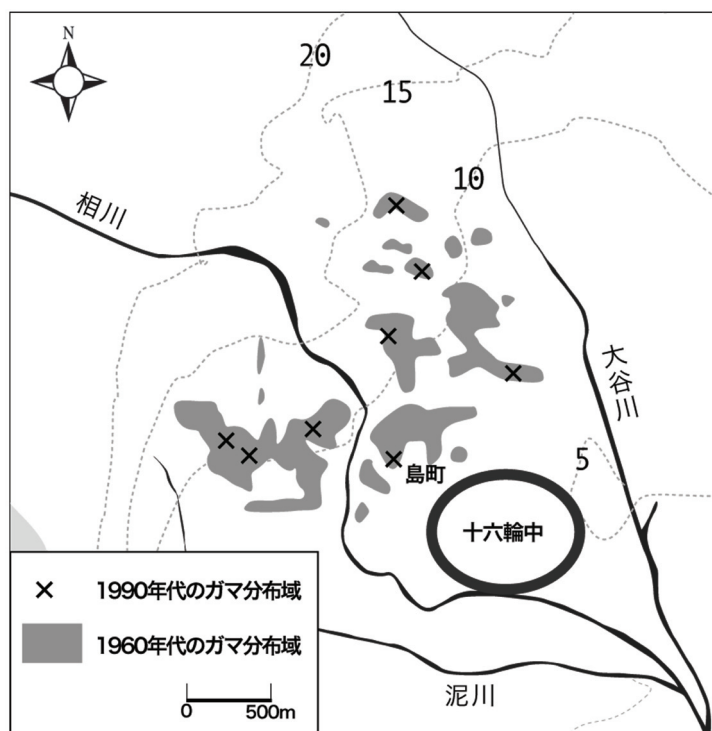


図2-5 相川周辺のガマ分布図

大垣市 2010：187、垂井町編 1996：15 をもとに作成



写真 2-2 雨の日にあらわれたガマ
十六輪中住民提供

(2) 自噴水

自噴水は、ガマと異なり、掘り当てることで湧き出す地下水である。十六輪中周辺の地下層では、相川などの支流河川の水が帯水層を形成している。この帯水層は難透水層の圧力を受け、被圧地下水となっている。この水を掘り当てることで、自噴性の井戸を利用することができる。十六輪中では、輪中内のどこで井戸を掘っても自噴の地下水が湧いた。ただし第1章で述べたとおり西濃地域では自噴水の量が減少しており、十六輪中でも同様である。掘り当てるだけで湧き出す自噴井はほとんど失われ、かつて湧いていたが現在は止まってしまった自噴井の跡を輪中内で見ることができる。

なお、十六輪中内のどこでも自噴水が湧いたと言っても、その水量と水質は一定ではなかった。聞き取りにもとづいて十六輪中における自噴水の水量と水質示したのが図2-6である⁽¹⁾。

まずは水量から見ていこう。一般的に自噴水が湧きやすいのは、標高が低く地下水面に近い場所や、河川沿いである。十六輪中のなかで水量が多いと言われているのは、集落の南東部から輪中の南東部にあたる筋道である。等高線で確認してみると、輪中の谷筋にあたる場所が自噴水の湧きやすい場所に該当している。

つぎに水質を見ていこう。十六輪中には、透明な清水が湧く自噴井と、赤く濁った水が湧く自噴井がある。後者の水を「ソブ」とよぶ。ソブは、鉄分を多く含んでおり、容器に汲んでおくとまっ赤になる（写真2-3）。ソブが湧くのは十六輪中の西南部である。道路を一本挟むだけで、水質がソブと真水にわかれることもあり、これは「地下の水道（みずみち）がちがう」からだと言われる。なお、大垣市の川合鑿井会社の川合氏によれば、ソブ水の原因は、十六輪中の北東およそ3.5kmにある金生山（きんしょうざん、かなぶやま）の持つ鉄分が地下水に溶け込んでいるためと考えられる。金生山は、現在は石灰石や大理石の採掘場だが、かつては採鉄場であったという伝説がある。ソブ水は、匂いがあるため飲用には適さないが、灌漑には使用できる。

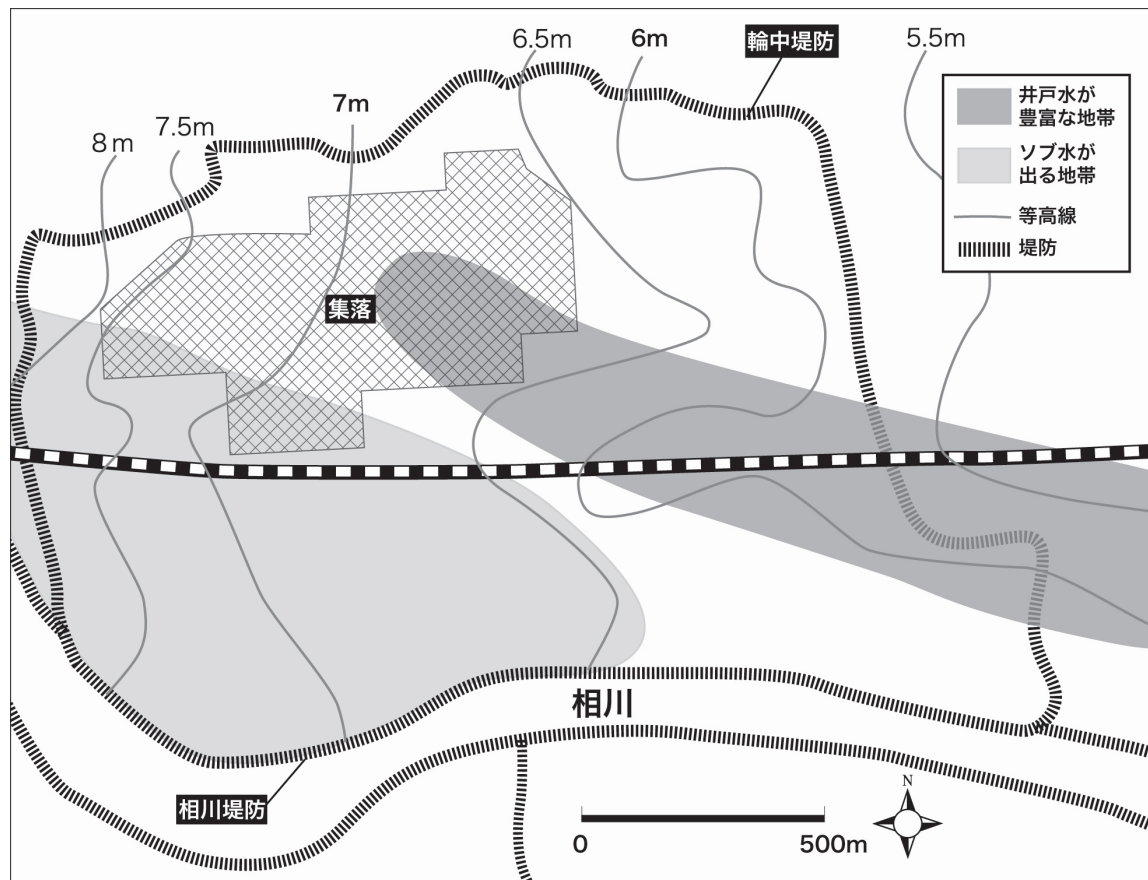


図 2-6 十六輪中における地下水の水質と湧出量

聞取りをもとに作成。等高線は、国土地理院の 2500 分の 1 地図の標高点をもとに作成した



写真 2-3 ソブ水

水路と排水

十六輪中では、輪中内の水路を「川」と呼ぶ。たとえば水路掃除を意味する「川ざらえ」「川掘り」などの用法にそれがうかがえる。実際に十六輪中の住民にとって水路は、輪中堤防外の川と同様に、「カワ」という水環境の一部であったと考えられる⁽²⁾。

図2-7は、十六輪中の水路を模式的に示したものである。十六輪中の水路は、取水と排水が区別されていない。集落の中には暗渠となって可視化できない部分もあるが、輪中の中をまんべんなく水路が走っている。

十六輪中は東に傾斜しているため、輪中内の水は輪中東部へとあつめられる。そして、二ヶ所の排水口から輪中の外部へと排水される。十六輪中では、現在も排水機を用いず、自然排水がおこなわれている。歴史的に排水悪化に悩まされてきた輪中地域のなかで、十六輪中の自然排水を可能にしているのは、比較的高い標高と傾斜にある。排水口は、逆水門の形状をとっている（写真2-4）。逆水門とは、水圧によって自動開閉する水門である。排水される水の水圧によって水門は開き、水は輪中外に排出される。そして出水時、水路や河川の水が流下できずあふれて逆流してくると、その水圧によって水門が閉まる。

十六輪中から排水された水は、さらに東へ流れ、大谷川へと排水される。大谷川には、電動排水機場が二機設けられている。これによって大谷川西部（右岸地域）に集まってきた悪水は、動力をもちいて強制排水することが可能となる。しかし、大谷川には洗堰があるため、大谷川の水位が一定量を超えると、洗堰から水があふれることになる。ゆえに、制限つきの排水能力である。

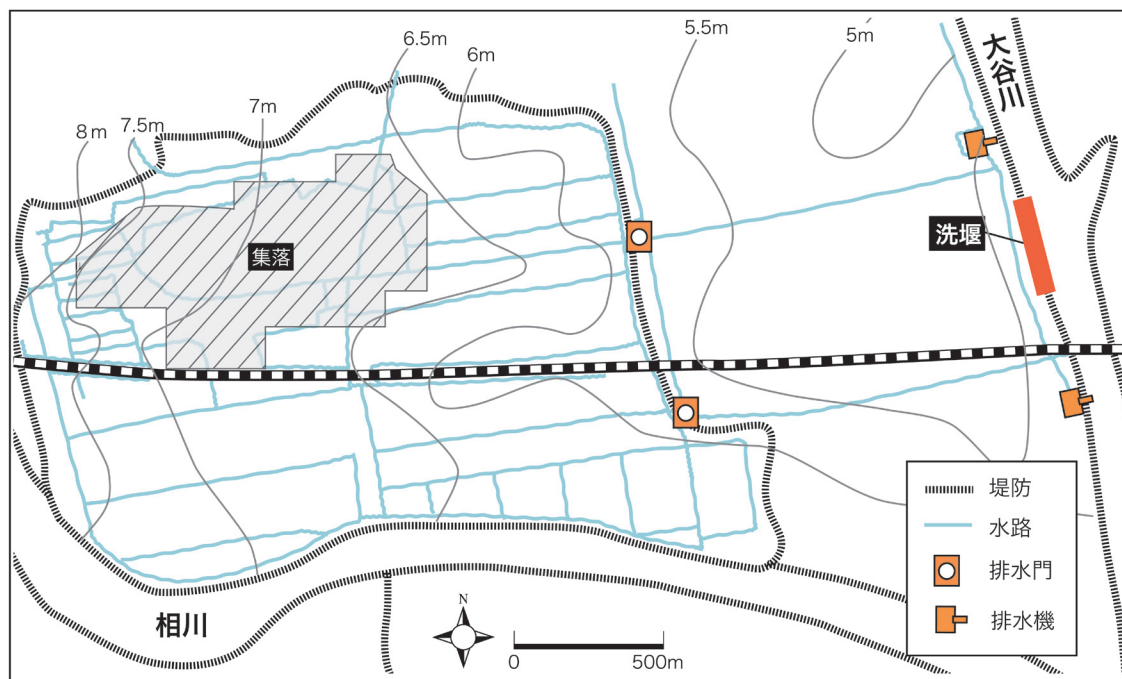


図2-7 十六輪中の水路模式図

国土地理院地図と現地調査をもとに模式的に作成



写真 2-4 輪中堤外へと流れる排水口（左）と逆水門の仕組み（右）

十六輪中の水害

図 2-3 で見たように十六輪中は、杭瀬川、大谷川、相川、泥川、牧田川など揖斐川の支流が放射線状にあつまると、その一画に位置している。これらの支流は、水源地である山間部から合流地点までの河川距離が短いため、出水時の水勢が強い。また河川は、河川延長が長く流量の多い川が優先的に流下する。すなわちもっとも流量が多い揖斐川が優先的に流下し、一次支川である牧田川、三次支川である杭瀬川、三次支川である相川、四次支川である大谷川や泥川、という段階で流下することになる。山地からの出水によって水位が増しても、優先度の低い支川は流下することができない。すると水は、より劣勢の河川へと流れ込む。つまり三次支川、四次支川である相川、大谷川、泥川へと流れ込んでくる。

以上のように出水時の十六輪中は、相川や太谷川の水位が増すが、末端支川であるため流下できず、合流地点からはより流量の多い河川の水が流れ込み水の行き場がなくなる、という状況になる。それによって限界を超えた相川、大谷川が水害をおこすのである。これら二川の水害は、その河川の性質の違いから異質なものである。すなわち相川は堤防決壊をおこし、大谷川は水を溢れさせるのである。十六輪中に被害をもたらしたこれらの水害の歴史を、表 2-1 にまとめた。

（1）相川の決潰

十六輪中にもっとも大きな被害を及ぼすのが、相川堤防の決壊である。十六輪中では、「堤防が切れる」と表現される。決潰は、河川の強い水圧に堤防が絶えきれなくなって起こる。

表 2-1 にあるように、相川は十六輪中沿いでしばしば決壊をおこした。1880 年代、1890 年代にそれぞれ 4 回ずつ決壊しており、1900 年代に入ってから 1953 年までに 4 回の決壊を記録している。実に数年に一度の割合で、相川は決壊をおこしてきた。これらの決壊が、相川堤防のどのあたりで起こったかを、聞き取りにもとづいて図 2-8 に示した⁽³⁾。図から分かるように、

表 2-1 十六輪中でおきた相川決壊と、大谷川洗堰の越流

期日	被害の内容
1815 年 8 月 3 日	揖斐川の破堤で大垣城下が入水。表佐村、十六村で相川破堤入水。
1865 年 9 月 16 日	相川堤防が十六村沿いで 270 間の破堤。耕地 4 町歩に砂入り。
1881 年 9 月 12 日	相川堤防が十六村沿いで 108 間にわたり決壊。
1882 年 8 月 6 日	相川、大谷川が 10 尺あまり増水。相川堤防が十六村沿いで決壊、入水。
1884 年 7 月 12 日	相川堤防が十六村、表佐村で破堤。
1885 年 7 月 1 日	相川堤防が表佐村、島村、十六村で 200 間破堤。13 町歩が荒地となる。
1895 年 9 月 6 日	早朝、大野輪中沿いの相川堤防が決壊し、入水。正午に十六村の西側で相川堤防が決壊。十六村、島村が入水。
1896 年 7 月 21 日	木曽、長良、揖斐川をはじめ、大小川が氾濫。相川が決壊し、十六村と島村が入水。十六村では床上浸水が 117 戸、床下浸水が 2 戸。
1896 年 8 月 30 日	降雨量 869 ミリの豪雨。相川堤防が 90 間にわたり決壊。島村、十六村が入水。十六村の床上浸水は 29 戸、床下浸水が 90 戸。
1899 年 9 月 8 日	暴風雨。相川堤防が十六輪中沿いで決壊。
1914 年 10 月 4 日	豪雨。十六村の西で相川堤防三箇所が決壊、入水。
1920 年 6 月 17 日	豪雨。相川と大谷川が氾濫。十六輪中沿いで相川が決壊。入水。
1938 年 6 月 28 日	豪雨。十六村の西で相川堤防が決壊。
1953 年 9 月 25 日	台風 13 号による暴風雨。夜 20 時頃十六輪中沿いで相川堤防が決壊。5-6 戸をのぞき床上浸水となる。
1959 年	大谷川に洗堰完成
1959 年～1964 年	相川堤防改修工事
1959 年 8 月 13 日	台風 7 号にによる大雨で洗堰から越流。
1960 年 8 月 13 日	台風 11 号による大雨で洗堰から越流。
1961 年 6 月 27 日	梅雨の豪雨により洗堰から越流。
1969 年 7 月 9 日	梅雨の豪雨により洗堰から越流。
1970 年 6 月 16 日	集中豪雨により洗堰から越流。
1971 年 8 月 31 日	台風 23 号による大雨で洗堰から越流。浸水面積 208ha。
1972 年 9 月 17 日	台風 20 号による大雨で洗堰から越流。浸水面積 214ha。
1974 年 7 月 25 日	集中豪雨により洗堰から越流。浸水面積 167ha。
1975 年 8 月 23 日	台風 6 号による大雨で洗堰から越流。浸水面積 200ha。
1976 年 9 月 11 日	9.12 豪雨により洗堰から越流。浸水面積 238ha。越流水が十六輪中内に流入。
1980 年	大谷川洗堰嵩上工事
1983 年 6 月 20 日	集中豪雨により洗堰から越流。浸水面積 150ha。
1989 年 9 月 7 日	集中豪雨により洗堰から越流。浸水面積 150ha。
1990 年 9 月 20 日	台風 19 号による大雨で洗堰から越流。浸水面積 223ha。越流水が十六輪中に流入。
2000 年 9 月 11 日	集中豪雨により洗堰から越流。浸水面積 15ha。
2002 年 7 月 10 日	台風 6 号と梅雨による大雨で洗堰から越流。浸水面積 234ha。
2004 年 10 月 20 日	台風 23 号による大雨で洗堰から越流。浸水面積 178ha。
2007 年	大谷川洗堰嵩上工事

岐阜経済大学地域経済研究所 1983、北山俤索編 2008、岐阜県 2004、大垣輪中水防事務組合 2009 により作成
「入水」とは、輪中地域では浸水被害にあうことを言う。

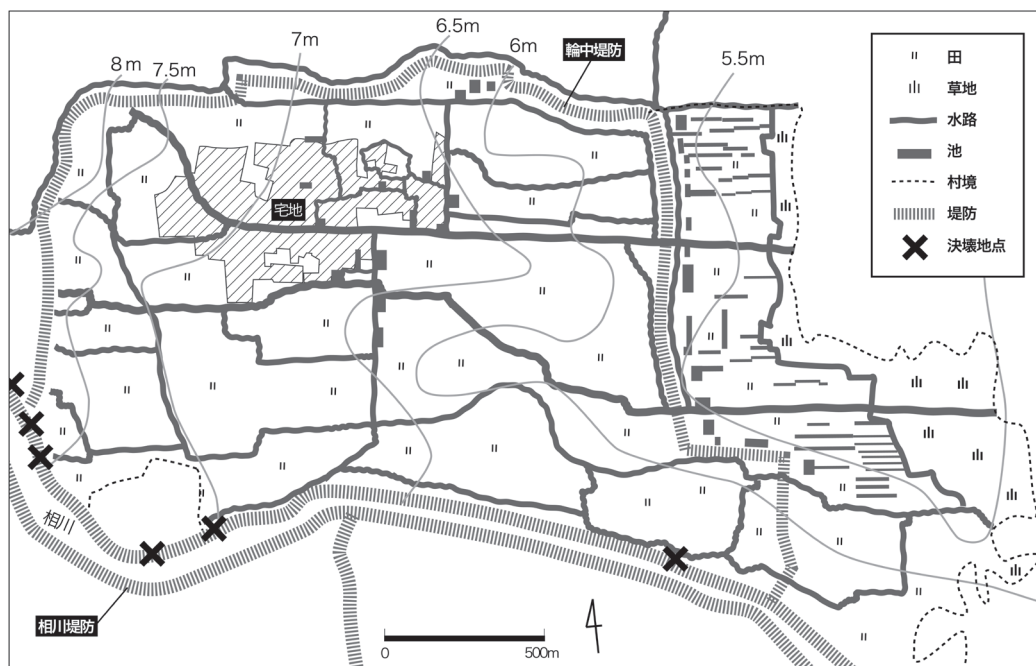


図 2-8 十六輪中における相川堤防決壊地点

聞取りをもとに作成。基盤となっている絵図は、土地改良以前の十六輪中内の様子である。旧地主のSk家に伝わる村絵図をもとに作成した。

輪中の南東部で決壊したと伝えられているが、決壊地点の多くは輪中の南西部に集中している。

もっとも近年起こった相川堤防の決壊は、昭和 28 年（1953）である。台風 13 号による大雨で相川堤防は 80 メートルに渡り決壊し、輪中全体が浸水した。

決壊時の様子を知る 80 代の住民に、決壊するときの様子を聞いた。それによると相川が決壊したのは、雨が上がり、星空のきれいな夜であったという。雨は上がっているものの相川の水量は多く、流下できない水がどんよりと溜まっていた。

その時分俺は若かったでな、22 やったでな、おめえんたは若えて見てくれんかって。あの頃は水害に見回りするのは松明やな、今ならガス灯や懐中電灯やけど、松明に火つけて行ったら、ものの 50 メートルも行かんうちに、今はかんかんの車が通るような道が、膝までいってしまうの。ズボズボって。歩けへんの。堤防の上が。水が含んでまっでな、もうぬかるんでまっとるんやな。（中略）こんな歩けへんでって引き返したら、上の方で 2-3 人誰か見とったらしくて、切れたよーって合図をしてくれた⁽⁴⁾。

こうして相川堤防は崩れ、輪中内は、相川から流入した水で満たされた。ただしその流入水は土石流のような水勢ではないため、相川が決壊しても家屋が流されたり人が死ぬようなことはない。主な被害は水田と家屋の浸水である。「（堤防が切れてから）床上浸水までの時間はかなりあるでな」というほど、輪中内の水はじわじわと水位をあげていくのである。この決壊で十六輪中では、5-6 戸をのぞくすべての住宅で床上浸水の被害を受けた。

昭和28年(1953)の水害後、相川は災害復旧等関連緊急事業の一環で河川改修がおこなわれた。それによって十六輪中沿いの相川堤防は強化され、現在にいたるまで決壊を起こしていない。

(2) 大谷川の越流

先述のように大谷川右岸地域(西部)はもともと遊水地であった。そのため堤防が築かれず、出水時には水を溢れさせていた。1959年に堤防が築かれた際には、そうした歴史的背景をうけて大谷川右岸堤防には洗堰が設けられた。それゆえ大谷川は一定の水位を超えると、洗堰から水を越流させる。実際に、表2-1にあるように洗堰がつくられてから現在までに、16回の越流を記録している[岐阜県 2004: 5]。

洗堰を越えた水は、大谷川西部(右岸地域)に流入して、十六輪中堤防外の東部にある水田耕地に氾濫被害をもたらす。このとき水量が少なければ、輪中堤防に守られた十六輪中内部は、水害から守ることができる。しかし越流の水量が多いと、水が十六輪中堤防を越えて輪中内部に侵入してくる。昭和51年(1976)と平成2年(1990)にはそのような被害を受け、十六輪中の内部全域が浸水した。

写真2-5は、もっとも最近おこった平成14年(2004)におきた大谷川洗堰からの越流被害の様子である。写真で分かるように、大垣市荒崎地区は178haというひろい範囲が浸水した。被害を受けた家屋の中には市営住宅も含まれ、一部住民が、岐阜県側の浸水対策不足にたいする損害賠償を求めて訴訟したことで注目された[神山 2013]。しかし十六輪中では、輪中堤防によって水に流入を防いだため、大きな被害は受けなかった。

なお洗堰は、平成15年から平成19年(2003-2007)におこなわれた床上浸水大作特別緊急事業によって、1.05メートル嵩上げされた。工事終了後、現在まで洗堰からの越流はおこっていない。



写真2-5 平成14年の大谷川越流被害

撮影：アジア航測(株)

2. 集落のおこりと輪中の形成

集落のおこり

十六輪中では、弥生時代中期初頭（紀元前3世紀頃）の遺構を示すものとして、輪中内で銅鐸が出土している⁽⁵⁾。第1章で論じたように十六輪中が位置する濃尾平野の扇状地は、早い段階で土地開拓が進んでいた。したがって古代の十六輪中地域において、銅鐸を利用する文化を持つ集落が形成されていたと考えることは不自然ではない。

なお十六町は、昭和29年（1954）に大垣市に編入するまで不破郡荒崎村に属していた。日本書記の斉明天皇6年（660）10月条には、「斉明天皇六年冬十月に、百済の佐平鬼室福信、佐平貴智等を遣して、来て唐の俘（とりこ）一百餘人を献る。今美濃國の不破・片縣、二郡の唐人等なり」との記述がある。唐からやってきた100人あまりの虜は、開拓のために使わされたのではないかと考えられる〔坂本太郎ほか校注 1965：346〕。

また十六輪中では、関ヶ原や垂井町に檀那寺を持つ家が珍しくないうえ、祖先が滋賀からやってきたという伝承を聞くことができる⁽⁶⁾。

以上のことから十六輪中地域における集落は、時間軸でみれば紀元前三世紀頃から、空間軸でみれば西方から拓かれたと推測できる。不破は、畿内から東国へ向かうための通り道である。その中心地で古代に国府が置かれた垂井は、相川の中流域に位置する。その先にあるのが、十六輪中である。不破を開拓した人々の一部が、相川をくだり大谷川との合流地点にたどりついたと想像することもできるだろう。

輪中の形成と地域間調整

集落の成立こそ古いのが、十六村に輪中堤防築かれたのは遅い。濃尾平野で輪中形成が著しく進んだのは17世紀であったが、十六村に輪中堤防が形成されるのは、19世紀のことであった。その経緯について、十六輪中の郷土史家である北山の研究をもとに整理してみよう〔北山1983：7-24、北山編 2008〕⁽⁷⁾。十六村における輪中堤防築堤の経緯は、大きく分けると次の三段階の経緯を辿っている。（1）逆水被害の悪化、（2）重田畑の築造、（3）輪中堤防の完成、の三段階である。

（1）逆水被害の悪化

17世紀に輪中形成が進むと、遊水地は失われて水の流下が困難になり、とくに土地の低い西部の支流は本流からの逆水被害を受けるようになった。遊水地であった大谷川流域では、逆水によって氾濫域が増していき、被害に悩まされることになった。明和8年（1771）、大谷川流域9か村は、幕府に逆水留めの工事を願い出た。しかし大谷川の下流域の村々にとっては、大谷川が締め切られた場合、遊水地が失われることで下流の堤防が決壊する恐れが出る。そのため下流域の村々が差し障りを申し立て、工事は不成立におわった。

およそ60年後の文政13年（1830）、大谷川流域の村々は、ふたたび大谷川逆水囲い堤の築堤を願い出る。だがまたも下流の村々の反対にあい、工事がおこなわれることはなかった。

（2）重田畑の築造

嘉永2年（1849）、十六村は逆水被害を抑えるための実力行使にでた。尾張藩鵜多須役所と同名古屋勘定所に逆水被害による飢渴をうったえ、重田畑を築く内諾と普請費用500両を得た。そして十六輪中の大谷川沿いに重田畑をきずいたのである。重田畑とは、田畑の一部を堀上げて土地を高くつくり、水損を逃れようとするものである。しかしこのとき作られた重田畑は、高さ五尺（1.5メートル）、長さ200間（360メートル）という、歴然とした堤防であった。

それに気がついた大谷川対岸村および下流村の村役人は、十六村に工事の中止をかけあった。さらには村人が押しかけて築堤中の重田畑を取り壊し、十六村ではけが人も出る騒動になった。これをうけて十六村は、尾張藩鵜多須役所へと訴え出る。十六村庄屋である岡崎嘉六郎の申出は、「右者村方難渋ニ付、願済之上、重田畑仕候儀ニ而堤ナド築立候儀者無之候間…」としらを切り通すものであった。北山は、この騒動は嘉六郎による確信犯的なものではなかったか、と推測している。当時十六村は尾張藩領、たいして反発した大谷川対岸の綾野村、下流域の室原村、祖父江村などは大垣藩領あるいは大垣藩預かり領であった。騒ぎが大きくなればなるほど、十六村は尾張藩の威光を借りることが可能になる。実際に、この騒ぎをうけて、大垣藩は代官を派遣して事件の収拾をはかった。しかし代官による和解策は成立せず、騒動は幕府沙汰となった。

和解が完了したのは、騒動から3年後の嘉永5年（1852）である。嘉六郎は既に他界していたため、頭百姓の坂井五一が渡り合った。和解として、関係村村から1200両をあつめ、300両はけが人をだした十六村への繕い料と心づけとした。900両は、五年かけた水行立て直し工事の費用となった。そのさい工事は、各村がかつてにするのではなく、地域の水行に精通している者を惣代にたてておこなう取り決めであった。工事が完了したならば、十六村は重田畑を修繕してもよいことになった。

北山は、慶応3年（1867）の絵図に長さ679間（1235メートル）の「大畦」が描かれていることから、和解案から数年のうちに重田畑による水除け堤が完成したと推測している。水除け堤は高さ3尺（90センチメートル）であり、「大畦」の名前が示すように、堤防とよべるものではない。それでも輪中堤の手がかりになるものであった。これを可能にしたのは、庄屋の岡崎嘉六郎、頭百姓の坂井五一らのはたらきであった。

（3）輪中堤防の完成

日本列島が幕末の動乱に揺れる頃、大谷川流域10か村は、ふたたび大垣藩主に大谷川流域の築堤を嘆願した。それまでと同様、大谷川対岸や下流村々との対立関係になったが、仲介者の三右衛門によって交渉がすすみ、明治2年（1869）、見極め（見試し）として中水凌ぎの堤防を築くことが許された。それによって大谷川流域の10か村は、高さ三尺五寸（約1メートル）の中水凌ぎの堤防を築いた。

この下流村々との交渉過程において、十六輪中は単独で交渉にのぞみ、八尺四寸（約2.5メートル）の堤防を築くことに成功した。これにより逆水被害がおこったとの申し出がおこったが、十六村は重ねて交渉につとめ、明治8年（1875）までにすべての村々との差障りは解除となった。

交渉にあたったのは、十六村庄屋の坂井沖右衛門、頭百姓の坂井五一らであった。そのさいには、多額の納得金を支払ったと伝えられている。こうして、ようやく十六村に中水凌ぎでなく逆水も防ぐことの出来る輪中堤が築かれた。

こうして得られた輪中堤防は、明治24年(1891)の濃尾大震災により一部が崩壊した。十六村は定杭が陥落していることについて県知事の確認を受けたが、関係村々が修復工事に納得せず、納得金を出させようとする動きもあった。それに対して十六村は訴えをおこし、勝訴した。このとき工事反対の動きを排除し、国の補助金獲得に尽力してさらに私財を提供したのが、坂井五一、岡崎安、岡崎勝吉らであった。輪中堤防を得るために尽力した坂井沖右衛門、坂井五一、岡崎安、岡崎勝吉ら4名については、記念碑にその功績が刻まれ、語り継がれている。

以上のように十六輪中堤防は、自然発生的に成立したものではなく、反対する近隣地域との調整を経てようやく得たものである。ある場所に輪中堤防が築かれれば、流域全体の水環境に影響をあたえる。輪中は特定の地域を守るために築かれるが、その地域だけの問題ではない。十六輪中の堤防は、大谷川下流域や対岸地域などとの緊張感のうえに成立しているのである。

輪中堤防と切割

十六輪中堤防は、相川に接している部分と、川に面していない部分に分けられる。

相川堤防部分は、「相川堤防」「相川本堤」などと呼ばれる。堤防の表面部分(天端、馬踏)は舗装され、車道として用いられている。相川堤防以外の部分は、「輪中堤防」「コテイボウ」とよばれている。相川堤防にくらべると高さ、幅ともに小さく、道路としての利用はされていない(写真2-6)。

現在の十六輪中には、輪中堤防の北部、東部の2箇所に切割が設けられている。切割とは、輪中堤防の一部を取り壊し、車などが通過できるようにしたものである。岸本によれば、輪中地域における切り割りには次のような種類がある。



写真 2-6 輪中堤防



写真 2-9 十六輪中堤防の切割 堤防北部（左）、堤防東部（右）

①開放型切割

輪中堤防を切断し、切断面になにも洪水防止装備をしない形態。そのため、洪水をふせぐ機能を失っている。

②箱形切割

輪中堤防を小さく切断し、切断面を石垣やコンクリートで補強したもの。洪水時には道路を遮断できるように、堤防切断面に溝などが施してある。

③陸閘形切割

輪中堤防を大きく長方形に切断し、切断面をコンクリートで補強したもの。引き戸式あるいは開閉式の銅板を常設しており、洪水時に締め切ることができる。

[岸本ほか 1996：81-98]

十六輪中の切割は、輪中北部が写真 2-9 左のような陸閘形切割、東部が写真 2-9 右のような箱形切割である。陸閘形切割は引き戸式になっており、出水時には締め切ることができる。また箱形切割についても、切断面を遮断できるようになっている。これによって、現在にいたるまで十六輪中は完全な懸廻堤防を維持している。

第2節 社会組織と生業

1. 人口と社会組織（微減／少子高齢化／瀬古が基本単位）

人口

十六町は、大垣市荒崎区に含まれる。荒崎区は、大垣市の西端に位置しており、市中心部に通勤圏内の郊外となる。そのため、高度経済成長とモータリゼーションの進展にともない、住宅開発がおこなわれた。それによって、昭和45年（1970）には戸数641、人口2621だったのが、昭和60年（1985）には戸数1439、人口5353と倍増している。その後も微増をつづけており、平成22年度の国勢調査では、戸数2177、人口6226となっている〔大垣市統計HP〕。

このように1970年代から80年代にかけておおきく人口増加した荒崎地区のなかにあつて、十六町の人口は、独自の立場をたもっている。昭和45年（1970）に戸数130、人口642であったのが、昭和60年（1985）には戸数161、人口689と微増にとどまっている。そして平成22年には戸数190戸、人口590人となっており、戸数は増えているが人口は減少に転じている。

ただし1970年代以降の戸数の増加は、輪中内部に建てられたアパート2棟（総戸数15戸）のほか、堤防外に建てられたツヤキン、三建産業の社宅の影響によるものがおおきい。十六輪中の中に暮らす住人は減少しており一戸あたりの人口が著しく減少している。なお十六町の平成22年時点の年齢別人口は、15歳未満が50人、15歳から64歳までの生産人口が388人、65歳以上が151人である。人口の4分の1が高齢者となっており、少子高齢化が進んでいる。

社会組織

十六町の自治は、瀬古（せこ）と、そこから選出された自治会によっておこなわれている。瀬古は、一般の町内会における「組」「班」に対応する⁽⁸⁾。

（1）自治会

十六町の自治を中心的に執りおこなうのが、自治会である。自治会は、自治会長1名、自治会役員9名の計10名で組織される。自治会役員は、副会長2名、会計1名、神社係3名、防災3名の役に分かれている。自治会長は住民の推薦によって選ばれる。自治会役員は、各瀬古から1名あるいは2名が選出される。自治会が中心となって、町内の年中行事、祭の執行、水防活動、墓地の管理、田んぼの管理などがおこなわれている。

表2-2 荒崎地区と十六町の人口

		昭和45年	昭和60年	平成22年
崎地区	戸数（戸）	641	1439	2177
	人口（人）	2621	5353	6226
十六町	戸数（戸）	130	161	190
	人口（人）	642	689	590

大垣市統計をもとに作成

(2) 瀬古

瀬古は、十六輪中の集落を区画で分けた6つと大野輪中の集落、計7つで構成されている。七つの瀬古は、それぞれ北屋敷（きたやしき）、南屋敷（みなみやしき）、北浦（きたうら）、東向（ひがしむき）、清水屋敷（しみずやしき）、海戸（かいど）、大野（おおの）、と呼ばれる。2011年時点で、各瀬古の構成世帯数は、北屋敷19戸、南屋敷16戸、海戸13戸、北浦16戸、東向38戸、清水屋敷23戸、大野23戸である。ただしこのなかに、輪中内のアパートや、輪中堤防外の社宅の住民は含まれていない⁽⁹⁾。

図2-9は、十六輪中の瀬古分布を模式的に表したものである。各瀬古はそれぞれが密集した空間にあり、「北」「南」「東」という瀬古の名称に沿っている。なお「大野」は、相川を隔てた大野輪中の集落にあたる。大野は近世期に十六村民によって開拓された枝村であると伝えられている。十六町の瀬古のひとつであるが、独自の輪中堤を持ち、大野地区の氏神を祭るなど、一定の独立性を持っている。

各瀬古からは、年行司、会計、水防、防災、改良組合などの係が選出され、自治にあたる。

瀬古を取り仕切るのが、「年行司」である。これは、いわば「班長」のようなもので、瀬古内の世話役にあたる。年行司は、各瀬古に2名おかれ、担当者は名簿順で選ばれる。年行司は、瀬古内の情報伝達、集会の世話のほか、神社祭祀への奉仕をつとめる⁽¹⁰⁾。

「水防」「防災」は、安全維持のための係である。水防係は、自治会役員の水防係と強力し、

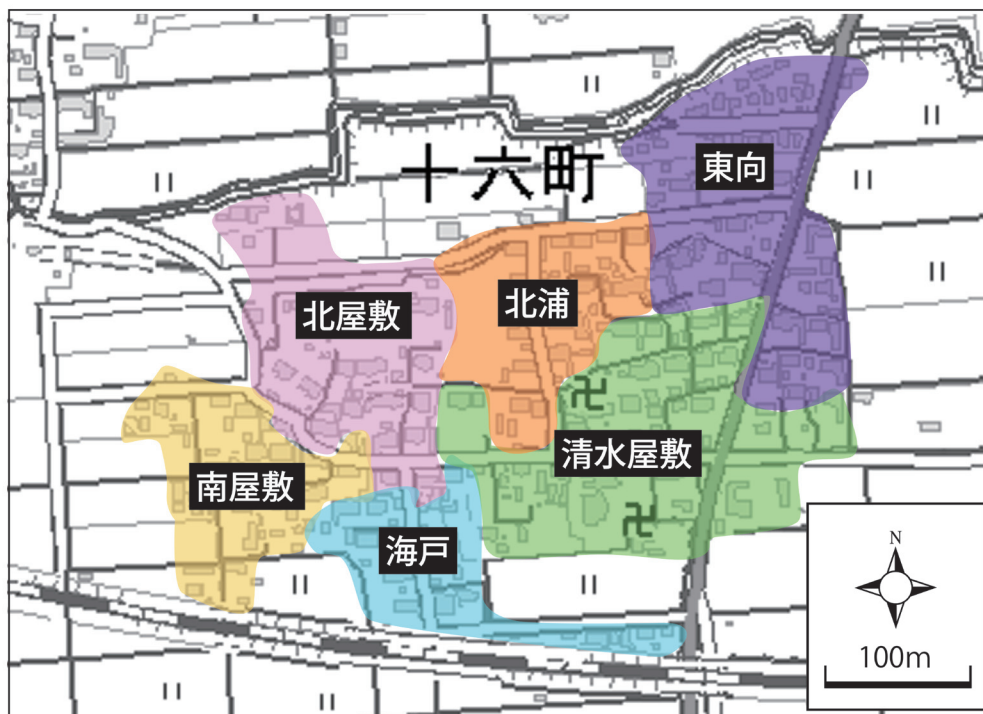


図2-9 瀬古の分布模式図

国土地理院の地図をベースに、聞き取りにもとづいて作成した。なかには、飛び地で離れた瀬古の所属になっている家もある。たとえば、分家して本家と離れたところに家を建てたが、瀬古は々であることを望んだ場合などである。

増水時の巡視などを行う。防災係は、地震、火事などに対応する係である。

「改良組合」は、農業生産を担当する。各瀬古から選出され、十六輪中全体で組合を組織する。農協との連絡、農作業日の決定、減反場所の決定、農業用水の運営組織である「相川用水運営委員会」との連絡、など実務的なことをおこなうため、農業に従事している住民が担当する。

(3) その他の組織

輪中住民の全員参加が基本となる自治組織のほか、任意で構成される次のような組織がある。

①営農組合

「営農組合」は、農業経営の受託組織である。「改良組合」と異なり、生産と販売をふくめた商業的なはたらきをする。その内容は、共同出資して機械を購入し、収穫物を農協へ販売して利益を得る、というものである。また個人での農業が困難な人の田んぼを預り、組合員が耕作している。現在では、十六輪中の耕地のうち、およそ5町分（5ヘクタール）の田を預かっている。作付するのは、米や小麦である。

②門徒組織

十六町では、神社は自治会の運営にくみこまれるが、寺院は自治会の世話の範囲外にある。そのため、十六町内にある二寺においては、それぞれの檀家が、「門徒」を構成している⁽¹¹⁾。

③老人クラブ

「老人クラブ」は、65才以上のうち任意の人が加入している。神社や墓地、公園の掃除をおこなうほか、芸能大会や寄り合いなどのイベントがおこなわれている。

④消防団

十六輪中では、かつて成年男子は必ず消防に入団することになっていた。ただし現在は、働きに出ていることなどを理由に、入団は絶対ではなくなっている。

2. 生業

稲作の特化

図2-10と図2-11の地図は、明治24年と平成21年の十六輪中の地図である。これを見ると、十六輪中のなかには林野などがなく、集落のほかは耕地が中心となっていることが分かる。そして十六町の耕地は、面積の96パーセントが水田という高い水田率を有している⁽¹²⁾。かつては村人みんなが農業をおこなう「純農村」であったと表現されるように、十六輪中の生業において水田稲作は突出している⁽¹³⁾。

十六輪中の水田耕地は、堤防内に約50ヘクタール（約50町）、堤防外に約20ヘクタール（約20町）ある。一戸あたりが保有する水田は、30アール（約3反）から1ヘクタール（約1町）である。まとまった場所に保有しているのではなく、各家が飛び地で保有している⁽¹⁴⁾。

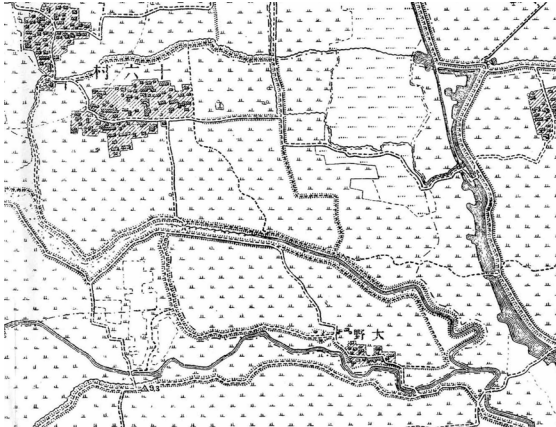


図 2-10 明治 24 年（1981）二万分の一地形図

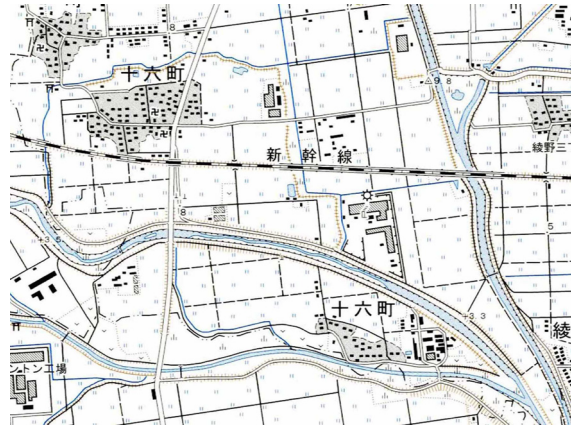


図 2-11 平成 21 年（2009）国土地理院 25000 分の 1 地形図

今はハツシモ一本やな。十六近辺ではほかの品種はほとんど、99 パーセントない。ハツシモは晩稲。蒔く時期はほとんど一緒に、早稲は早く収穫できて、中稲はその後、晩稲はいちばん収穫が遅いというふうに成長にかかる期間が違う。昔はいろんな品種があつて、それを作りわけとった。田んぼ 10 枚あつたら、2 枚が早稲、3 枚が中稲、あとは晩稲。病気対策もあると思うけど、収穫時期をずらさないと大変だつていう考えもあつた。うちはそう考えてやつとったよ。今はトラクターで収穫してまうで 2-3 日ですむから、晩稲ばかりでも収穫できちゃう。ハツシモは岐阜県でいちばんの銘柄だから⁽¹⁵⁾。

ここで言われているように、栽培されている米は「ハツシモ」という品種である。かつてはそれぞれの家が早稲、中稲、晩稲と複数の品種を工夫しながらつくりわけていたが、現在は農協が推奨する「ハツシモ」の単作へと変化している。ハツシモは粒が大きくて食味がよく、縹葉枯れ耐病品種でヒメトビウンカの病除をおこなう必要がないなど病害虫にも強い。その栽培スケジュールを次頁の図 2-12 に示した。6 月の田植えから収穫期の 10 月までじっくり時間をかけて生育する晩稲品種である。

稲作の決まり

表 2-3 は、十六輪中の改良組合がさだめた平成 23 年度の稲作の日程である。ここでさだめられているのは、稲作に関する水管理、共同でおこなう防除作業、田植えの日程である。これらの日程を決めるのは、十六輪中における農業の実務をまとめる「改良組合」である。十六輪中の稲作は、この日程にしたがって進められる。このうち、稲作従事者が厳密にまもらなければならないのが「田植え日」である。

（田植えは）金土日の三日間でやるようになってる。十六町の場合、違反した場合はかならず田植えした後をトラクターでかいてしまう。日にちの前に植えると違反やからね、それを全部とりなさいって。実際やったことはないね。ちゃんと守られてるよ⁽¹⁶⁾。

[illegible]

図 2-12 ハツシモの栽培こよみ
JA 全農岐阜ホームページより転載

表 2-3 平成 23 年度の農業日程

作業内容	日程	内容
苗場ポンプ送電	4 月 30 日	苗場の井戸ポンプに電源を入れ、苗場に水を入れる
揚水ポンプ送電	5 月 27 日	田んぼ全体の井戸ポンプに電源を入れる
ユツキ	5 月 29 日	水路に水を入れ、上から下へと順に田を湛水させる
苗運び	6 月 10 日	苗代から田植えの準備をする。
田植え	6 月 11.12 日	田植え可
干草	7 月 17 日	田んぼの水を落とす日
共同防除予定	8 月 20 日	農薬の散布

十六輪中住民提供資料により作成

ここで語られるように、十六輪中では決められた日にならなければ田植えをおこなってはならないという定めがある。ではなぜ、田植えの日程が決められているのだろうか。

昔は水がなかったでしょ。相川から水を入れとった状態でしょ、昔はね。あと井戸を掘って地下水からとってたんやけど、五年くらい前か、西濃用水って行って、その水がこっち来とるから、べつに田植え決めんでもよくなった。十六だけは決まっとるけど⁽¹⁷⁾。

田植えが決まってるから水の不公平がなくなるんや。(中略)よその村は、田植えは決まることはあるけど、ここほど嚴重ではない。そういうこともだんだんなくなってきた。3日や4日遅くたって、あとの管理で収穫は変わらんのやけどね⁽¹⁸⁾。

ここで語られているように、田植えの日が明確に定められている背景には、水利用がある。次章でくわしく論ずるが、十六輪中には複数の取水源があり、水田の位置によって水のかかりやすい田、時間がかかる田があった。自由に田植えが始められるのであれば、水のかかりやすい田を持っている人の作業が優先的になる。それによっておこる作業スピードの不公平をなくすため、時期が定められていることになる。

そしてこれは、「その日の12時以降じゃないと(田んぼに)入っちゃいかんかった。日が変わってから。今はみんな機械やけど、昔は苗場に行って12時になるの待った⁽¹⁹⁾」というほど、米づくりを競っておこなった十六輪中住民の性質もとづいている。

ただし米づくりで競い合う性質は、現在では薄れている。かつては祭りのようだったという田植えの解禁日に訪れても、作業をおこなっていない水田も多い。こうした状況は、後に述べるように現代の就業形態に起因している。

水害と米

相川、大谷川の水害リスクを抱える十六輪中では、栽培している稲が収穫の前に水害にあうこともある。もとより湛水状態で栽培される稲は、ある程度水に耐性があると考えられるが、どのようなタイミングで水害がおこると、稲にどのような影響をあたえるのだろうか。

7月や8月は、一度沈んでもまだ穂が出てないから充分持ち直す。台風シーズンの9月末からだ、一番成熟するときに腐っちゃう。9月の初めに花がさいて、そのときに強い風が吹くとならない。風で花がとんでいっちゃう。そうすると実も減るし、稲から白くて細い芽が出る。それにべちゃっと倒れちゃうと、機械でも収穫できない。そうなると大打撃。保険かけてあるから若干は出るけどね。ふだんで15万円の赤字なのが、何十万の赤字になる⁽²⁰⁾。

多少水がつく時期が悪いと、それが一粒もとれない状況になるから、作りわけたりしたんやと思うけど。昔の人は「210日のなぜぼうき」って言った。210日っていうとちょうど出水の時、穂の出るときなんや。(中略) 210日は9月10日頃。そのころ水につくと米が捻出しなくて実がならへん⁽²¹⁾。

このように、まだ穂がでてない頃であれば、稲が湛水してしまっても収穫におおきな問題はない。しかし収穫に深刻な被害がでるのは、出穂期である。穂が出ているときに水につくと、腐って実がなくなってしまう。この時期に稲全体が湛水すると、ほうきでなぜた(掃いた)ように収穫が皆無となってしまう。そうした状況を経験し、また聞き伝えられている Kh 氏は、次のように語った。

穂が出てるときに冠水したら、皆無状態になる。長年百姓してると、そういうこともあった。(中略) 腐っちゃって、くっとひっぱると抜ける。ほんとうに皆無状態。鶏や家畜が食べるぶんさえない。明治29年の時の大洪水では、1ヶ月くらい雨が降ったと言われとる。細引きをひいたような雨と聞いているよ。(中略) そのときは米が皆無だった。うちは1町6反作ってたらしいけど、1斗くらい、鶏が食べるような米しかとれなかった。堤防に生えている、オオバコやヨボキセリなんか食べたらしい。みんな食べてしまって、もう草が生えてなかった⁽²²⁾。

十六輪中の生業は稲作に特化しているため、水害を受けるとおおきな打撃を受ける。そこで米が壊滅的状态になった場合には、すみやかに田んぼをおこしてソバなどを作付けしたという。

ただし、マイナス面の強い水害であるが、「洪水の翌年は豊作やと言われる。(中略) 大洪水すると、泥水が肥料をもってくるんや。おおきく言うと、田んぼに1センチくらい泥が積もる⁽²³⁾。」というように、水害はその年の収穫にはダメージをもたらすが、長い目でみると稲作の存続自体を危ぶませるものではないと言えよう。

稲作離れ

生業の中心が稲作であった十六輪中であるが、高度経済成長以降は稲作離れが進んでいる。1960 年ころまでは稲作を生業としてきたが、1965 年ころを境として、第二・第三次産業のサラリーマンへの転職がおこった [岸本 1983: 70]。それにともない 1980 年には、農業以外の所得が主となる第二種兼業農家が 97 パーセントに達した [大迫 1983: 32]。現在十六輪中には 2 軒の専業農家があるが、彼らはいずれもビニールハウスを利用した畑作農家である。なぜ、稲作離れがおこったのだろうか。

今でも大体みんな田んぼ持ってみえる。多いか少ないかだけで。でも自分でやってみえる方は三分の一くらいかな。田んぼはお金の計算すると合わないから。機械買ったら田植機で 100 万円、コンバインで 300 万円、トラクターが 200 万。600 万くらいになる。買って食べる方が安い。若い人は計算するでね⁽²⁴⁾。

このように、それは現金収入のむずかしさと結びついている。十六輪中における一戸あたりの所有農地は、30 アールから 1 ヘクタールから程度であり、小規模農家といえる。その規模で収穫した米を販売したところで、農業用機械類にかかる代金に比して赤字となってしまう。稲作は、「食べていくためのなりわい」としての意義を失っていると言わざるをえない。

しかし、「今でも大体みんな田んぼ持ってみえる」とあるように、稲作を離れた人が、耕地を手放し、完全に農業との関係を切っているわけではない。そこでとられているのが、「経営委託」である。委託の相手は、①個人委託、②営農組合への委託、③企業委託など複数の選択肢がある。①個人委託は、十六輪中住民に委託する場合、十六輪中外の住民に委託する場合の両者がある。②営農組合は、先述したように十六輪中内で構成された組織である。出資した組合員が共同で田んぼを管理している。農業用機械の購入など、個人の手に負えない部分を組織でカバーしている。③企業委託としては、農協への委託がある。

「自分の食べるだけ作って、あとは 9 反ほど委託してます⁽²⁵⁾」というように、田んぼの一部は自分で作付けして一部を委託している場合や、「刈り取りのコンバインが壊れちゃったから、営農組合のを借りて収穫してもらっとる⁽²⁶⁾」というように、農作業の一部分を委託している場合など、委託の内実は複雑である。

経営委託をとった場合、収穫された米やその売り上げはどうなるのだろうか。

営農組合やH屋さんなど他の人に頼む場合は、収入なし。まったく預けっぱなしで赤字でも黒字でも関係ない。営農組合の収入は営農組合の収入だから、個人へ収益はない⁽²⁷⁾。

とれただけ全部もっていってしまう。もとは 1 反に 1 俵くれてた。そうすると、うちは 10 俵で充分食べて行けた。しかしだんだんあっちが強くなって、やらへんと。自分で作りなさい、ということになった。だんだん年いってやれへんでしょう、だから泣き寝入りやね。(中略) 私の代はともかく、あとがどうなるか。みんな農業から離れたけど所得がない⁽²⁸⁾。

このように経営委託の発展によって、田んぼの所有者ではあるが、そこでおこなわれる農作業も収穫される米とも切り離されるという状況がおこっている。

長いことやってないと、機械も持ってないし、操作も分からない。いつどういうふうにするかっていう自信ない。だんだん心が離れていっちゃう。将来崩壊してくると思う。(中略)今はとれた米は耕した人が全部持って行くでしょう。そんなのは力関係やもん。貸してださいなのか、どうぞやってくださいなのか。今はやってください。計算したってそんなの、米にとって売ったって、やった方はそう収益にならへん。そのうち、今度はお金もらわなでらんっていうようになる⁽²⁹⁾。

ここで語られているように、物理的な稲作離れは、精神的な稲作離れにむすびついていく。こうした状況に危機感を持ち、田んぼを大規模化して効率化をはかるべきではないかという意見、あるいはブランドイメージをつくるべきではないかなどという意見もある。しかしもともと農地所有がバラバラで、その管理が個人、営農組合、企業など混在しているうえ、田んぼを手放すことはしたくないという住民のスタンスによって、一貫した農業政策ができない状況にある。

注

(1) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 12 月 18 日)。

(2) 民俗学者の北見 (1924 - 1995) は、「カワはもともと、水の給源の総称であった」と述べて、「川」という語義の広さを示唆している [北見 1981 : 10]。

(3) 上述の Kh 氏、および St 氏への聞き取りによる (2011 年 1 月 20 日)。

(4) 上述の Kh 氏による聞き取りによる (2011 年 1 月 16 日)。

(5) 銅鐸は、明治 34 (1901) 年に住民によって発見された。場所は、輪中内東部の水田である。銅鐸が出土したものの、十六輪中内で正式な遺跡調査はおこなわれていない。さらにその後土地改良がおこなわれたため、銅鐸が出土した場所の遺構の全体像は不明である。それゆえ、銅鐸はどこか別の土地から流されてきたのではないかという推察もできる。しかし銅鐸の保存状態がよいため、流されてきたとは考えにくい。

(6) たとえば自治会長の Ts 家では、檀那寺を垂井町の府中に持っている (2010 年 7 月 16 日聞き取り)。また前述の Kh 氏は 16 代目にあたるが、Kh 家の先祖は滋賀からやってきたと伝えられているという (2011 年 7 月 15 日聞き取り)。

(7) 北山氏は、十六輪中在住の郷土史研究者である。

(8) 「せこ」の語源は不明である。荒崎歴史研究会の会合では、「横町」「小径」を「せこ」と呼ぶことから、「小径で分かれたひとつの集落単位」として「瀬古」が用いられているのではないかという推測がされていた。

(9) アパート住民が瀬古には所属していないことについて、自治会長の Ts 氏は、次のように話した。「アパートはあっても、数には入れてない。出入りがあるしね。アパートの人にあんまりきつという十六も発展しないし、子供の行事には参加してもらったと思うけど、基本的に瀬古には入っていない。瀬古に入っているのは、ずっと十六にみえる方か、新屋で多少増えるくらい。」(2010 年 7 月 16 日聞き取り)

(10) かつて瀬古ごとの伊勢参りがおこなわれていた時には、年行司が瀬古を代表して伊勢参りに行った。年行司が授かったお札を、各戸で祀ったという。また清水屋敷では、年行司の交代時に先祖総供養の行事をおこなっている。瀬古の集会所に先祖代々の法名を書いた法名軸をかけ、寺院から隠居僧を招き、経をとなえる。これを「年行司送り」と呼ぶ。このように、年行司は瀬古の宗教的行事の中心者の役割も果たす。

(11) なお門徒はかつて複数の「講」を組織していた。たとえば、明治24年(1891)の濃尾震災のときには、壊れてしまった寺を再建するために「頼母子講」をつくり、地主のSk氏を中心として、皆で1000円ずつお金を積み立てて修繕費にあてた。また、かつては報恩講の手伝いをするにあたり、青年団は「和讃講」を、婦人会は「法話会」を組織した。(2011年7月15日Kh氏より聞き取り)

(12) [大迫 1983:36]

(13) もっとも、水田では稲のみを栽培していたわけではない。60代から80代の住民に裏作で栽培したことのある作物を尋ねたところ、大麦、小麦、菜種、レンゲ、ソバ、ヒエ、大豆、小豆など、バリエーションに富んだ穀類があげられた。菜種やレンゲは肥やしとなるうえ、種を売って現金収入にあてられた。また菜種の茎は、山林資源の乏しい十六輪中では重要な燃料資源でもあった。現在ではこうした裏作はおこなわれていないが、米の生産調整のため35パーセントの田んぼで集団転作がおこなわれているため、水田すべてで稲を作付けしているわけではない。転作の作物は小麦であり、補助金を受けることができる。

(14) Sk家、Kh家、Tg家など、かつての地主階級の家々で水田保有状況を調査したところ、やはり水田保有は飛び地形式であり、十六輪中ではそのような水田保有が一般的であるとのことであった。

(15) Kh氏からの聞き取りによる(2011年5月23日)。

(16) 自治会長のTs氏からの聞き取りによる(2010年7月16日)。

(17) 同上

(18) St氏からの聞き取りによる(2011年1月20日)。

(19) 自治会長のTs氏からの聞き取りによる(2010年7月16日)。

(20) Yd氏による聞き取りによる(2011年3月21日)。

(21) Kh氏からの聞き取りによる(2011年5月23日)。

(22) Kh氏からの聞き取りによる(2011年3月14日)。

(23) Kh氏からの聞き取りによる(2011年7月15日)。

(24) 自治会長のTs氏からの聞き取りによる(2010年7月16日)。

(25) St氏からの聞き取りによる(2011年9月16日)。

(26) Yd氏からの聞き取りによる(2011年3月21日)。

(27) 同上

(28) St氏からの聞き取りによる(2011年9月16日)。

(29) Tg氏からの聞き取りによる(2010年9月26日)。

第3章 水制御の技術

本章では、十六輪中における水利用と水防の技術について論じる。扇状地末端部に位置する十六輪中は、大谷川、相川にかこまれ、また地下水が豊富である。そうしたなかで輪中住民は、どのように水とかかわってきたのだろうか。ここでは農業および生活における水利用、水害への対応策としての水防活動、また取排水の管理の具体的な技術を見ていく。

第1節 水利用

1. 農業の水

(1) 西濃用水

現在農業用水の中心となっているのは、西濃用水である。西濃用水とは、揖斐川上流の横山ダムを水源とする、県下最大の農業用水である。図3-1は、西濃用水の主要幹川を示したものである。幹線水路と末端のパイプラインは網目状に伸びており、受益地は、大垣市、養老郡養老町、不破郡垂井町、安八郡神戸町、揖斐郡揖斐川町、同郡大野町及び同郡池田町流域周辺と、揖斐川沿い一帯にあたる。このうち北部地域は、扇状地で河川水量がすくなく、また土壌が砂質のため慢性的な水不足に悩まされていた。また南部地域は、灌漑に地下水やため池を利用しており、水源が不安定であった。営農の近代化にあたって水資源の安定化がもとめられたことから、西濃用水がつくられることになった〔東海農政局ホームページ〕。

西濃用水は昭和59年（1984）から利用がはじまったが、当初十六輪中は直接の受益地ではなかった。当時の十六輪中では地下水を灌漑に用いており、水を確保できたためである⁽¹⁾。十六輪中が直接西濃用水の受益地となったのは、平成12年（2000）以降である。水量の多い、より安定的な灌漑用水を得るための試みであった⁽²⁾。

十六輪中に西濃用水をはこぶため、西隣にある垂井町表佐から、相川左岸用水路の末端を延長する工事がおこなわれた。水はパイプラインで地中をとって直接輪中内に引きこまれている。放水口の管理は表佐の担当者がおこなっているため、十六輪中では水が必要な際に連絡してバルブを開けてもらう。その連絡は、改良組合の担当者がおこなっている。そして、十六輪中側にある西濃用水の取水口を開放し、輪中内に水を取り込むのである。写真3-1が、十六輪中内にある西濃用水の取水口である。

「西濃用水にきりかえた時はやはり便利やった。どんどん水が湧くから⁽³⁾」と語られるように、それまでに取水方法にたいして、西濃用水は大量の水を安定的に十六輪中へ供給する。こうして現在の十六輪中の灌漑用水は、大部分を西濃用水にたよることになっている。

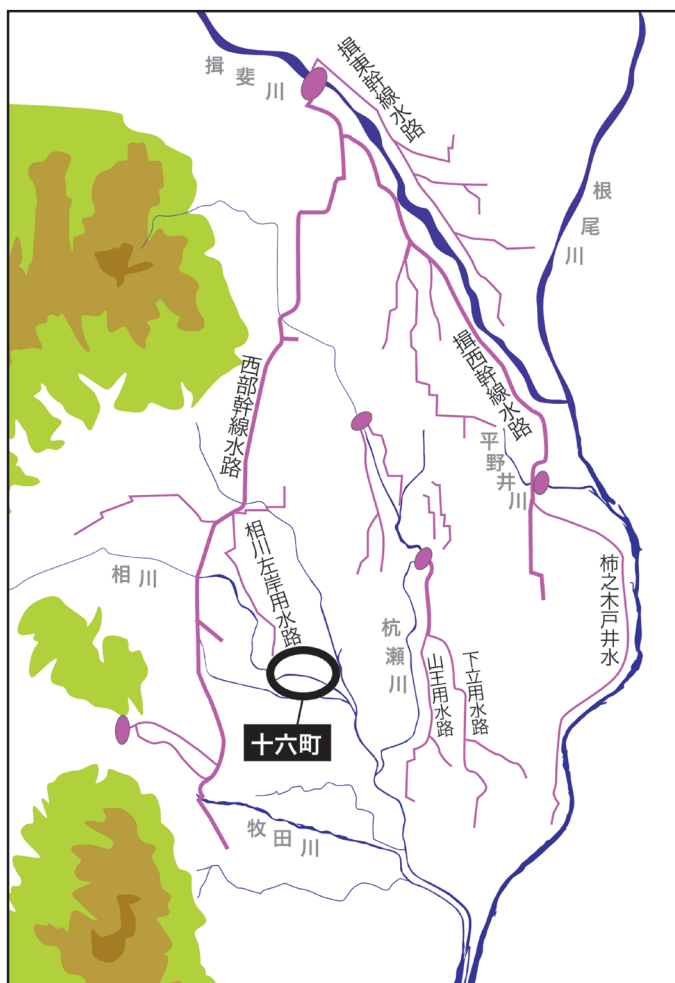


図 3-1 西濃用水の主要幹川

国土交通省提供資料にもとづき作成



写真 3-1 西濃用水の取水口

(2) おたれ

おたれの水源

西濃用水と併行して用いられているのが、「おたれ」である。おたれとは、十六輪中に北接する島町から流れてくる水のことを指し、「上から垂れてくる」の意であると考えられる。

第2章で述べたように、島町ではガマとよばれる自然の湧き水が豊富であった。この地下水が、おたれの水源である。ガマは一年を通して湧き続けるため、小規模ではあるが、安定した水源と言えるだろう。ただし現在の島町では西濃用水が導入されているため、ガマの水と西濃用水の水が混ざっていることになる。いずれにせよおたれは、十六輪中にとって望むと望まないに関わらず上流から自然に流れてくる水であるため、使用権の争いや使用料は発生しない。

取水口と取水方法

「おたれ」の取水口は一ヶ所である。位置は、図 3-2 に示したように輪中堤防の北西部地点である。取水口の標高は 7.5 メートルほどであり、輪中内では比較的高い位置にある。ここから取水したおたれの水は、輪中の北半分の田んぼにとって、重要な水源となっていた。

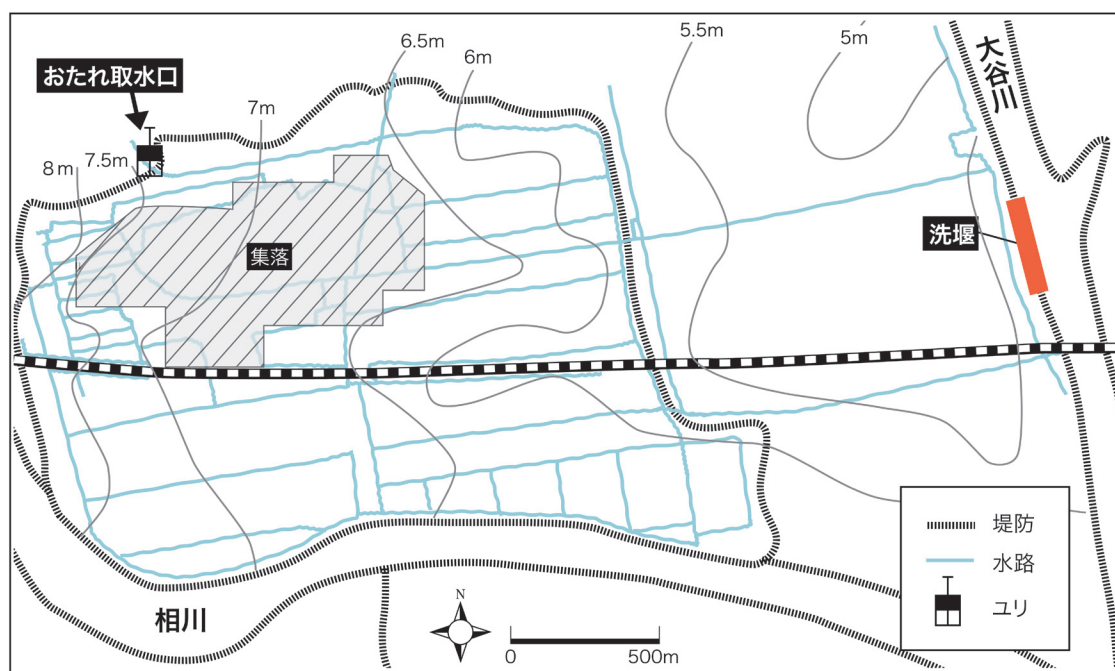


図 3-2 おたれの取水口の位置

地形図は国土地理院の地図にもとづいている。取水口は現地調査をもとに作成



写真 3-2 おたれをせきとめるユリ（左）、輪中内におたれを引き入れるユリ（右）

島町と十六町のあいだは輪中堤防で遮られているため、おたれは輪中堤防下の水管を通して引きこまれている。取水口の開閉は、十六輪中で「ユリ」と呼ばれる手動式の門でおこなう。まず写真3-2左のユリを下ろし、おたれをせき止める。そして写真3-2右のユリを上げ、輪中内へと水を入れるのである。不要であれば、写真3-2右のユリを下ろし、写真3-2左のユリを上げる。そうすれば、おたれは十六輪中堤防内に流入せず、大谷川方面へと排水されていく。

おたれは、けして水量が多いわけではないが、絶えることなく湧き続けるうえに、取水技術も容易である。水害をとまうリスクもない。十六輪中住民にとっては、もっとも利用しやすい水源であると言えるだろう。

(3) 電動ポンプ式井戸

西濃用水やおたれとあわせて、十六輪中では灌漑用水として電動ポンプ式井戸が用いられている。これは、電力で地下水をくみ上げるものである。

現在十六輪中には、灌漑用に電動ポンプが4箇所もうけられている。その場所を図3-3に示した。ポンプ①は、かつては自噴の井戸だったところに電動ポンプをつけたものである。この何面が苗場となっているため、苗をつくるときの水源として利用されている。

電動ポンプ式の井戸のうちもっとも古く大規模なのが、輪中西部の相川堤防下にあるポンプ②である。西濃用水が導入される前は、この井戸が灌漑の中心として最大の水量を提供していた。井戸は直径は3メートルちかく、写真3-3にあるようにフェンスで囲まれている。相川堤防のすぐふもとにあり、相川の「浸み水」がわきやすい。そのため、電動ポンプのスイッチがついてなくとも、地下水が常に湧いている状態となっている。

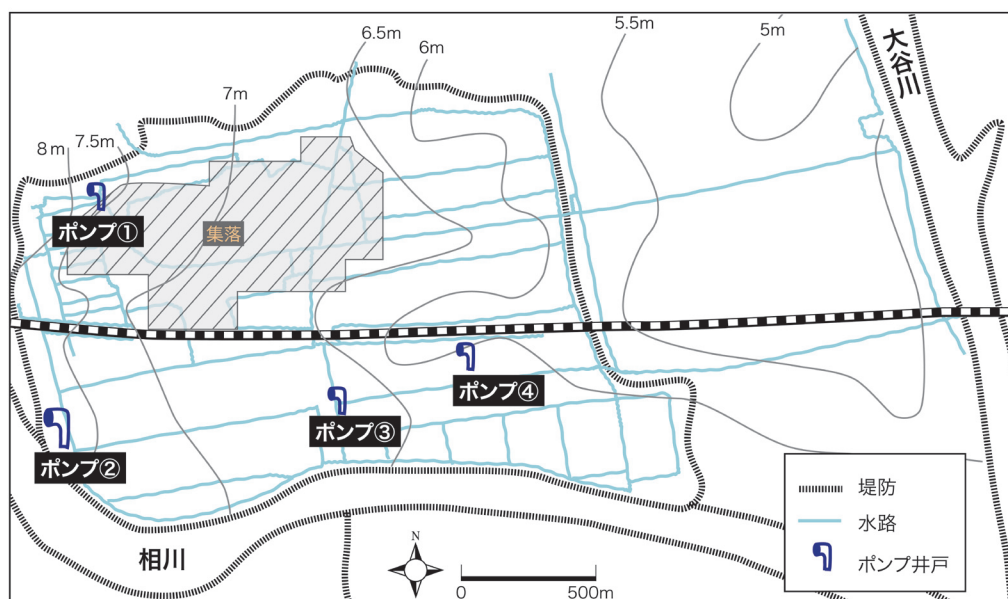


図3-3 電動ポンプ式井戸の位置

地形図は国土地理院の地図にもとづいている。ポンプは現地調査をもとに作成



写真 3-3 ポンプ② フェンスに囲まれた井戸（左）、井戸は堤防のすぐ下にある（右）

牛飼の井戸は手で掘ったの。スコップで。それは井戸屋やなくて、土地改良の時に、堤防決壊して復旧工事かねての土地改良やったで、井戸屋やなしに人夫さんで掘ったんや。十六の人らも、おれんたが掘ったにと行つてた。（中略）人夫さんたちが水が吹き出るところまで掘って土管を入れた。それで吹き出る水をポンプでくみ上げてる⁽⁴⁾。

とあるように、このポンプ②の井戸は昭和 29 年からおこなわれた土地改良事業の工事の一環として掘鑿された。十六輪中住民による手掘りの井戸である。

ポンプ③は、輪中西部から流れてくる水が東部の田んぼに届くのが遅いために設けられた。ポンプ④は、地下水をくみ上げているわけではなく、水路の水を電力でくみ上げている。「そのポンプから南側は土地が高い。それで、ふつうでは西から順番にかけてきても水がいかない⁽⁵⁾」ため、ポンプで水をくみ上げる必要があった。

これらのポンプはすべて灌漑用水の専用に設けられたものであり、改良組合が管理している。なお、西濃用水が導入されてからは、それだけで十分な水量を得ることができるようになった。それによって、これら電動ポンプ式井戸の必要性は減少した。しかし、まったく使用されていないわけではない。

いまは西濃用水があるから使っていないけど、ただ、西濃用水が故障すると困るから、ポンプも若干使う。たとえば水をかける一週間くらい前に、西濃用水と一緒に水をかける。ポンプも動くようにしておかないと、いざというときには使う。あと、県道から東のほうは水が行くのが遅いでしょう。だから墓地のそばのポンプでくみあげてる⁽⁶⁾。

西濃用水がくればダーダーくるから、ポンプを止めてまう。西濃用水が来るまでの間に、しろかきとかするためにポンプの水を使う⁽⁷⁾。

すなわち、電動ポンプ式井戸は西濃用水の補助的なかたちで利用されているのである。そこには西濃用水に「故障」や不具合があったときのために、あえて複数の水源を確保しておこうと

いうリスク回避的な思考が背景にある。また電動ポンプ式井戸によって、西濃用水がくる前の早い段階から自由に水をつかうことができる、あるいは西濃用水の水が届くのに時間がかかる輪中東部にもすみやかに水をかけることができる。

以上のように、十六輪中における農業用水は、西濃用水、おたれ、電動ポンプ式井戸が複合的に利用されている。

2. 生活の水

それでは、各家庭における生活用水はどうだろうか。地下水が豊富な十六輪中では、かつては各家庭に自噴の井戸が掘られていた。しかし西濃地域における自噴性地下水帯の縮小と共に、その湧出量は減少している。そうしたなかで、十六輪中では昭和30年（1955）頃から市水道が普及した。しかし、すべてが市水道に切り替えられたわけではない。

うちはポンプかけた井戸と水道の両方使ってる、井戸はポンプの電気料金だけでいい。市水の使用量が少ないで他よりは安いよ⁽⁸⁾。

家のなかの井戸は、まだ昔の井戸からくみ上げてます。（中略）井戸水は夏冷たくて冬ぬくとい。夏はスイカなんかを冷やすんや。水道が通ったのは大垣市と合併してからですね。井戸水と水道、両方使ってる。昔から十六に住んでる人の家には、家ごとに井戸がある。ポンプがつく前は、筒から湧いて来たんです⁽⁹⁾。

農業用水をポンプでかやると地下水が下がるから、その間は止まるわね。夏場はあんまり出ない。だからポンプをつけて、夏場も使えるようにしてある。電気をとおして、ポンプでかりあげる。（中略）水が止まるときで使いたいときは、このポンプで電源入れる。車洗うときとか。飲み水は水道つかつとる⁽¹⁰⁾。

このように、現在でも市水道と井戸を併用している例が多くみられる。井戸は電動ポンプで揚水できるようになっており、水道のようにパイプと蛇口で引水できるように施工されている。もっともそれは、水質のよい地下水が得られる家に限られる。「十六でも市水だけの家もあるよ。昔からいる家でも、自噴が止まってしまったり、ソブの家では市水だけを使つとるね⁽¹¹⁾」と言われるように、赤茶色に濁ったソブ水が湧く地域の住民は、かつては水を濾過して生活用水にあてていたが、現在は市水のみを使用している。またなかには、自宅ではソブしか湧かないので、水質のよい場所から地下水をパイプで引水し、井戸水を使っている住民もいる⁽¹²⁾。

こうして十六輪中における生活用水は、それが可能な範囲においては、市水道と井戸を複合的に利用している。

3. 弘法の井戸

十六輪中の水利用において、「農業用水」「生活用水」という枠におさまらないのが「弘法の井戸」である。地下水が豊富な十六輪中であるが、弘法太子が掘ったと伝えられているこの井戸には、ゆいいつ固有名詞が冠せられている。

図3-4に示したように、弘法の井戸は集落の南東部に位置している。瀬古でいうと清水屋敷に属しており、「清水屋敷」の由来は弘法の井戸にあると推測することができる。井戸はつねに解放されており、いつでも、誰でも自由に水を汲むことができる。十六輪中の共用井戸である。

写真3-4は、かつての弘法の井戸である。平成21年(2009)、当時の自治会長O氏と十六輪中の歴史に通じた古老Kh氏およびKt氏が中心となって大垣市の助成を受け、井戸周辺は整備された。写真3-5が、うまれかわった現在の弘法の井戸である。

工事に際しておこなわれた調査によると、弘法の井戸の深さは16メートルである。大垣市による検査によれば、水質は表3-1のように不純物がすくない軟水で、炊飯や緑茶を入れるのに適している。

- ①「水質検査をしても大丈夫やという紙がはってあって、毎日誰かかれかは来ておられる⁽¹³⁾。」
- ②「みなさんけっこう水を汲みにきてみえるよ⁽¹⁴⁾。」
- ③「弘法さんの水を毎日くんでくるんや⁽¹⁵⁾。」
- ④「毎日10人くらいはくんでみえる。市のほうで発表してくれて、みんな遠いところからくみにくる。ちょっと美味しいような気がするな、他の井戸より⁽¹⁶⁾。」
- ⑤「うちのお袋なんかも飲んでる。おなじ地下水だけど味がすこし違う。こんだけ近いのに⁽¹⁷⁾。」

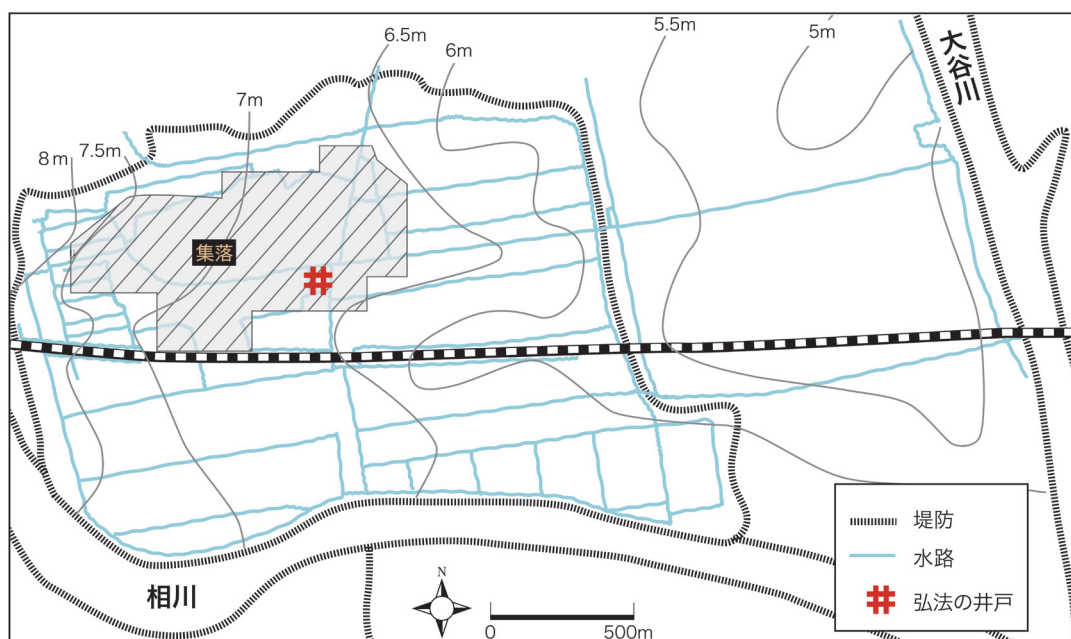


図3-4 弘法の井戸の位置

地形図は国土地理院の地図にもとづいている。井戸は現地調査をもとに作成

ここで語られているように弘法の井戸の水は、十六輪中住民、および外部の人々が利用している。飲み水としたときには、おなじ十六輪中のなかでも特別に美味しいと受け止められている。たとえば味について言及している④と⑤の住人は、それぞれ清水屋敷と北浦に所属しており、住宅は弘法の井戸にほど近い。自宅には井戸があり、市水道と井戸を併用している。それでありながら、自宅の井戸より弘法の井戸の水が美味であると感じられるようである。



写真 3-4 整備以前の弘法の井戸 北山 2008：40 より転載



写真 3-5 現在の弘法の井戸

表 3-1 弘法の井戸の水質

	弘法の井戸	おいしい水研究会	水道水の水質基準
蒸留残留物	76mg / L	30-200mg / L	500mg / L 以下
硬度	29mg / L	10-100mg / L	300mg / L 以下
遊離炭酸	—	3-30mg / L	20mg / L 以下
過マンガン酸カリウム消費量	0.2mg / L	3mg / L 以下	10mg / L 以下
臭気強度	異常なし	3 以下	3 以下
残留塩素	なし	0.4mg / L 以下	1mg / L 以下
水温	16.5℃	最高 20℃ 以下	—

十六町自治会提供により作成。おいしい水研究会は、日本の水道水の現状について調査をおこない、水質要件を検討するため、厚生省（当時）が昭和 59 年に設立した団体。

十六輪中では自噴井の湧出量が減少していることを先に述べた。しかし、そうしたなかで弘法の井戸は、現在でも自噴のままである。

この三味のところ（注：ポンプ③に該当）の井戸をかやると、弘法さんの井戸がちょっとあがるんや。年間に2-3日とぎれるんや。とぎれんようにやってくれよ、と言うけど。汲みに来ても出とらせんがや、となる⁽¹⁸⁾。

パイプがつけてあるというだけで、自然に湧いてる天然水。で、どうせ湧いてるなら掘って噴き出すようにすればいいという意見もあったけど、それでは意味がないと聞いた。干上がったときは干上がったときで、自噴だからいいんやと⁽¹⁹⁾。

ここにあるように、弘法の井戸が1年の間で途切れるのは、灌漑用の電動ポンプ式井戸が使用される2-3日のみである。それ以外は、自噴で湧き続けていることになる。弘法の井戸は、十六輪中のなかでも標高の低い谷筋に位置している。そのため、とくに水量が豊富であると考えられる。そして、そのように「弘法の井戸が自噴で湧いていること」自体に意味を見出すスタンスがとられており、水量は現在のままで無理に増やす必要はないとの判断がなされ、ポンプは取りつけられなかった。

以上のように、弘法の井戸は「自噴の水量」と「味」の面で、十六輪中において特別な井戸であると言える。

第2節 水防

1. 家ごとの対応

水害に備えた住居

十六輪中の集落は、標高7メートル前後の輪中内で比較的高い位置にある。それでも床上浸水被害を受けるのであれば、さらに住居を高くする必要がある。十六輪中の集落を歩くと、高低はさまざまだが、母屋に土盛をおこなっている家がほとんどである。

この家は1メートル20か30土盛してある。(中略)よそより高い。だんだん上がってきてるでしょ。それでまた私が家を建てる時、昭和26年にまたあげた。相川が切れない限り、つかない。洗堰を越えて水がきても、つかない⁽²⁰⁾。

泥を持ってきて盛土して高くして、よそにくらべてはるかに高くなってる。だから段々とかいろいろ多いね。家のなかもガタガタ。とにかくこれは高く高く、水につかないようになってる。(中略)母屋も床下が50センチくらいある。家の中が一段一段高くなってる。家を建てる時に注文つけたんやろうね⁽²¹⁾。

ここで語られているように、土盛は、床上浸水を経験するなかで積み重ねられてきたものであり、土盛することによって輪中内に水が流入したときにも一定の水位までは床上浸水を免れることができるようになっている。

またこうした土盛にくわえて、母屋に水が浸水してきたときの避難所として水屋をもうけている家、あるいは輪中内が冠水したときの移動手段として舟を備えている家もある⁽²²⁾。このような形で、十六輪中の住居は水害に備えた構造となっている。

水かたづけと炊飯

輪中内が氾濫したとき、流入した水の量が多い場合には、住居をかき上げていても水が床上まで到達する。家屋そのものは濡れても再起不能にはならないが、家具、農産物、家電製品などは、水に濡れるとだめになってしまう可能性がある。こうした被害を避けるため、危険時に家の財産を高いところに運び上げることを、十六輪中で「水かたづけ」という。

(昭和28年の相川決壊時には)おやじが家におったもので、全部片付けたわな。うちでは、水かたづけを完璧におこなったもので、草履一足、下駄一足、藁一粒も流さなんだ⁽²³⁾。

主人もそのころは消防かなんかで、警戒水位になるとすぐ出ないかんでしょう。村中出るでしょう。だから女手だけで、おばあちゃんと私と。タンスや冷蔵庫を全部ね。息子が小学校の5年くらいで、2階に置いて、私とおばあちゃんが下からが一っつもちあげて⁽²⁴⁾。

後に述べるように、出水時の十六輪中では、男性が水防活動のため出払っている。その場合、家に残った女性や老人、子供らが水かたづけをおこなうことになる。家電や家具をもちあげておこなう水かたづけは、まさに火事場の馬鹿力であるという。なお現代の財産のひとつである自家用車は、輪中内で標高の高い八幡神社の方面や、相川堤防上へと避難させて浸水を避ける。

水かたづけによって、床上浸水がおこっても各家の財産を守ることができる。しかし、自然排水しかできない十六輪中では、輪中外の河川の水がひかないかぎり冠水状態がつづく。そのとき問題となるのが食事である。

（昔は）水ついたら、味噌汁をたいてこの桶に入れたんや。味噌汁桶と書いてある。3日や4日、味噌汁はもちます。できたら一週間もたせた。味噌汁は塩がようけ使ってあるで、そんな早くいたまへんかった⁽²⁵⁾。

台風なんかがこちらを直撃するんやったら、お米かしてね、お茶もわかれて、水も余分に汲んで、二階にあげる。そういう準備しておくね。電気が消えても水道が止まってもいいように、そういうことはみんなやってみえると思うね。昔からの言い伝えやでね⁽²⁶⁾。

昭和28年の時は、3日くらい水についてたかな。（中略）水につiter間はどうしようもあらへん。だから水かたづけというのは、あわせてご飯をたく。余分にたいて、用意しておく。誰も応援にきてくれないから。水がついて舟がないと誰もこれへん。2日くらいはほとんど来てくれへん。2日後くらいに大垣市から炊き出しがきたと思う。2日後に来たって、そのころにはもう自分のところでご飯たいたりしてるわ。今の東北でもそうだけど、1日2日が一番困窮する。だからごはん焚いて、井戸水がきれいなうちに汲んでおくんやわ⁽²⁷⁾。

こうして、水道や電気などのライフラインが停止した場合に備えて、各家では水かたづけとあわせて食事の準備をおこなう。写真3-6は、St家で利用していたという味噌汁桶である。これは現在では使用されていないが、味噌汁でなくとも、水と食料を用意するように昔から言い伝えられている。

もともと戦前にくればれば、大垣市による救援物資の配布システムは整っている。それでも、浸水域がひろければ救援にはタイムラグが生じ、水害直後の「1日2日が一番困窮する」ことになる。家族が食べる分の食事を確保しておくことは、水害を乗り越えるための対応策のひとつなのである。



写真 3-6 味噌汁桶

2. 輪中としての対応

輪中堤防の維持管理

輪中の本義が「共同体」であったように、水防活動は家単位だけでなく、輪中単位でおこなわれる。輪中住民にとって、水防を象徴するのが輪中堤防である。この輪中堤防を守ることが輪中単位での水防の基本となっている。

十六の輪中堤防は、輪中住民の手で作られた。しかし現在この堤防は十六輪中住民の所有物ではない。十六輪中堤防のうち、相川河川堤防部分は県管理区間にあたるため、岐阜県の管理下にある。そして相川河川堤防以外の部分は、大垣輪中水防事務組合の管理下にある⁽²⁸⁾。こうした管理体制になっているため、たとえ十六輪中堤防に異変があった場合でも、住民の判断によって自由に堤防を改修することはできない。

今は多少がらがらになつとるやね、雨で泥が流されてまつとるし。そいつを何とか直したいんやね。今年一箇所は直すけどね。(中略)こんだけの長い輪中は十六にしかないらしいね。立派な輪中残つとるのはここだけらしいね。で、文化保存の方にするか、と。でも全然直ってへんから断ってね。それをやるよりは堤防直してくれといっても直してくれへんし⁽²⁹⁾。

輪中堤防は土でできているため、年月とともに劣化していく。その修復を望むのは、輪中住民としては当然のことである。「今年一箇所直す」ことができたのは、部分的に低くなっている輪中堤防の改修を希望する旨を大垣市輪中水防事務組合の議会にかけ、協議の結果改修工事が認められたためである。しかし認められたのは一箇所だけであり、思うように修復は進んでいない。

現在では公共の財産として位置づけられている十六輪中堤防だが、住民にとってはあくまで自らの住居や耕地を守るための水防施設であり、文化遺産として位置づけられるものではない。

年中行事

①防災訓練

十六輪中では、年に2回の防災訓練がおこなわれている。

1回目は6月中頃に大垣市と合同で実施される。このとき十六輪中堤防に二箇所ある切割に異常がないかを点検し、実際に切割の締切をおこなう。訓練の際は交通を遮断することになるため、夜間に実施している(写真3-7)。

2回目は7月中頃に、十六輪中が自主的におこなう。これは洪水のみならず、地震や火災などの災害も含んだ訓練である。防災係は火災にそなえて消火栓ホースを点検し、水防係は水防倉庫の内容確認、堤防の状態確認をおこなう。また女性防火クラブは公民館で炊き出しをする。

十六輪中には水防倉庫が二箇所ある。輪中東部の相川堤防沿いと、輪中西部の切割横である。写真3-8が、それぞれの水防倉庫の様子である。いずれも鉄骨二階建ての建物で、倉庫のなかには、表3-2のような堤防の決壊を防ぐための工法に必要な道具が揃っている⁽³⁰⁾。防災訓練ではこうした道具の保存状態を確認し、その夏の洪水に備えておく。



表 3-2 水防倉庫の装備

	杭	土嚢	シート	縄	鉄線	掛け矢	蛸槌	しの	スコップ	クリッパー
輪中東部	350	5,000	12	7	30	10	6	15	15	2
輪中西部	360	6,000	22	4	30	10	6	23	13	2

大垣輪中水防事務組合 2009 をもとに作成

②草刈り

出水期の6月から8月にかけて、堤防の草刈りが行われる。除草作業は、堤防管理主からの委託業務である。すなわち相川堤防は県から、輪中堤防は大垣市からの委託であり、委託助成金が出る。もっとも、委託業務となる以前から、草刈りは輪中住民がおこなっていた。むしろ、かつては草を牛馬の飼葉にしたため、草が伸びっぱなしになることはなかったという。

現在の十六輪中では、6月に輪中堤防の草刈りを、7月に相川沿い堤防の草刈りを、そして8月に再度輪中堤防の草刈りをおこなう。堤防の草を刈っておくことで、漏水箇所を発見しやすくなるうえ、堤防にいる蜚の駆除にもなる。草刈りでは、写真3-9にあるように、1メートル30センチほどに伸びきった草を、なぎ倒していく。刈り倒した草は、一週間ほどそのままにして乾かした後に焼く。刈った草をそのままにしておくと、堆肥となって土が肥え、ミミズやモグラが増えて堤防の強度が弱るためである。

草刈り作業は、各家からかならず1人が参加する「全戸参加」が義務づけられている。除草する場所は、瀬古ごとに割り振られている。

③川ざらえ

「川ざらえ」とは、「川底を浚える」の意である。ここでいう川とは輪中内を流れる水路を指し、つまりは輪中の水路掃除のことである。「川ぼり」ともいう。川ざらえは4月の記念碑祭りの後、9月の八幡神社大祭の前日準備の後におこなわれる年中行事である。

川ざらえでは、輪中内の主要な水路を掃除する。その担当箇所は、瀬古ごとに定められている。写真3-10にあるように、水路に入ってスコップで水路にたまったヘドロや草を取り除いていく。十六輪中の水路は取排水の区別がないため、水路を流れやすくしておくことは、稲作灌漑にとっても水害対策としても有効である。川ざらえも全戸参加が原則となっている。「参加しなかったら精神的な村八分を受ける」と揶揄されるほど、参加は徹底している。



写真 3-9 草刈りの様子



写真 3-10 川ざらえの様子

出水時の出動体制

大垣市における水防組織は、「明治維新から昭和 36 年の水害予防組合の解散まで、水防は地元住民の手に委ねられ、組合員からの組合費によって水防活動が実施されていたが、水防事務組合になると市町村を組合員として市町村の一般会計予算で運営されるもの」となった。[大垣市 2010 : 329]。つまり昭和 36 年（1961）以降、水防は行政主体でおこなわれるようになった。現在の大垣市では、市の水害対策本部が各自治体の自治会長へ指令を出す形になっている。このシステムに従えば、十六輪中の水防は大垣市の指示下にある。

しかし十六輪中では、独自の指令による出動体制が組織されている。十六輪中における水防隊長は自治会長である。その下に、自治会役員の水防担当者があり、各瀬古に一人ずつ水防係が置かれている。出水時には、次のような出動体制をとる。

〈第一出動〉

水防隊長が量水計などを用いて増水の確認を行う。必要に応じて自治会役員の水防担当者を招集し、公民館で待機する。

〈第二出動〉

逆流水の原因となる周辺河川において著しい増水が見られたら、各瀬古の水防係を招集する。水防係は、持ち場の堤防を警戒し、漏水箇所の早期発見に勤める。

〈第三出動〉

堤防決潰の危険が高まったら全戸招集となる。これを「総出」と呼ぶ。全戸から男性が出動して、堤防決潰の危機に備える。大谷川が危険水位に達したら、堤防の切割部分を締切る。水防活動にあたる人々の夜食用の炊き出しがおこなわれる。

十六の場合は、昔から大垣市が対策本部つくる前に、みんな出てしまつとるでね。自治会役員と水防は、必ず早く出します。それで公民館で警戒しとる。（大垣市から連絡があるのは）大体その後くらいやね、いつもね。（中略）私らも台風なんか来たら 2 時間おきに見に行く。自治会長としての責任があるから、雨がようけ降ったら見に行く。（中略）全員出てもらって、

各所帯から1人、男性が。それで、区域がきめてあるところへ皆さん行く。多分この辺では十六だけやないかな、そういう組織がきちんとしてるの。行政はなんもやってくれへんでね、ここだけやないんやで。後のことならやってくれるけどね。できることは自分たでやらんと。(総出に來ないということは) まずない。父親が遠くにいったら、奥さんが出てくる。自分とこの財産を守れるんやで、出てきてあたりまえ⁽³¹⁾。

ものすごい災害でも、人として、助かる手立てはある。瞬時に予測するデータベースを持っていればね。それを持っていないと、対応のスピードが遅くなって、手立てが途切れる。十六の人は潜在的に意識が高い。ちょっとした雨でもほとんど見に行く。若い人はそういう意識が減っていつてるけど、我々以上だと誰かが來てる。自主的に來てる。そこでもう段取りしている。この状態だと第2出動がかかるぞ、と⁽³²⁾。

ば一っと降ってくると、総出と言って各家からスコップ持って、出て行く。手ぶらで行ったらだめだよ。土嚢をつくらないかん。砂利が置いてあるわけ。袋は水防倉庫に置いてある。どどこが低いので土嚢を積んでふせがないかん言って、ちゃっちゃとやる。だから、手ぶらできたらいかん⁽³³⁾。

十六は昔から水にたいする意識はつよい。水防の場合、総出のときは誰1人文句いう者はおらへん。と思うよ。その点はいい。もちろん出てきても油売ってるやつもいるけど。出不足をとるような決めはない。そんなことしたら來なくなっちゃう⁽³⁴⁾。

ここで語られているように出動体制は徹底している。「総出」にたいする住民の意識は高く、フットワークは軽い。行政からの指示を待つ、ということはない。なぜなら出水時に「危険」な箇所は多く、実際の被害が起こっていない段階では、行政を頼ることは意味がないからである。

出不足すなわち、出動するかわりにお金を支払う仕組みをもうけたら「來なくなっちゃう」と語られているように、じっさいには水防活動より仕事などを優先させたいと考える住民もいる可能性はある。しかし現在の十六輪中では、ほかの誰かに頼るのではなく、「自分とこの財産を守る」ために出動するのは当然である、という意識が保たれている。

出水時の堤防警固

出水時の堤防警固は、瀬古ごとに持ち場が決まっている。これを丁場割(ちょうばわり)と言う。丁場割は草刈りにおける担当箇所とおなじである。各瀬古では、丁場の堤防を巡視して、警固にあたる。具体的には、漏水箇所や溶解箇所の早期発見につとめ、堤防補強のため対応をおこなう。たとえば漏水箇所を発見した場合、該当箇所の下に土嚢を積んで池をつくり、そこを漏水した水の逃げ場とする。これは月の輪工法と呼ばれる水防技術である。

こうした作業には、経験と知識が必要である。そのため場合によっては、「今の若い子は何しにきたかわからんような子がいる。3-4年前、相川堤防が漏水したとき、消防の支援を頼んで

月輪工法でやれといったらその工法をしらんという⁽³⁵⁾。」ようなことも起こりうる。「漏水が透明のうちはいいが、濁ってくると決壊の危険性が高い」「不用意に杭をうつと地盤を崩す」など、水防活動について語るとき必ず聞かれるような十六輪中住民共通の水防知識は、経験を積むなかで伝えられていくのである。

そして、総出による堤防警固は、洪水の危険性がなくなる限りつづけられる。

去年、夜中の1時くらいやったかな、みなさん出てもらって。朝の6時半まで。土囊積んでやったけどね、相川だけがすごかったでね。山側でふったんやろうね。行ったら一番最高で堤防から手が洗えたでね、決壊する可能性があるでね⁽³⁶⁾。

昭和51年の9.12の時はひどかった。大野も全部水がついた。長良川の本堤が切れたから。あの時は3日3晩一睡もせえへんかった⁽³⁷⁾。

水防で2日くらい徹夜で堤防の番しとる。睡眠不足でねぶたくて半分白目になってくる。のどがかわく、片方に水がついてるからマムシなんかが堤防の上にでてくる。そりゃあ怖い。その間食べ物はないから、そのために水防と別に年行司が炊き出しの容易をする。ごはんをたいて、握り飯つくって、くばらならん⁽³⁸⁾。

一晩中、あるいは二晩、三日三晩など、危険がつづく限り総出での堤防警固は続く。精神的にも肉体的にもタフさが求められる、過酷な作業である。目の前で水がうずまくなか、睡眠もとらずにおこなわれる水防活動は、「そりゃあ怖い」という状況がありありと想像できよう。

なお第三出動においては、堤防の切割箇所の締切がおこなわれる。これによって十六輪中の堤防は完全な輪形となり、大谷川洗堰からの越流水を防ぐことができる。実際に、平成14年(2002)に洗堰から越流が起きたときは、十六輪中内は堤防守って浸水をまぬがれた。ただし、輪中堤防を持たない荒崎地区一帯は、広い範囲で床上浸水被害を受けた。ひとつの地区の中で、はっきりと被害の明暗が分かれたことになる。

(洗堰から越流したとき) ここから見える家がもう水につかっとなるやろ、そうするとその犬がおぼれかけてる。その頃はもう水防団が来てるから舟でやりとりして助けに行ってる。十六はついてない。(略) そういうときは、わっはっはとかせずに静かにしとるよ⁽³⁹⁾。

(切割を) 閉めるときは、なんでそっちだけって苦情来たりするけど、しょうがないわな。作るときも、話し合っ作ってあるんやで。知らん人はいうよ、なんであそこだけ止めるんやって。止めるんやないでな、なんにもなく通りやすくしてあるだけで、雨降ったら堤防の高さにしますよって。地区のことやで止めたないけど、被害は少しでも少ない方がいいでね。会合で言うのは言うけどね、昔のこと知っとなるでね。十六がついたときおまえなにしてくれたんやって。そうやろ、よそ事やで喜んどのやろ。それと一緒や⁽⁴⁰⁾。

輪中堤防の警固は、まさに目の前で洗堰の越流被害を受ける隣接地域を見ながらおこなわれるのである。そのため、切割を閉めることによって十六輪中のみが被害をまぬがれることにたいする不満が出る。しかし切割は、開けてある状態こそがイレギュラーなものであって、締めてある状態こそが本来の姿である、という立場がとられる。また、相川堤防が決壊したときには十六輪中のみが冠水して被害を受けたのであり、現在見えるものだけで議論することはあたらない。洗堰や輪中堤防は、歴史的な経緯のなかでつくられてきたものなのである。

3. 水害への意識

以上のように十六輪中では、水防への高い意識が保たれ、全戸総出での水防活動が続けられている。なぜこうしたことが可能なのだろうか。十六輪中住民は、水害をどのように受け止めているのだろうか。聞き取りのなかでうかがえた、その意識の片鱗を見ていきたい。

昔は、技術的に弱いところを作って、両方やられるのを避けるという技術の理論があった。そうだけど、今の時代の技術レベルと思想には、それはあってはいかん。昔の、遊水地で人家に被害がないなら話は別だが、人家に影響の出るような状況、行政が排水能力を高めてここに水がつくようになった。大垣市全体の犠牲になっている。おなじ義務を果たしながら、そういう状況をつくってはいかん⁽⁴¹⁾。

(洗堰は) 10.88 になりますから、まず永久に水つかんと思う。今の堤防より 1 メーター上げますんで。まず安泰になるだろうと言えるわけです。(中略) 51 年度の水害の高さまで上がったということは、よほどのことがない限り越えない。だが問題は、垂井町のほうからずっと来て、排水機が今のままだと難しい。排水機は、時間に 30 ミリか 40 ミリ排水できる。それ以上降ると、上へ上へ上がっていつちゃう。堤防のなかの水ははけませんわね、そういう内水処理も考えなきゃいけない⁽⁴²⁾。

水害はやはり起きてはいけない。前はただの天災だったけど今はもう人災だと思う。洗堰なんかあるし。大谷川に堤防ができる以前は、外おきは毎年のように水についとったけど、そのころと今の水害だと全然違う。(中略) そのころは周り全部がつく、今はどこか一箇所がつく。いまは堤防の嵩上げしとるし、排水機もあるし、洗堰をなくしたら水がつかないと思うか、というアンケートがあったけど、絶対とはいえないと。50 年に 1 回くらいは大きな水害があると思う。(中略) 洗堰からの水はなくなったとしても、泥川やなんかの堤防が決壊したら水は来るでね。片一方がよければ片一方が悪くなる⁽⁴³⁾。

洗堰をふせこまなということになってるけど、大谷川から泥川から杭瀬川から相川から、全体に影響をおよぼすということで、どこの堤防も嵩上げやってる。揖斐川水系全体を嵩上げしてから、洗堰をふせこすという話。(中略) 堤防でも絶対に決壊しないということはない。

自然には逆らえん。いまはゲリラ豪雨というのものもある。そういう自然は怖いんで⁽⁴⁴⁾。

今度絶対決壊する場所できると思うよ。洗堰なくなるでしょう、将来的には。堤防の嵩上げにともなう。それで相川も嵩上げするでしょう、逆流はここでしとったの泥川で。そこに水門を作ったでね、逆流しないように立派な門を。そのぶんをどっかでカバーしないかんでしょう。だから決壊の可能性もあると思う⁽⁴⁵⁾。

農業に生きるために、水につからないために、何代にもわたって輪中を築いたという先輩諸氏の苦労というのはものすごく犠牲をはらってきた。隣村のすべてに賠償金をはらってきたのに、いまは全部忘れてしまって、十六は自分だけ守ってると言われる。自分の生活を生きるために守らなきゃしょうがない。洗堰を見ればわかるように、平等なんてもんじゃない。水の争いは平等じゃない。(中略) 荒崎のほうが人口が少なかったから、余儀なくされた。洗堰が百年後にはなくなるといっても、それまではしかたない。荒崎に総理大臣でも出れば、すぐ埋めてまうやろうけど⁽⁴⁶⁾。

数年ごとに水害を被っていた時代にくらべ、河川改修は進み、水害の件数は減少している。しかし大谷川には依然として洗堰があり、大谷川右岸（西側）地域は遊水地としての機能をもつのが事実である。洗堰の設置は、もともと無堤の遊水地であった場所に堤防を設けるにあたって、周辺河川のリスクを軽減しようという経緯でおこった。それは、「弱いところをつくって、両方やられるのを避ける」ために必要な手段である。しかし実際のところ「荒崎のほうが人口が少なかったから余儀なくされた」わけである。この遊水地によって大垣市市街地は守られるのであり、治水は「平等なんてもんじゃない」。災害を人為的にコントロールしているという点で言えば、洗堰からの越流は「天災」ではなく「人災」であると言える。

そのような洗堰は、設置から徐々に嵩上げされており、過去の越流時の降雨量に耐えられるレベルになっている。その意味で、洗堰はなくなる方向性が見えてきている。しかしそれで一帯の水問題が解決されて、十六輪中が水害のない土地になるかと言えば、必ずしもそうではない。関係河川をすべて嵩上げして洗堰をなくした場合、河川全体の水位は高まる。すると、排水機による内水処理が困難になる。さらに水圧が高まってどこかの河川で決壊することがおこりうる。洗堰をなくした分は「どっかでカバーしないかん」のであり、「片一方がよければ片一方が悪くなる」のである。ここには、不平等な治水である洗堰はなくすべきだが、洗堰をなくしても河川の決壊リスクが高まるだけで、水害自体がなくなるわけではない、という考え方がある。「自然は怖い」のであり「逆らえん」部分があるため、現代の技術をもってしても「絶対」大丈夫などということは言えないのである。

以上のように、十六輪中における水防への高い意識の背景には、「大谷川には洗堰があるから」「ここが遊水地だから」という現状への理解がある。そしてまた、部分的な治水工事では解消が難しい、「水がもたらす可能性のあるリスク」にたいする警戒意識ともいえるべきものが培われていることが分かる。

大谷川からの越流が、あるいは相川の決壊がおりうる場所に十六輪中はあるのであって、しかも行政のおこなう治水工事によってすべてが解決するとは考えにくい。そうであるならば、「自分とこの財産を守る」ために「できることは自分たでやらんと」いけないという思想になる。それは、「自分だけ守ってる」というエゴイズムで片付けられるものではない。「自分の生活を、生きるために守らなきゃしょうがない。」という覚悟のうえおこなわれているのが水防活動であると言えるだろう。

外部から十六輪中に移住してきたとある住民が、「ここの衆は、山のほうのように、おっとりしてないな」と語った。それはおそらく、リスクを敏感に感じ取り、それにたいする警戒感をむき出しにすることをも厭わない住民の性行をあらわしている言葉であると考えられる。

第3節 水管理

以上で、十六輪中における水利用と水防の詳細について論じてきた。水利用と水防は、水を求めることと拒絶することという点では相反するものである。それらは、どのように両立されているのだろうか。

1. 水の管理装置

十六輪中において、輪中堤防の外部から取水される水源は、市水道、西濃用水、おたれである。いっぽう輪中堤防の内部で得られる水としては、地下水および降雨がある。十六輪中内外で得られるこうした複数の水源は、住民によってその出入りが管理されている。

上記の水源のうち、市水道や電動ポンプ式の井戸は、「蛇口」や「ボタン」で取水、止水を自由に調節することができる。いっぽう西濃用水、おたれなどは、「ユリ」を利用して取水、止水を管理する。

十六輪中において「ユリ」とは、開閉することによって水の出入りを制御する設備を言う⁽⁴⁷⁾。取水口や排水口のユリは、開閉することで取水と止水をおこない、水路のユリは水の流れをせき止めることで水路を流れる水量を調節する。図3-5は、十六輪中にある大小さまざまなユリの位置を示したものである。20個以上のユリが設けられていることが分かる。

輪中における水の出入りを管理するうえで重要なのが、取排水口のユリである。そしてそのほかの水路に設けられたユリのなかでもっとも規模、重要度が大きいのが、「いわすけユリ」と呼ばれるユリである。いわすけユリは、十六輪中の幹線水路に設けられている。この水路は集落のなかを流れており、水路幅が広く水量も多い。そして排水口とつながっているため、十六輪中における水の動きを管理する上でもっとも重要なユリである。

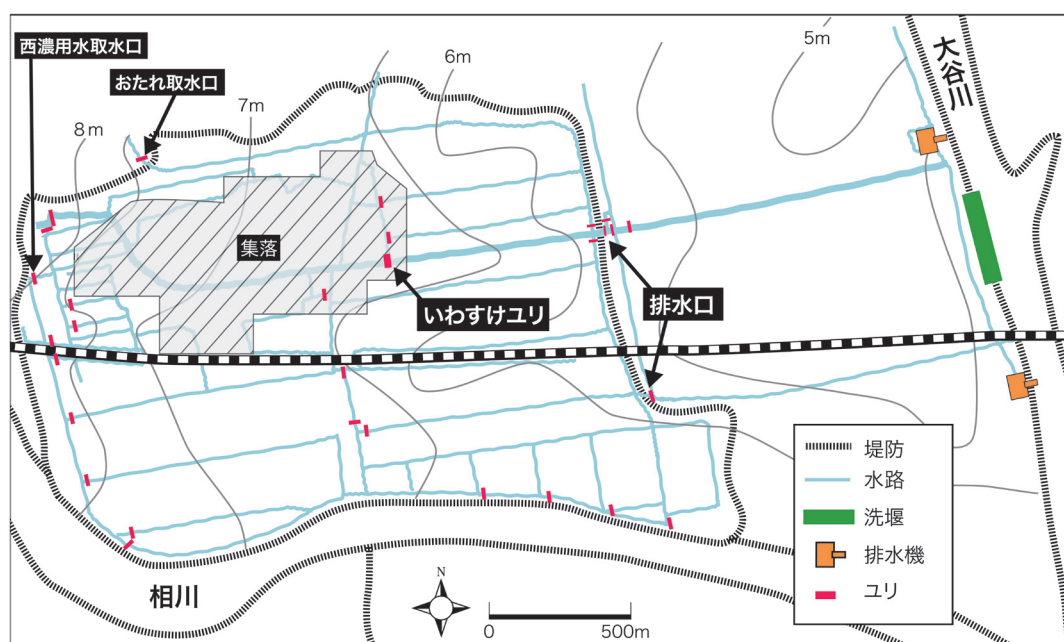


図3-5 十六輪中におけるユリの位置

地形図は国土地理院の地図にもとづいている。ユリは現地調査にもとづいて作成した



写真 3-11 十六輪中のさまざまなユリ

もっとも巨大ないわすけユリ（左上、右上）、そのほかの水路に設けられたユリは、木製のはめこみ式（左中）、ハンドルねじ式のユリ（右下左下）の形態である

写真 3-11 は、水路に設けられたさまざまなユリの様子である。田んぼのなかを流れる木製、あるいはねじ式のユリにくらべて、分厚いコンクリート製で電動のいわすけユリの規模が突出していることが分かるだろう。十六輪中においてこれらのユリは、誰が管理しているのだろうか。

入れるポンプ関係は改良組合がやるけど、門というやつは、自治会関係でせきとめる⁽⁴⁹⁾。

大きいユリは責任者を決めてるけど、小さい相川沿いにあるやつは、田んぼの近くの人がやる。田先という、川のすぐ近くの人が、自分の水が欲しいがために水の管理をする。(中略) 大きいいわすけのユリは専門で3人が決めてある。大垣の大谷川の揚水ポンプの係やってる人が、いわすけのユリも管理する。大垣市からの管理委託助成金と、十六自治会も助成金出してる⁽⁴⁸⁾。

このようにユリの管理は、灌漑用水か否かによって管理主体が異なっている。おたれや西濃用水、電動ポンプなどの農業用水については、農業用水であるため、その管理は改良組合の担当者がおこなう。そして、輪中南部の相川堤防沿いにある小さなユリは、灌漑用水のコントロールに使用されるため、近くの田んぼの持ち主が管理する。

こうした農業用水にたいして、排水口のユリあるいは輪中集落の浸水被害に関わるいわすけユリについては、自治会を中心に管理をおこなっている。そしてその担当者は、大谷川にある排水機の操作も担当しており、十六輪中における排水関係の水処理全体を引き受けている。

2. 水管理の方法

平常時の取排水

では、このようなユリを用いた十六輪中の水管理方法の具体を見ていこう。

河川が増水していない晴天の農閑期を「平常時」として水の動きを想定してみると、輪中内を流れる水の量は多くない。外部から農業用水の取水がなく、輪中内の地下水が増えないためである。輪中内の水路を流れるのは、十六輪中住民が生活用水として使用した水の一部、年中湧いている弘法の井戸など自噴井の水のみである。輪中内の一部の水路は渴いたままであり、部分的に水路を水が流れていく。

十六輪中の地形は北西から南東へかけて傾斜しているため、水路を流れる水は、ゆるやかに南東へと流れることになる。そしてやがて輪中堤防東にある排水口にたどりつく。排水口は逆水門であるため、流れついた水の圧力によって開き、輪中外へ排水される。輪中の外へ出た水は、そのまま東へ下っていき、大谷川へと排水される。

稲作と湛水

田植えが近づいてくると、おたれやユリの取水口を開いて水を入れ、また井戸の電動ポンプのスイッチを入れて揚水する。こうして輪中内に多量の水が取水される。そのままであれば水は水路を流れていってしまうが、ユリでせき止めることで輪中内に水を溜めることができる。いわ

すけユリは下ろされ、輪中の水路には水が増えていく。そして稲作従事者は、水路に満ちた水を、それぞれの田んぼの取水口（ミトクチ）から引きいれる。

水は西から高いところから順にかかってくるから、その順番は変えることができない。西の人の田んぼに水が入ったら、ミトクチを止めて、ユリをあげて、つぎの人に渡す。それも決まっているわけではなく、その水路にかかわりのある人たちが自分たちで采配する。いつまでもユリをあげないと、下の人が勝手にあげちゃって、感情的な対立が若干おきたりして。まだじゅうぶん入ってないのに、勝手にあげてつてまうで。それもミトクチを止めてくれればいいのに、ミトクチは止めずにユリだけ上げるから。笑。いったん入った水がまた出て行つてまうと怒る。まあ、そんなのはコミュニケーションで解決できることやけど⁽⁵⁰⁾。

このように、田先のユリについては、開閉時間などは定まっておらず、十分に湛水したら水を「次の人に渡す」という形式で管理をおこなっている。

この時期、西側から順に水路のユリが下ろされ、十六輪中全体の水路には水が充ち満ちる。写真3-12のように、田んぼ、水路ともに水が満ちた様子は、あたかも輪中全体が湛水しているかのようなのである。稲作の湛水は、輪中内を人工的にかるい内水氾濫状態にするものだということもできる。輪中が、水の容器になっているのである。

出水期の取排水

梅雨や台風がおりやすい6月-9月の出水期は、稲作の季節に重なる。もとより水田の湛水は軽度の氾濫状態であったが、そのうえ輪中内の水量が増えると稲が湛水し、さらに水量が一定レベルを超えると住居の床上浸水がおこる可能性がある。そのため、出水期には取排水の均衡を注意深く管理しなければならない。

降雨量が増え、河川が増水する可能性があるかと判断された場合、まずは輪中堤防内に入ってくる水を止める必要がある。灌漑用水の管理者である改良組合の担当者が、電動パイプ式井戸の電源を止め、おたれや西濃用水の取水口のユリを閉める。

そして重要なのが、輪中内に充ち満ちていた水を排水することである。

大雨が降った時、あのユリ（いわすけユリ）を止めてたら内水が止まって溢れてしまう。農業用水と兼ねてるから、これをまずあげてもらわないかん⁽⁵¹⁾。



写真 3-12 湛水時の十六輪中

とにかく（輪中の）中になるべく水がたまらないようにするには、洗堰を越えてくる前になるべく排水しておかなくちゃいけない。ところが（水が洗堰を）越えてきたらもう外の水位が上がるから、（排水口の）樋門をしめる。遊水地の水位がさがらないと、なかの水は自然排水できないし⁽⁵²⁾。

大降りすると思ったら早くあげないかん。できるだけ自然の水を絞ってしまわないかん。これが遅れると引きが悪いといって文句がでる。（中略）できるだけ中の水をだしとかんと、ついたら大谷川の水が引かない限りひかない。水がひくまで文句いわれる⁽⁵³⁾。

ここではいわすけユリを上げて水を排水することの重要性が口々に説かれている。すなわち大谷川には排水機がもうけられているが、十六輪中には排水機がなく自然排水のみである。大谷川の水位が上がって越流の危険が生じた際に、十六輪中では排水口を閉めて水の流入を防ぐが、それはそのまま十六輪中の排水機能が停止することを意味する。取水と排水が停止した十六輪中のなかで、降雨や地下水など輪中内部で得られる水は増え続ける。そのため徐々に輪中内の水位は上がっていき、内水氾濫の危険性が高まる。このとき最初にどれほど輪中内の水を減らすことができていたかによって、内水氾濫の被害の大きさが変わってくる。そのため、はじめに可能なかぎり輪中堤防内の水量を減らしておくことが重要なのである。

あまりに先走ると、湛水が必要な時期に田んぼの水が失われることになる。しかし判断が遅すぎると、輪中内部が氾濫してしまい、水がひくまで文句を言われることになる。「気が小さい人なら寝られへん。その人の守が悪いと水ついてまう⁽⁵⁴⁾」と言われるほど、ユリの管理担当者には、水管理における危険レベルを見極めるちからが求められる。

むろん十六輪中の排水口に電動の排水機を設置すれば、内水氾濫は防ぐことができる。しかしその場合、大谷川の水量が増えて越流や堤防外の湛水被害が増えることになる。その水が輪中堤防のなかにオーバーフローする危険性も高まる。そのため、取排水の制御によって内水氾濫の被害を小規模におさえる工夫するほかないのである。

第4節 昭和20年代の水利用

現在の十六輪中では、灌漑用水として西濃用水、電動ポンプ式井戸、おたれが、生活用水として市水道と電動ポンプ式井戸が利用されている。しかし西濃用水は平成12年以降、電動ポンプ式井戸は昭和29年以降、市水道は昭和30年以降に導入されたものである。それらが導入される以前には、現在と異なる水利用方法がとられていた。

以下では、聞き取りによって再現した昭和20年代の水利用方法を論じていく。

1. 農業の水

(1) 自噴井

大垣市で自噴性の井戸がはじめてつくられたのは、18世紀後半のことである⁽⁵⁵⁾。不破郡郊外の十六村にも、徐々にその技術が導入されたと推測できる。そして十六輪中では、昭和30年ころまで、この自噴井を稲作灌漑に利用していた。

数と分布

はたして、どの程度の量の自噴井が、どのような場所にあったのだろうか。次頁の図3-6は、井戸跡の調査と聞き取りにもとづいて、昭和20年ごろの自噴井の分布を示したものである。土地改良がおこなわれる前であり、水路の数はすくない。そのため水路そばの田は、水路から直接水を引き込むことができるが、水路から離れた田は、田越しに水を引いていた。

自噴井は、輪中堤防内に24ヶ所、堤防外に1ヶ所あった。自噴井が集中しているのは輪中堤防内の西側で、標高7メートル付近から7.5メートルの地帯である。このあたりの田んぼは、後に述べる相川の取水口より西にあり、やや標高が高い。そのため水がかかりにくく、多くの井戸が掘られた。また集落の西側は標高が高く浸水する心配がないため、苗場として利用された。苗場には、安定して使用できる水が必要なため、井戸が掘られたという。

輪中の東側は、相対的に自噴井が少ない。東側は、生活用水や降雨など、輪中堤防内の水が豊富に流れ込むからである。ただし水路が遠い田んぼは、田越しに流れてくる水を待たなければならないため、井戸が掘られていた。また相川沿いの田は、河川の自然堤防形成作用でやや標高が高くなっており、水がかかりにくいいため井戸が掘られた。以上のように、自噴井が設けられた場所は、①標高がやや高く水がかかりにくい田んぼ、②取水口や水路から遠く水が来るのが遅い田んぼ、③苗場など安定的に管理できる水が必要な田んぼ、である。

伊藤によれば、長良川と木曽側に囲まれた高須輪中（現海津市）では、灌漑に利用する井戸の数を制限する「株井戸制」という決まりがあった。それは、輪中上部で自噴井を多く掘ると、輪中下部で排水ができず湛水状態になってしまうからである〔伊藤 1979：188〕。これは面積の半分を海拔ゼロメートル地帯が占める高須輪中においては、排水が困難であったことによる。それにたいして十六輪中では井戸数は制限されておらず、井戸を掘る財力さえあれば自由に井戸を掘ることができた。輪中内に勾配があり、排水条件が良好な十六輪中ならではの仕組みであると言える。



図 3-6 自噴井の分布

村絵図は、Sk 家に伝わる絵図をもとにしている。等高線は、国土地理院の地図にもとづいている。自噴井は井戸跡の調査と聞き取りによって作成した。

形状

大垣市で用いられる自噴井は、深さによって次の3種類に分けられる。深度20～50メートルの浅掘り、70～80メートルの中掘り、90～200メートルの深掘り、である〔東海三県地盤沈下調査会 1985：92〕。このうち十六輪中で用いられている自噴井は、深度14～15メートルの浅掘りの井戸であった。

灌漑にもちいられた自噴井の形は、写真3-13のとおりである。直径15センチメートルほどの水管が、地面から20センチ～30センチ出た状態となっている。写真は井戸跡であるため自噴の水がとまっているが、かつては水管からコポコポとあふれた水が、筒をつたって田へ流れ出ていた。現在のこっている自噴井跡を見ると、水管はビニール製であるが、ビニールパイプになる以前の水管は、竹であった。

管理調節

自噴井は、井戸を掘った持ち主が個別で管理した。ここでは水温と水量の調節方法を紹介する。

①水温

産業技術総合研究所地質調査総合センターの濃尾平野水文環境図によると、大垣市における深度100メートル地点の地下水温度は14～16℃である〔独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター 2004〕。



写真 3-13 自噴性の形状

現在でも、水田のなかに残る自噴井の跡をみることができる（左上、左下、上）

井戸の水温は、年間を通してほぼ一定であり、「夏冷たくて冬温かい」と言われる。夏期でも低温であるため、この水が直接稲にかかると稲の生育を阻害して収量が落ちる。「冷や水は稲に一番いかんでな、冷や水がかかるとそやが収量少ないでな、冷や水がかからんように工夫してやっとなつた皆⁽⁵⁶⁾」というように、たとえば図 3-7 のように、自噴井の周囲に小さい畔を折り返して作り、稲にかかるまでに少しでも水温を上げる工夫をしたという。

②水量の調節

自噴井は、一年中絶えることなく水が湧く。充分水が入った時や、裏作を行う時など、田を乾かしたいときには、自噴井の水を止める必要がある。田んぼの脇に水路がある場合は、水路側へ畦をきって自噴井の水を流せばよい。しかし土地改良以前には、水路や農道が整備されておらず、水路に接していない田んぼが多かった。その場合は、井戸口にぼろ布や藁束などを詰めて栓をした。

竹筒のなかにぼろ切れか何かで栓こんでな。でもなかなか栓はこげなんだな、じぶ一と井戸の周りは栓してもしけりよった。栓してもなかなか止まらんから、場合によっては、竹筒を1メートルくらい据えて。そこまでは水が上がってこんで⁽⁵⁷⁾。

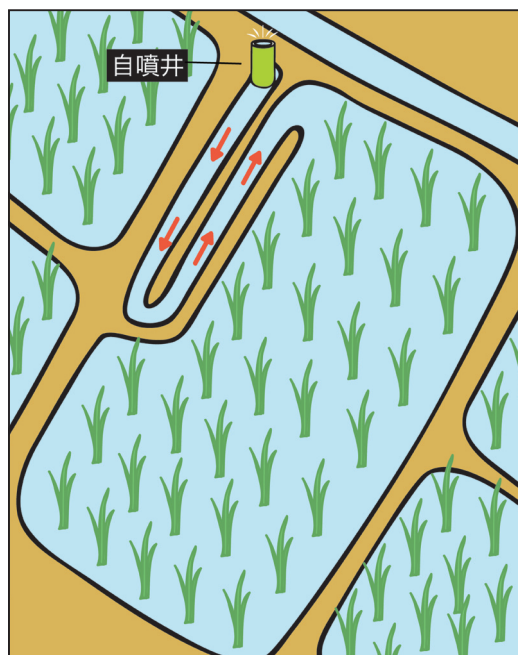


図 3-7 水温管理
間取りをもとに作成

このように自噴井の水圧は強くないため、詰め物によって水を止めることができたが、栓をしても井戸の周りに水がにじみ出て、井戸の周囲2-3メートルは田んぼがしけた状態になりやすい。その場合は、井戸口に長さ1メートルほどの竹筒をかぶせて継いだ。こうすると自噴井の水は大気圧の影響を受けて、それ以上あがってこない。

掘鑿方法

次に、自噴井の掘り方を見てみよう。大垣市で創業100年を越す川合鑿泉工業株式会社の川合千代子氏によれば、大垣市中心部における自噴井の掘り方は、①人力を使った時代（～明治末期）、②竹ヒゴの弾力を使うカンサ掘りの時代（大正初期）、③発動機を使う電動掘りの時代（大正中期～）、と変遷してきたという。そうしたなかで大垣市郊外の十六輪中では、人力での井戸掘りが戦後まで行われていた。井戸掘りを経験したことのあるSt氏と、川合氏への聞き取りから、人力による自噴井の掘り方を再現したのが図3-8である。

まず、三本の丸太を支柱として、からげて建てる。丸太の下に滑車をつけ、真ん中にロープを垂らし、鉄棒をつけて吊るす。鉄棒の反対側のロープを八方に分けてたらし、下にいる人夫が

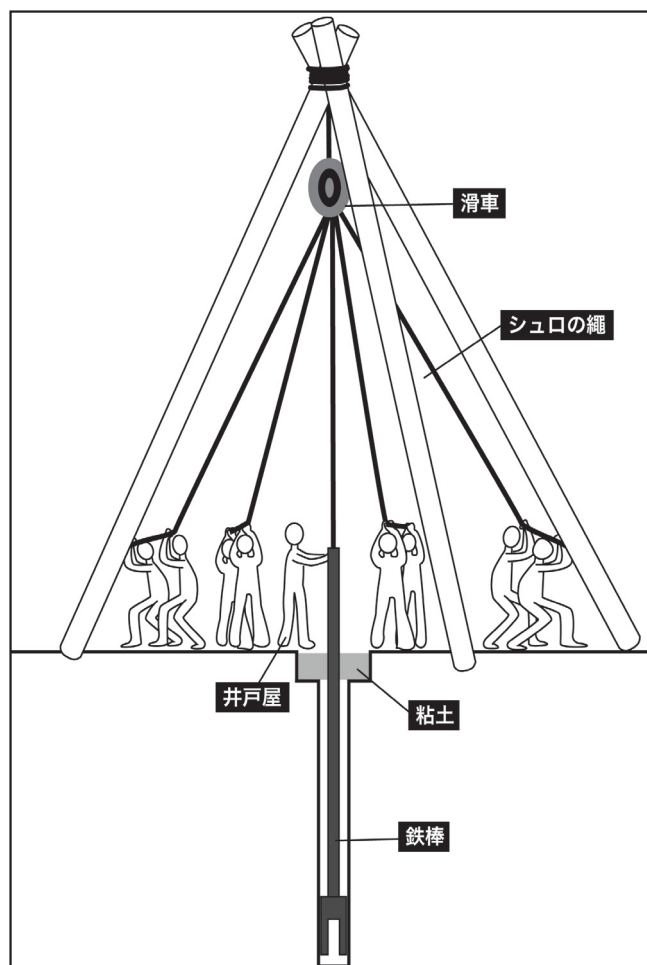


図3-8 自噴井を掘る様子
聞き取りをもとに作成

引く。鉄棒の先は二股のフォーク状になっている。ロープを引いて放すことを繰り返し、地面を叩いて掘り進んでいく。中央には井戸屋がおり、鉄棒の舵をとる。井戸穴には水をかけ、土に水分を持たせて柔らかくして掘る。ただし、水分が多すぎると、井戸穴の壁が崩れてしまう。そこで井戸穴の周囲には粘性の高い土を置いた「カマバ」を作っておく。水をかけながら穴を掘り進んでいくと、この粘土が溶けて井戸穴を伝っていく。こうして井戸壁を粘土によって補強することができる。削りとった泥水が井戸底に溜まると、鉄棒を抜き「スイコ」を入れて泥水を取り除く。スイコは、中が空洞の筒で、下に開閉式の蓋がついている。蓋は、下ろすと開き、引き上げると閉まる仕組みになっている。

充分掘り進んだところで、水管となる竹筒を入れる。竹は、節を抜いて用いる。竹の長さが足りない場合は、竹先の細い部分に太い幹をかぶせて、シュロの木の皮で巻いて固定し、継いでいく。時代が下ると、ブリキで巻いて固定した。一度押し込んだ竹は、引き抜くと井戸壁が崩れる可能性があるため、細心の注意を払って竹筒を挿入する。

なお鉄棒を引くためのロープには、シュロの木の皮をなつたものを使用した。ロープを引く人夫は8人が基本で、多いときは10人-15人で行った。鉄棒は重く、引いて放すことを何百回も繰り返すため重労働だった。人夫をつとめるのは、井戸を掘る家の主人と家族、親戚であった。人手が足りないときには、瀬古の人も手伝った。人夫は無償奉仕である。十六輪中の浅掘りの井戸は、一週間で掘ることができた。

こうしてさかんに掘鑿された灌漑用の自噴井だが、昭和30年以降使用されなくなっていく。それは、①自噴井の水量が減少していったこと、②電動ポンプ式井戸が掘られたこと、による。①は、第1章で述べたように西濃地域における自噴性地下水帯縮小の影響をうけている。②は、昭和29年からはじまった土地改良事業の一環としてつくられた。それまでおこなわれていた、相川からの取水に変わる灌漑方法であった。

(2) 相川からの取水

取水口

昭和20年代の十六輪中では、相川を利用した灌漑がおこなわれていた。

次頁の図3-9は、相川からの取水口の位置を示したものである。取水口の位置は、輪中堤防の西南部にあたり、相川がカーブから直線へと移行する地点である。灌漑用水の供給は、地形の勾配を利用して行われる。そのため、標高が高くなっている川の上流部が望ましい。しかし十六輪中内での相川の最上流部分は、河道がカーブしており決壊しやすい。図のように、過去に何度も何度も決壊をくりかえしていた。そこで取水口は、急カーブを避けた図の地点にもうけられたのではないかと考えられる。

取水口の標高は、約7メートルである。十六輪中の地形は、西から東へ傾斜しているため、相川から取水された水は、おもに輪中の中心から東部にかけて、ゆるく谷になっている部分に供給された。

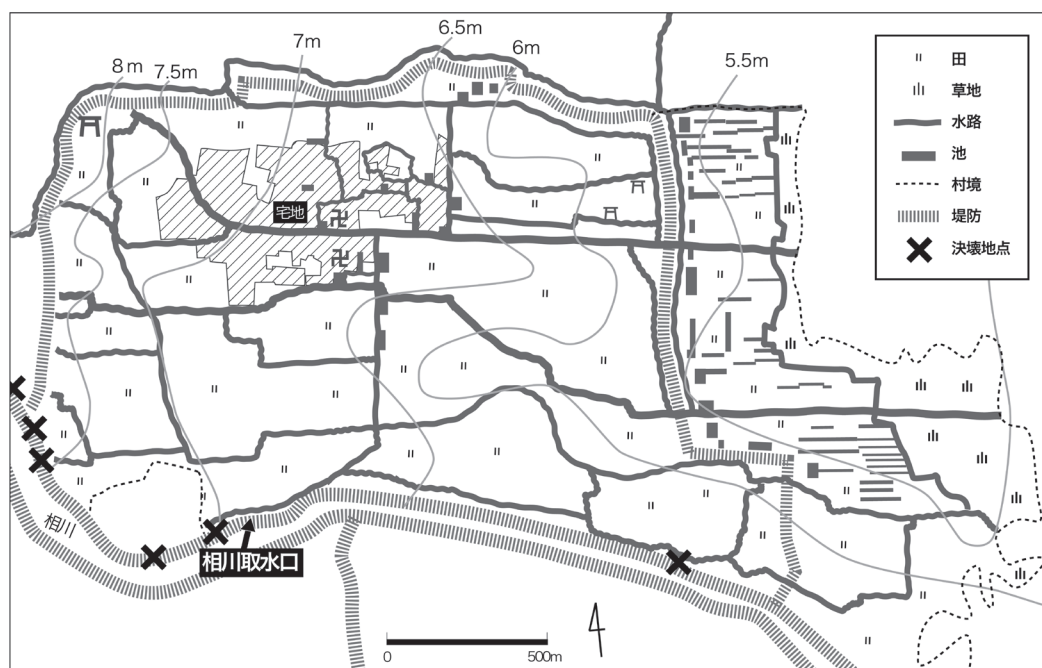


図 3-9 相川灌漑の取水口と決壊地点

村絵図は、Sk 家に伝わる絵図をもとにしている。等高線は、国土地理院の地図にもとづいている。取水口および決壊地点の位置は、現地調査と聞き取りによって作成した。

取水方法と管理

この取水口から、どのようにして輪中内に水を引いていたのだろうか。

扇状地河川である相川は、平常時に地表をながれる水がすくない。あまりに水位が低いと取水できないため、「ドンドラ」と呼ばれるコンクリートの板で河川をさえぎって水を堰き止め、水位を上げる。その水を、相川堤防下に通した土管から輪中堤防内に引き入れた。相川は、ときに急激に増水して決壊する川であった。そのため、堤防を維持したままで水を得ることができる方法として、堤防に埋め込み式の取水方法をとったと考えられる。

図 3-10 は、その様子を模式図であらわしたものである。なお次頁の写真 3-14 にあるように、ドンドラは現在も残っており、取水の痕跡を見ることができる。

夏だけ水をとって、蓋をしてたんやないか。蓋はどうなっとったかな、ぽんとする蓋やないか。もとは木で作ってあったやろうね。(中略)一番古いやりかただった。ユリなんかと同じ。水がいらんようになると、板をして水をあげる。私は使ったことないんや、ユリ当番というのがきまっとったから。年度初めに当番を決めて、一年間守する。年給がもらえて、タダではない⁽⁵⁸⁾。

このように、取水口の構造についての詳細は伝えられていないが、取水口のユリは担当者が定められていた。相川は決壊ととなりあわせの川であり、堤防に土管を埋め込むことは、増水時

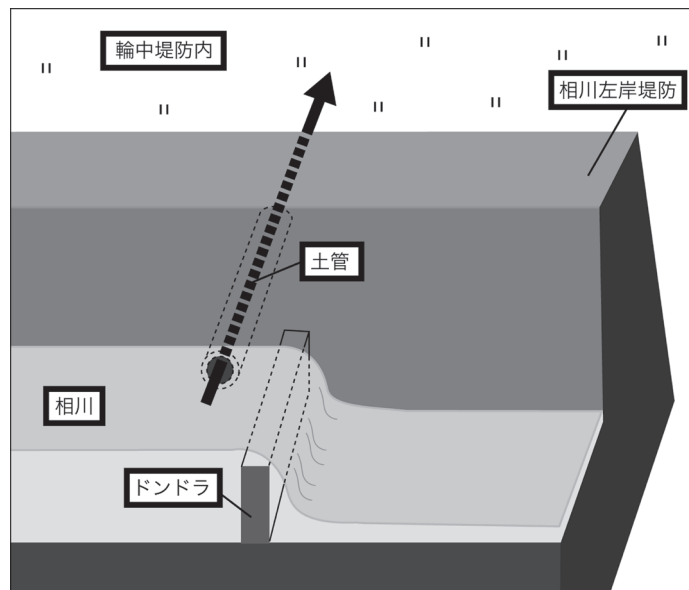


図 3-10 相川取水方法の概念図
聞き取りにより作成



写真 3-14 相川にのこる取水口の跡

には弱点となる可能性となる。そのため、田植え前、虫干しなど、十六輪中で定められた稲作の作業日程にあわせて開閉をおこなうほか、相川の増水時には、過剰な水の流入を防ぐために取水口を速やかに閉める配慮が必要であったと考えられる。

水量と水質

昭和 20 年代の十六輪中では、相川、自噴井、おたれ、の三種の水源を灌漑用水として利用していた。そのなかで、「やっぱり（水量の割合が多いのは）相川の水やろうね⁽⁵⁹⁾」というように、相川からの取水はもっともまとまった水量を提供していた。木曾三川の本流に比べればけして水量の多い河川ではないが、十六輪中にとっては大量の水をもたらす水源であったのである。

相川からの水は、発育がいいです。自噴の井戸でやってる田んぼよりも、相川からの水をつかう方が米の成績がいい。できがね。冷えると、だいいち遅れるわね⁽⁶⁰⁾。

相川の水は、水量が多いだけでなく水質も良質であった。すなわち、相川は山間部から流れてくるため水温が高いうえに、水が富栄養化状態にある。少しでも水温を高めなければ冷や水として稲の生育を遅らせる地下水にくらべて、稲作灌漑に適していた。

このように灌漑用の水源として利用されていた相川は、昭和28年(1953)年に決壊した。台風13号の暴風雨にともなうこの洪水は、十六輪中の5、6戸を除いたすべての家屋が床上浸水となる、大規模な被害をもたらした。そして、このとき流入した土砂の後始末を契機として、輪中内の土地改良事業がはじまった。その際、相川堤防の修復工事において、堤防に埋めこまれていた土管は撤廃され、相川からの取水は廃止された。こうして、十六輪中における河川を利用した灌漑は終焉をむかえた。

2. 生活の水

昭和30年代に市水道および電動ポンプが導入される以前は、生活用水として自噴井がもちいられていた。写真3-15は、Sk家、Tk家に残されている自噴井の様子である。

どちらの家でも井戸は、母屋の裏側につくられている。Sk家は北屋敷に属しており、もともとの標高が高い。その上に2メートルちかい土盛りがしてある。自噴の井戸は大気圧の影響をうけるため、土地が高いと水が湧きにくい。そのためSk家の井戸は、写真3-15のように階段を降りた先にあった。



写真3-15 Sk家の井戸へ降りる階段(左)、Tk家の井戸舟(右)

また写真 3-15 右の Tk 家の井戸から分かるように、湧き出した自噴の水は、井戸舟といわれる水槽に貯めて用いられた。Tk 家の井戸舟は、段階的に三つに分かれている。最初の部分は調理や飲用に使うきれいな水であり、次の部分は洗濯や洗い物に利用する水、として区別されていた。そして三つ目の部分は野外に出されており、水に鯉が飼われていた。これらの鯉がクズなどの汚れものを食べて、流れ出る水の汚染を防いでいたという⁽⁶¹⁾。

なお、第2章で述べたように、十六輪中の地下水は全域で水質が良いわけではない。ソブと言われる赤茶色に濁った水が湧く地域があった。ソブが湧くのは十六輪中の南東部であり、その一部は集落にもかかっている。ソブ水は灌漑用にもちいることはできるが、飲用には適さない。生活用水にあてる住居の井戸水がソブだった家では、砂や砂利、石を並べた濾過装置をつくり、ソブ水を濾過して使用していた。

第5節 19世紀の水利用

大垣市立図書館には、天保12年(1841)に描かれた「濃州不破郡十六村絵図」が所蔵されている。これは、尾張藩が藩領の村々に作成を命じた村絵図の写しである。輪中堤防が築かれる以前の十六村が描かれた、貴重な資料である。幅広に描かれた相川には堤防があるが、曲がりくねった大谷川は無堤で、遊水地のため周囲は草地として描かれている。この絵図には、村境、河川、道路、集落、耕地、寺社、墓地などとあわせて水路が描きこまれており、当時の灌漑の断片を知ることができる⁽⁶²⁾。

図3-11は、絵図から読み取れる取水口の位置を示したものである。

おたれの取水口

おたれは、北接する島町から流れてくる水を指す。この絵図のなかでは、おたれの取水口の場所が現在とは異なっている。図3-11で取水口2と示してあるように、それは十六村の北西端、十六村から島村へ続く道沿いにある。ここは北西から南東へかけて傾斜している十六村のなかで、もっとも標高が高い。また、そこから南に下がったところに、もう一箇所水が流入している場所がある。図3-11の取水口2にあたる。ここは、西接する表佐村から流れてくる水の取水口となっている。

輪中堤防がなかった当時は、水は標高にしたがって流れてくる。それを十六村の灌漑用水として利用していたものであろう。その後輪中堤防を築いた際に、取水口2は堤防によって遮られ、失われた。そして取水口1は東へと移動し、堤防の下を通る形式へと変化したものと考えられる。

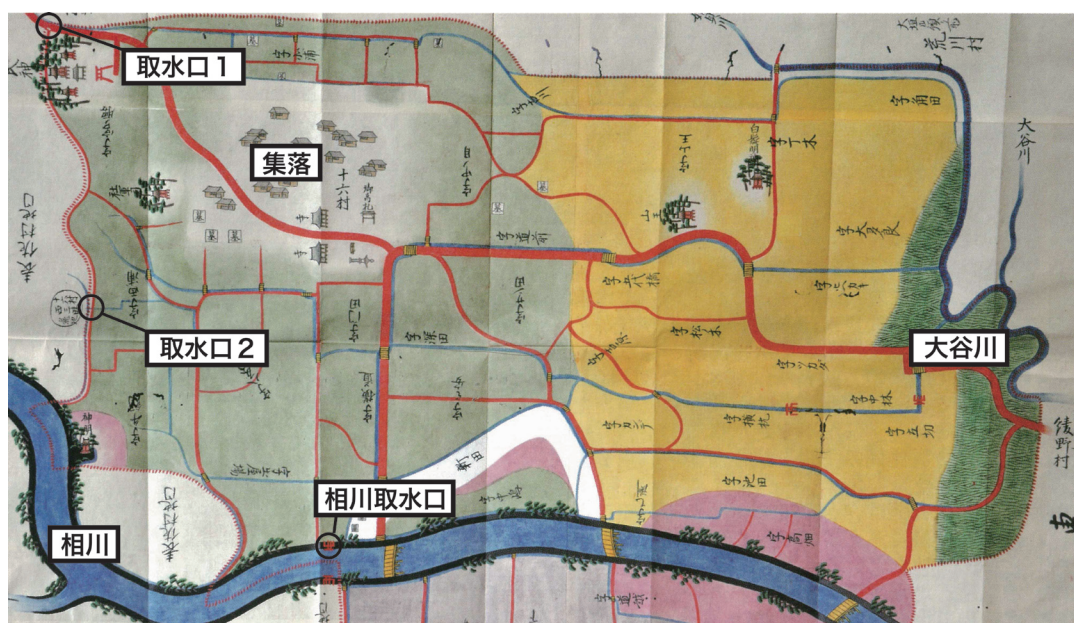


図3-11 近世絵図にみる灌漑取水口

大垣市所蔵絵図をもとに作成

相川からの取水と方法

また絵図には、相川にユリのようなものが描かれており、19世紀にはすでに相川を利用した取水が行われていたことが分かる。その拡大図を図3-12に示した。ユリの位置は、昭和20年代におこなわれていた相川からの取水口と、ほぼ重なる。コンクリートや土管がなかった当時は、どのような取水施設を用いていたのだろうか。

代々地主をつとめてきたSk家には、江戸時代から明治にかけての古文書が残されている⁽⁶³⁾。そのなかで、嘉永4(1851)年から慶応2(1866)年にわたり相川の垆や橋の付替えの材料を記した文書群が『杵方御役所杵木道越橋書類』である。このうち、嘉永4(1851)年の「相川通用水北堤伏替壱腹」は、相川北堤部分の取水設備をつけ替えるため、設備の大きさや材料を記した文書である。これによると、取水用の水門は「垆(いり)」と呼ばれていた⁽⁶⁴⁾。垆の大きさは、長さ8間半、幅4尺、高さ2尺5寸であった。つまり長さ15.47メートル、幅121.2センチメートル、高さ75.75センチメートルである。表3-3は、文書に記された垆の材料を一覧したものである。材料には「木材」と「鉄物」が使用され、鉄物には鯨(かすがい)と釘が用いられた。

図面が残されていないため、垆の構造は不明である。ただし、明治初期に日本の土木技術を記した『土木工要録』の記述と文書に書かれた材料名を考え合わせると、垆のおおよその構造を推測することができる。同書には、明治初期の日本で用いられていた木造の垆として、紀州流、関東流、濃州流、上方流、の4種をあげている。伊東によれば、これら4種は紀州流と関東流におおきく分けられる。濃州流と上方流は関東流の亜種で、蓋の形態に特色がある。紀州流と関東流のおおきな違いは、①垆の底部分にあたる「敷板」が流水方向にそって敷いているか、それとも流水方向に対して直角に敷いているか、②垆の蓋部分の「甲蓋板」や側面の「側板」に釘を使用するかしないか、である〔伊東ほか 1996: 508-509〕。

十六輪中の文書でこれを確認すると、①については敷板の枚数しか記されていないため不明だが、②については「甲蓋板」にあたると考えられる「蓋板」に鯨が使用されている。すなわち近世期の十六輪中ではおそらく、図3-13のような紀州流の構造にちかい垆がもちいられていたと推測することができる。

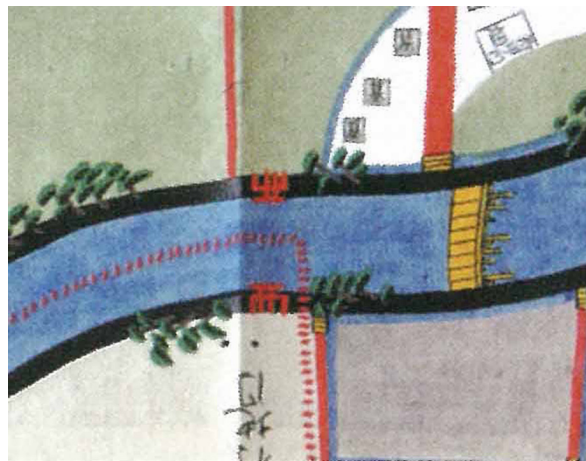


図3-12 十六村絵図にみる相川取水口

表 3-3 垵の材料

必要鉄物	数	用途	必要木材	数
4 寸鋸	28 本	敷輪に取付打つ	敷板	24 枚
4 寸鋸	26 本	前後蓋板に打つ	敷蟻手切	16 本
5 寸釘	8 本	輪より蟻物請蛇柱に打つ	輪板	26 本
5 寸釘	8 本	袖付物に打つ	蛇柱笠木	6 本
5 寸釘	12 本	同板に打つ	□□	1 本
5 寸釘	8 本	土持板に打つ	上ヶ戸	1 本
4 寸釘	4 本	前後笠木留に打つ	蹲踞	1 本
4 寸釘	2 本	□□留に打つ	輪刷物	4 枚
4 寸釘	4 本	万枝に打つ	万枝	4 枚
4 寸釘	16 本	石除板に打つ	石除板	8 枚
3 寸 5 分釘	26 本	敷蟻□に打つ	蓋板	70 枚
3 寸釘	6 本	敷蟻□に打つ	袖柱	4 本
			同貫	2 本
			袖付物	2 本

「相川通用水北堤伏替壱腹」をもとに作成

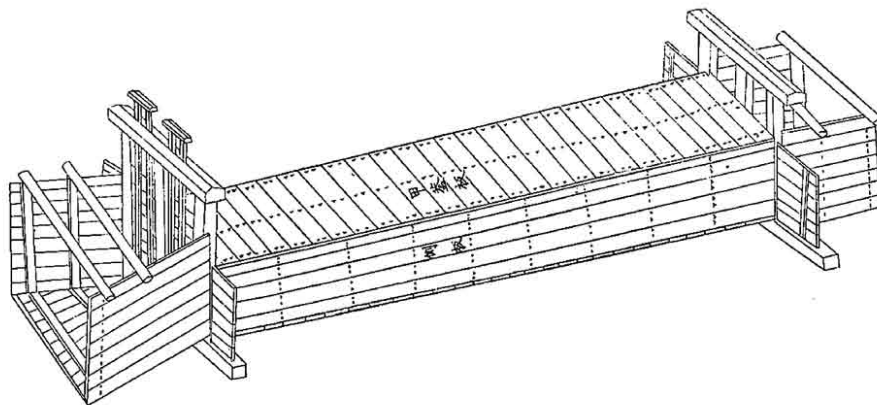


図 3-13 紀州流の垵

『土木工要録』付図より転載

注

(1) もっとも後述するように、北接する島町から流れてくる「おたれ」には西濃用水が含まれていたため、間接的には受益地となっていた。

(2) 建設当初は西濃用水の利用を断った十六輪中であつたが、当時市議会議員であつた Yk 氏、自治会長などのはたらきかけによって、あらためて受益地となることを得た。Tg 氏の父からの聞き取りによる（2011 年 1 月 15 日）。

(3) Kh 氏からの聞き取りによる（2011 年 3 月 14 日）。

- (4) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 12 月 18 日)。
- (5) Yd 氏からの聞き取りによる (2011 年 3 月 21 日)。Ysd 氏はポンプ②、西濃用水の管理を担当している。
- (6) 同上
- (7) Wd 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 11 日)
- (8) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 12 月 18 日)。
- (9) St 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 16 日)。
- (10) Km 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 6 日)。
- (11) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 12 月 18 日)。
- (12) Yk 氏の事例による。
- (13) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 12 月 18 日)。
- (14) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる (2010 年 7 月 16 日)。
- (15) Ky 氏からの聞き取りによる (2011 年 7 月 16 日)。
- (16) St 氏からの聞き取りによる (2011 年 1 月 20 日)。
- (17) Wd 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 11 日)。
- (18) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 12 月 18 日)。
- (19) Wd 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 11 日)。
- (20) St 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 16 日)。
- (21) Tg 氏からの聞き取りによる (2011 年 11 月 10 日)。
- (22) 十六輪中在住の郷土史家である安田は、輪中内における水屋の数と分布、建築構造を分析している。また上げ舟についても、数と保存状況について報告をおこなっている [安田 1996 : 170 - 174]
- (23) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 1 月 16 日)。
- (24) 自治会長 Ts 氏の妻からの聞き取りによる (2010 年 7 月 16 日)。
- (25) St 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 16 日)。
- (26) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる (2010 年 7 月 16 日)。
- (27) Km 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 6 日)。
- (28) 大垣輪中水防事務組合は、大垣市、神戸町、輪之内町における河川の水防、これらの河川の堤防につくられた樋管や樋門の維持管理の事務を担当している。管理者は大垣市長であり、そのほかに各市町から選出された議員 22 名によって構成されている。
- (29) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる (2010 年 7 月 16 日)。
- (30) 水防倉庫に保管された装備のうち、堤防を強化するための土嚢や杭、シートなどが水防工法の中心的な資材となる。なお掛け矢は木槌のことであり、蛸槌は杭の打ち込みや土嚢堅めにつかう、長い持ち手のついた槌である。しのは、縄や鉄線をむすぶための道具である。
- (31) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる (2010 年 7 月 16 日)。
- (32) Yk 氏からの聞き取りによる (2011 年 3 月 15 日)。
- (33) Tg 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 26 日)。
- (34) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 3 月 14 日)。
- (35) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 7 月 15 日)。

- (36) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる (2010 年 7 月 16 日)。
- (37) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 7 月 15 日)。
- (38) Km 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 6 日)。
- (39) Tg 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 26 日)。
- (40) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる (2010 年 7 月 16 日)。
- (41) Yk 氏からの聞き取りによる (2011 年 3 月 15 日)。
- (42) Og 氏からの聞き取りによる (2010 年 11 月 18 日)。
- (43) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 7 月 15 日)。
- (44) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 3 月 14 日)。
- (45) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる (2010 年 7 月 16 日)。
- (46) Km 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 6 日)。
- (47) これは、「杓」つまり水路施設である「杓樋 (いりひ)」がなまったものではないかと考えられる。
- (48) Km 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 6 日)。
- (49) Wd 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 11 日)。
- (50) Yd 氏からの聞き取りによる (2011 年 3 月 21 日)。
- (51) Km 氏からの聞き取りによる (2011 年 9 月 6 日)。
- (52) Yd 氏からの聞き取りによる (2011 年 3 月 21 日)。
- (53) St 氏からの聞き取りによる (2011 年 1 月 20 日)。
- (54) St 氏からの聞き取りによる (2011 年 1 月 20 日)。
- (55) 従来自噴井掘鑿の技術の発端は、『藤渠漫筆』の記録から天明 2 年 (1782) 頃とされてきた。しかし、近年の史料研究によれば、宝暦 13 年 (1763) ころまで遡ることができる [大垣市 2010 : 288-290]
- (56) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 12 月 18 日)。
- (57) Kh 氏からの聞き取りによる (2011 年 12 月 18 日)。
- (58) St 氏からの聞き取りによる (2011 年 1 月 20 日)。
- (59) 同上
- (60) 同上
- (61) Ts 氏からの聞き取りによる (2011 年 11 月 10 日)。
- (62) この絵図には、弘法の井戸以外の井戸は描かれていない。まだ自噴井が利用されていなかったのか、それとも描かれていないだけなのかは不明である。
- (63) 文書は、帯刀の免状や助郷に関する規定書、証文など 50 種ほどがある。大垣市史の編纂にあたって大垣市による整理が進められ、その一部は大垣市史第 4 巻『資料編 近世 3』に掲載されている。
- (64) あるいはこの「杓 (いり)」がなまって、「ユリ」となっているとも考えられる。

第4章 水の神性

本章では、十六輪中における水の神性について論じる。

第3章では具体的な水利用、水防、水管理の技術について見てきたが、ここでは、祭礼、伝承、しきたりなど、水に関する宗教的な側面に焦点をあてる。まずは十六輪中にどのような寺社が祀られているか、また一年のなかでどのような祭礼や年中行事がおこなわれるかを確認した上で、水にまつわるどのような宗教的言説や行為があるのかを見ていこう。

第1節 十六輪中の宗教と祭礼

十六輪中の宗教は、神道と仏教が混交した状態になっている。

図4-1に、輪中内にある寺院および神社の位置を示した。輪中内には寺院が2寺、摂社を含めば神社が7社、大神宮常夜灯のほか、地藏堂、弘法の井戸などのが設けられている。これらの寺社は輪中北部に集中しており、とくに集落のなかには社軍司神社のほか、両寺院、常夜灯、地藏堂、弘法が密集している。

以下で、それぞれの寺社の概説を述べていこう。

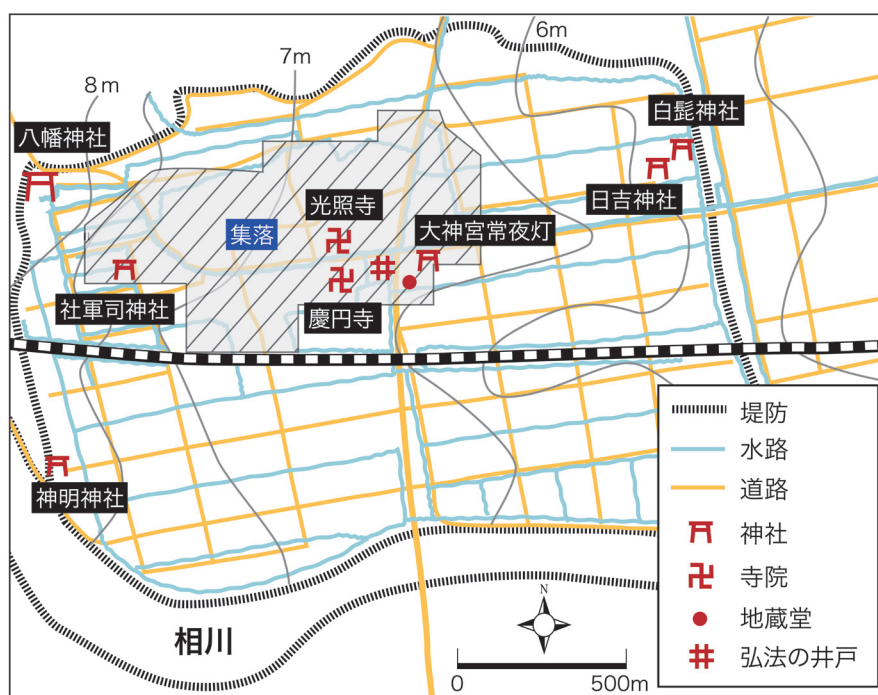


図4-1 十六輪中の寺社の位置

地形図は国土地理院の地図にもとづいている

寺院

①慶円寺

集落のある字竈のなかに位置している。開山についての由緒は残っていないため、正確な創立時期は不明である。口承によれば、創立当時は天台宗であり、大垣市街にあった。のちに真宗大谷派に転派し、十六輪中に移ってきた。当初は北浦に属していたが、その後清水屋敷に移ってきた⁽¹⁾。現在の住職が16代目になる。

なお慶円寺には、八幡神社のご神体が預けられている。かつて、村社八幡神社には阿弥陀仏が祀られていたが、神仏分離令が出されたことで、仏像を神社に祀ることができなくなった⁽²⁾。そこで、厨子にはいった仏像を、慶円寺と光照寺の交互に預けるようになった。しかし途中でその申し送りが止まってしまい、厨子は慶円寺に預けられたまま現在にいたっている。

②光照寺

慶円寺と道を挟んだ北側に位置している。瀬古清水屋敷に属する。慶長9年（1604）、現在の揖斐郡にて開山した。慶長10年（1605）十六村に移ってきたとされている。真宗大谷派の寺院である。現在の住職で15代目となる。

（お寺は）ここらへんの家の中なかでは格段に高い。地盛りもしてあるし、御堂そのものが高いから。（中略）昭和28年のときには荷物をみんな（お寺に）避難させた。2階のある家もあるけど、ちょうど堤防が決壊した時の話。お寺での炊き出しも昔はあったらしいよ。公民館ができるまで、水害の警戒にあたる人への炊き出しをお寺でした。（中略）十六の住民にしてみれば、集いの場であるというイメージがあるな。公民館ができる前は、村の会合をお寺でやった。寄り合いを持ち回りで⁽³⁾。

と語られるように、十六輪中の公民館ができる以前は、村の会合を寺院でおこなった。また



写真 4-1 光照寺の本堂

写真 4-1 のように、寺院建築は床下が高い建築構造になっている。そのため輪中内が浸水したときに、家財道具を避難させたり、炊き出しをおこなった。集落のなかに位置する寺院は、住民にとって公共の施設として位置づけられてきた。

寺院の檀家は基本的に十六町の人間で、十六町を出て行った人間や、第二次大戦のおりに疎開していた人も門徒となっている。十六輪中に住む門徒を「地下門徒」と呼ぶのにたいして、十六町外に住む門徒を「他所門徒」と呼ぶ。また十六輪中住民のうちで、本来は別の寺が旦那寺だが、場所が遠いために普段は十六輪中の寺院で世話になっている人は「庭門徒」とよばれる⁽⁴⁾。

③地蔵堂

地蔵堂には、子安地蔵と一夜地蔵が祀られている。瀬古清水屋敷に属する。子安地蔵は、昭和6年（1931）に輪中住民の1人が建立した。一夜地蔵は、一夜のうちに祀られていたという伝承のある地蔵である。

神社

①八幡神社

十六輪中の村社であり、住民には「八幡さん」とよばれている。創立の時期は不明である。京都府八幡市の石清水八幡宮を本宮としており、祭神は応神天皇とされている。神社は輪中堤防の最北東部に位置しており、標高 8.8 メートルと十六町内では最も高い場所にある。

創立の由来には、いくつかの説がある。中世において土岐源氏の支配下にあったため、源氏の守護神である八幡宮をまつたというもの、近世に尾張徳川家の領地であったために徳川家の守護神八幡宮をまつたというもの、八幡宮はふるくは水神として崇められたため、ここに八幡宮をまつたというもの、などである⁽⁵⁾。

写真 4-2 が八幡神社である。八幡神社は、鳥居、参道、山門、手水舎、拝殿、本殿、摂社をもつ十六輪中で最大の神社である。参道脇には、公園や記念碑もある。



写真 4-2 八幡神社の鳥居と参道

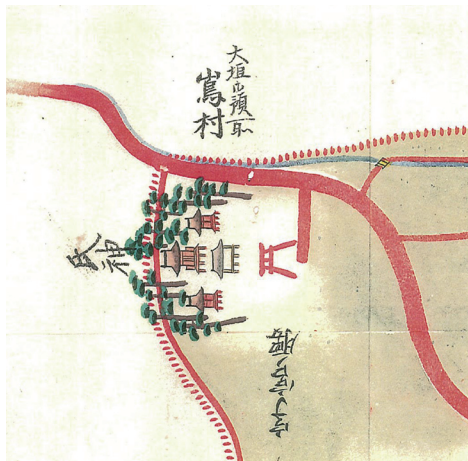


図 4-2 おたれ取水口の拡大



写真 4-3 八幡神社境内の井戸跡

なお図 4-2 に示したように、天保の村絵図におけるおたれの取水口は、八幡神社の脇を通過して十六村に流入していた。また境内では、水量の減少によって現在は使用されていないが、井戸跡を見ることができる（写真 4-3）。こうした意味で八幡神社は、十六輪中における水源としての位置づけをもっているといえる。そして同時に、第三章で述べたように、八幡神社は輪中のなかでもっとも標高が高いため、出水時には車を避難させていた。すなわち、水防のうえでも、水利利用のうえでも八幡神社が祀られている場所は住民にとって重要であると考えられる。

②津島神社

八幡神社に祀られた摂社のひとつである。住民には「天王さん」とよばれている。愛知県津島市の津島神社を本宮としており、祭神は素戔鳴尊である。八幡神社の本殿むかつて右側に祀られている。一説によれば疱瘡が流行したときに勧請された江戸時代の後期に祀られたと伝えられている⁽⁶⁾。

③御鋤神社

八幡神社に祀られた摂社の一つである。住民には「おくわさん」とよばれている。三重県伊勢市の豊受大神宮を本宮としており、祭神は豊受大御神とされている。八幡神社の本殿むかつて左側に祭られている。江戸時代に伊勢神宮から鋤を御神体にした御輿が巡航される途中、十六村に訪れた際の御旅所として御鋤神社を祀ったとされる。豊作の年には御鋤踊りが奉納されていたが、昭和初期に途絶えてしまったという⁽⁷⁾。

④社軍司神社

住民には「おしゃぐっさん」とよばれている。集落



写真 4-4 社軍司神社

の一面に建てられた小さな祠である（写真4-4）。「しゃぐじさんて、何か聞いてもみんな知らないんや。あれは土地の神さまだから、八幡さんより古い。十六村を開拓したときの神様なんやないか⁽⁸⁾。」と語られているように、本宮、祭神ともに詳細は不明である。

⑤神明神社

住民には「おしめさん」とよばれている。祭神は天照大御神とされており、三重県伊勢市の伊勢神宮が本宮である。神明神社が祀られているのは、相川の堤防上である。写真4-5のような、小さな祠である。ちょうど相川が大きくカーブしている地点であり、かつては幾度も決壊した。危険箇所であるため、この地に水の神様をまつたと伝えられている⁽⁹⁾。

⑥大神宮常夜灯

住民には「とうみょうさん」とよばれている。祭神は天照大御神である。写真形4-6のように、常夜灯の形態である。清水屋敷にある公民館横の広場にもうけられている。かつて、十六輪中で瀬古ごとの伊勢参りがおこなわれていたときは、「灯明さんで火をあげて、それから行った⁽¹⁰⁾」。そして伊勢参りから帰った村人を、この常夜灯前で迎えたという。

⑦白髭神社

住民には「しらひげさん」とよばれている。本宮は滋賀県高島市の白髭神社であり、祭神は猿田彦大神とされている。輪中東部の堤防ふもとに祀られている。近江から稲作技術をもってやってきた人々が、この地に入植したときに祀った、との言い伝えがある。現在は失われているが、かつては境内で湯祓いの神事をおこなっていた⁽¹¹⁾。



写真 4-5 神明神社



写真 4-6 大神宮常夜灯



写真 4-7 日吉神社

⑧日吉神社

住民には「山王さん」とよばれている。滋賀県大津市の日吉神社が本宮であり、祭神は大山咋神とされている。白髭神社のやや西に祠が祀られている（写真 4-7）。日吉神社も、白髭神社と同様、古代の入植者が祀った農業神であると伝えられている。白髭神社と日吉神社は、かつては輪中東部の田んぼに祀られていた。しかし現在その場所に工場が建設しているため、これらの二社は工場敷地内にある。

祭礼行事

十六輪中において、輪中住民全体でおこなわれるのは神社を中心とした祭礼行事である⁽¹²⁾。

次頁の表 4-1 は、十六輪中で一年間におこなわれている祭礼を一覧表で示したものである。日にちが決めっている祭礼もあるが、その多くは日曜日など住民が集まりやすい日程へと変更されている。

また、こうした祭礼行事のなかに、草刈り、川ざらえなどの作業労働が組み込まれている点特徴的である。記念碑祭と八幡神社大祭の前日準備のあとには川ざらえが、虫送りのあとには堤防の草刈りがおこなわれることになっている。これらの行事は、自治会に所属している構成員の全戸参加が義務づけられている。こうした方法は、神社祭礼が十六輪中の自治の一環としておこなわれているゆえにできることであろう。

十六輪中在住の研究者である安田は、十六輪中の年中行事は農業と治水に関するものが中心となっていることを指摘している〔岐阜経済大学地域経済研究所 1983：55〕。実際に、年間の祭礼における「粥占い、祈念祭、山王祭、虫送り、湯祓い、大祭、新嘗祭」という一連の流れは、「作占、豊作祈願、農休み、害虫駆除、刈上げと収穫祝い」という稲作の作業スケジュールに重ねることができる。また記念碑祭や神明祭は、輪中築堤の歴史や河川とむすびついており、水との関係が深い。

表 4-1 十六輪中の年間祭礼行事

	期日	内容
元旦祭	元旦	早朝に八幡神社の境内で篝火を焚き、参拝客に神酒をふるまう。
粥占い	15日に近い日曜日	八幡神社で粥を炊き、農作物の吉凶をうらなう。
左義長	15日に近い日曜日	八幡神社境内の竹を集めて火を焚く。残り火で焼いた餅を食べると無病息災になるとされる。
祈年祭	3月第一日曜日	八幡神社に神職をむかえ、豊穡を祈念する神事を取りおこなう。
記念碑祭	4月第二日曜日	輪中堤防の築堤に尽力した4名の記念碑を祀る。祭の後、川ざらえをおこなう。
山王祭	田植え後一週間後の日曜日	日吉神社の祭礼。あわせて白髭神社の祭礼もおこなう。田植え後の農休みにあたる。
虫送り	山王祭後一週間後の日曜日	稲の根がついたころ、病虫害を祓うためにおこなう。八幡神社境内の竹に御幣をつけ、神事をおこなう。神事後は竹の弊を田に立てる。虫送りの後、堤防の草刈りをおこなう。
天王祭	7月14日	津島神社での祭礼。提灯に火をともして祀る。御鋤神社にも参拝し、あわせて祭りとする。
神明祭	7月16日	相川堤防上にある神明神社の祭礼。提灯に火をともし、参拝する。
地藏祭	8月24日	夕刻に清水屋敷にある地藏の前で読経し、集まった子どもたちに菓子を配る。
大神宮祭	9月第一土曜日	大神宮常夜灯の祭礼。提灯をともして参拝したあと、バザーやカラオケ大会が催される。
八幡神社大祭	10月第一土曜日と日曜日	八幡神社の大祭。前日、幟を起こした後に川ざらえをおこなう。神事は神職を招いておこない、神前に初穂をそなえる。夜祭りでは、境内に奉納された提灯に火がともされ、囃子と踊りが奉納される。御鋤神社、社軍司神社、慶円寺にも提灯をともし。
祈祷祭	11月第一日曜日	日吉神社、白髭神社で神事をおこなう。
新嘗祭	12月第一日曜日	八幡神社で、神職を招いて神事を取りおこなう。神前に稲穂をそなえる。

現地調査、聞き取りをもとに作成

祭礼への奉仕

十六輪中では、「(自治会の) 役はお宮を中心に回っている⁽¹³⁾」といわれるほど、自治組織と神社の祭礼が密接にむすびついている。

よその町内はね、お祭りは、神社は神社の役員がみえるらしいけどね、よそはみんなあるけどここは氏子総代ないから。神社係は自治会の役員からあてはめているだけでね。行事が多いでね。宮司さんの世話もしなんしね。宮司さんは日にちが決まるもので、連絡せないかん⁽¹⁴⁾。

というように、十六輪中には神社を中心とした氏子組織がなく、自治会が神社祭礼の采配もおこなっている。祭礼の奉仕は、自治会役員のなかで定められた神社係と、当番の瀬古が担当する。神社係は一年間でおこなわれるすべての祭礼の奉仕にあたるが、瀬古は祭礼ごとに当番制となっている。どの祭礼をどの瀬古が担当するかは、年始めに定められる。表 4-2 は、平成 22 年度の行事当番を示したものである。神事の規模にあわせて当番瀬古の数は異なっており、祈祷祭のように小規模な祭礼では、自治会の神社係がのみでとりおこなうことになっている。当番にあたった瀬古では、年行司を中心して、祭礼の準備をする。

なお、八幡神社をはじめとする十六輪中内の神社には宮司がいない。そのため、不破郡垂井町にある南宮大社から神職を招聘する。

表 4-2 平成 22 年度の行事当番

祭礼	当番瀬古
元旦祭	東向、北浦
粥占い	北屋敷、南屋敷
左義長	年行司全員と自治会
祈年祭	北屋敷
記念碑祭	海戸
山王祭	南屋敷
虫送り	北浦
天王祭	南屋敷
神明祭	東向
地藏祭	年行司全員
大神宮祭	東向
八幡神社大祭	清水屋敷、海戸
祈祷祭	神社係
新嘗祭	東向、北浦

聞き取りをもとに作成

第2節 水と神性

1. 相川と神明神社

十六輪中において相川は、かつての灌漑用水源であるが、常に決壊を心配せねばならない川であった。そのため相川については、「相川は〈あくたれ川〉といって、効果はないのに災害ばかりおきた川。いい川やない⁽¹⁵⁾。」あるいは「(水が欲しいと思っても) ない時は全然あせんし。相川は暴れ川やな⁽¹⁶⁾。」と語られる。

これは、扇状地末端部で普段は水量がすくないが、出水により一気に増水して決壊する相川の性質を示している。「あくたれ川」とは、思うように管理制御できない相川の、あらぶる性質をあらわした異名なのである。

そしてこの相川堤防上に祀られた神明神社は、「昔決壊した場所」とであると伝えられており、そこに祀られているのは「水の神さま」である、とされている⁽¹⁷⁾。

この神明神社でおこなわれるのが、7月16日の神明祭りである。神明祭は「おしめさん祭り」と呼ばれ、祭日は7月16日と定められている。すなわち、氾濫がおこりやすくなる出水期にあたる。神事の準備は夕刻6時30分ころからはじまる。まず写真4-8のように、社に提灯と榊、御神酒を供える。そして社わきにある空き地に、瀬古ごとに9個×2列の提灯をたてる。各瀬古からは、年行司のほか数名の住民が参加している。たとえば瀬古北浦では、瀬古の半数が神明神社に参加することが決められている。こうして2010年の神明祭では、総勢で40名ほどの参列者があった。

神明祭には神職は招かず、自治会長と神社係が中心となって神事をおこなう。7時すこし前に提灯に火をつけ、社の扉をひらく。そして、参列者が全員で参拝する。そののち自治会長の挨拶があり、直会となる。提灯以外の明かりがないなか数時間直会がおこなわれ、解散となる（写真4-9）。以上のように、祭礼はシンプルな次第でおこなわれる。



写真 4-8 神明祭の様子 社に榊をまつる役員（左）、各瀬古の提灯を奉納する住民（右）



写真 4-9 暗闇に灯る 神明祭の提灯

昔は堤防の腹っぱにお社があった。だから堤防の腹に提灯をつけた。静里から御灯籠がよくみえる。それが見えると、静里の人たちは豊作だと言ったらしいよ⁽¹⁸⁾。

神明さんは、堤防の上から下が見渡せる場所にある。昔決壊した場所なんやね。提灯がうまくつくと、今年も豊作と言われとる。十六だけじゃなくて、東側の人も見てみえるという話もきくけどね。(提灯の) 向きが、ちょうど輪中堤が見える方向になってるんやね。輪中堤がみわたせる位置になつとる⁽¹⁹⁾。

というように、提灯がきれいに見えると豊作である、という伝承がある。これは十六輪中の内部だけでなく、大谷川を挟んだ対岸の集落でもそのように言われていたという。制御が難しい「あくたれ川」である相川は、豊かな収穫をもたらすのか、あるいは氾濫決壊して収穫を壊滅的にするのか、その鍵をにぎっていると考えられていた。

2. 自噴井と水神

十六輪中では、「井戸には水神さまがいる」と言われている。ただし井戸の水神さまの具体的な姿は分らない。特定の祠や社はなく、年中行事としての祭礼もない。また清水の場合とソブ水の場合で違うのか、それぞれの井戸にひとつの水神がいるのか、それとも地下の水道でつながっているのか、相川堤防上の「水の神さま」とはどう違うのか、説明できる者はいない。かつてはいたのかもしれないが、現在では不明である。

①ここにもこれ、井戸の跡がある。締めたらいかんというから。水神さんがいるから、閉じたらいかん⁽²⁰⁾。

②井戸は埋めたらいけないといわれてる。出なくなっても、息抜きをつくらなきゃいかん、つぶしたらいかんという⁽²¹⁾。

③井戸には水神さんがいるということは言うな。うちも土地改良の時には埋めてまったけど、お塩を御神酒をもって、謝ったというか、やった記憶がある。井戸掘るときにもやる。正月には、御神酒をお塩を備える。それは家の井戸だけで、田んぼの井戸にはやらない⁽²²⁾。

こうして語られているように、水神は井戸に住んでいる。そのために十六輪中では、つぎのようなしきたりがあった。

〈井戸を掘る前、埋める時のしきたり〉

自噴井を掘る前には、その場所に、井戸を掘る家の主人が塩とお神酒を供えて水神をまつ。これは、井戸主が個人的におこなう。

また、一度掘った井戸は埋めないのが望ましいが、たとえば土地改良で水田や水路のかたちを変える場合など、やむを得ず井戸を埋める場合がある。そのときにも塩とお神酒を供える。これは水神さまに「謝る」ような意味合いがある。

〈使わなくなった井戸のしきたり〉

基本的には、使わなくなった井戸、水が出なくなった井戸も埋めてはいけない。それは、水神さんがいるから、すなわちその筒から息をしているからである。どうしても埋めるのであれば、息抜きを作る必要がある。そのため、使用されなくなった井戸、あるいは涸れてしまった井戸は水管を残しておくか、細いビニールパイプをさして空気穴を残しておくことになっている。現在灌漑用の自噴井が使われなくなった十六輪中で井戸跡を確認できるのは、このためである。十六輪中に残されている井戸跡には、「そこに水神が宿っている」という思想があらわれている。

なお大垣市の川合鑿泉工業株式会社の川合氏によれば、こうした井戸神の信仰は、大垣全域で聞くことができるという。川合氏は、井戸のしきたりには井戸の性質が関係しているとする。地下の土壌層は複雑なため、表面的に井戸を埋めたとしても、その道筋は残りつづける。すると、地下水が増えたときにそこから突然水が湧き出したり、あるいは井戸跡を中心に周囲の土地が崩壊することがある。地層を元通りにして井戸を埋めることはむずかしいため、できれば導水管は残すべきなのだという。このように水神にまつわるタブーは、井戸をつかう上で、経験的に知り得たものと考えられる。もともと、「変な話だけど、(水神の祀りに) 私たちが参加すると井戸が荒れる。だから参加せず、お客さんに祀ってもらう。本体工事の前だったら、お客さんみずから塩と御神酒でお清めしてください、とお勧めしている⁽²³⁾」というように、井戸の水神は機能的な解釈だけではカバーできない、今なお生きた思想である。

3. 弘法の井戸の伝説

二種の伝承

十六輪中には、個別で掘られた井戸のほかにも共用の井戸があった。それが弘法の井戸である。この井戸には、弘法大師にまつわるどのような伝説が伝えられているのだろうか。

弘法大師とは、平安時代の僧侶空海（774－835）のおくり名である。日本ではもっとも有名な僧のひとりである。斎藤昭俊（1930－）によれば、日本全域に伝えられている、弘法大師に関する伝説は3149件にのぼる。伝説の内容を分類すると、最も多いのは大師による彫刻の伝説（1243件）、二番目は大師の足跡の伝説（460件）、そして三番目が大師に因縁する水の伝説（438件）、である〔日野西真定編 1988：54〕。弘法大師の伝説は日本全国に伝えられており、なかでも水に関するものは定番となっている。

また宗教学者の五来重（1908－1993）は、古代祭祀で泉が重要な意義を持ったため、泉に関する神話が生まれ、弘法清水伝説はその延長線上にあると論じた。そのうえで彼は、日本でかたられる弘法大師にまつわる水の伝説を、つぎの三つに分類した〔五来 1942〕。

- （1）水を所望した大師に水を与えた女性の善行への報いとして、杖を突き立て泉を出すもの。
- （2）水を所望した大師に水を与えなかったために、泉を封じられたもの。
- （3）上記の複合型で、善人への湧泉と悪人への封泉が対比された教訓話となっているもの。

このうち十六輪中の弘法の井戸は、どのタイプに該当するのだろうか。聞き取りと文献調査によれば、十六輪中における弘法の井戸伝説は、二種類のタイプがある。それは、以下のような内容である。

〈タイプA〉

むかしむかし、弘法大師が諸国を行脚している際、十六村にさしかかった。暑さでのどが渇いていたため、とある農家で「水をください」と頼んだ。農婦は「こんな水しかありませんが、よかったですらどうぞ」といって水を差し出した。その水はにごった、あくのある水だった。大師はにごった水を飲んでいる村人を不憫に思い、杖を大地を突き刺したところ、冷たい清水が湧き出した。この水は、日照の時にも涸れることがない⁽²⁴⁾。

〈タイプB〉

むかしむかし、弘法大師が諸国を行脚している際、十六村にさしかかった。暑さでのどが渇いていたため、農家の門口で「水をください」と頼んだが、どこの家でも断られた。腹を立てた大師は、持っていた杖を大地に突き刺した。するとそこから冷たい清水が湧き出した。ところが、村中の井戸は清水が止まり、にがり水しか出なくなってしまった⁽²⁵⁾。

表 4-3 弘法の井戸伝説の構造

	タイプ A	タイプ B
弘法大師のおとずれ以前	村ににごり水あり	村に 清水の井戸あり
村人の対応	にごり水を差し出す	大師の要望を断る
弘法大師の行為	杖をついた場所から清水がわく	杖をついた場所から清水がわく
弘法大師のおとずれ以後	村の水：にごり水のまま 弘法の井戸：清水が湧く	村の水：にごり水 になる 弘法の井戸：清水が湧く

これらの伝説は、「弘法大師が杖をついて清水の井戸をつくった」というおなじ主題をもとに語られている。ただし十六村の水環境や村人の対応は、まったく異なっている。表 4-3 は、伝説の要素を比較して示したものである。

タイプ A では、村にはにごり水しかなかったが、村人から差し出されたにごり水を不憫に思った大師によって、涸れない清水の井戸を得た。つまり水を所望した大師に水を与えた「善行の報い」として、清水の井戸が与えられているのであり、五来分類による（1）に該当する。

タイプ B では、村に清水がわく井戸があったものの、村人が水の提供を断ったため、大師の怒りにふれて村中の井戸水がにごってしまった。かわりに大師が杖を突き刺した場所は、清水が湧く井戸となった。こちらのタイプでは、水を所望した大師に水を与えなかったために、清水を封じられており、五来分類による（2）に該当する。

しかしどちらのタイプにおいても、弘法の井戸以外の水が封じられ失われたわけではなく、にごり水として残っている。大師が掘り当てた井戸の清水と、それ以外の村のにごり水という形で対比されている。そしてそれぞれ、村人の善行と悪行によって水の性質を理由づける、教訓話となっている。その意味では、五来分類における（3）の要素も含まれているのであり、十六輪中における弘法の井戸伝説は、分類（1）から（3）が混ざり合ったストーリーになっていると言えるだろう。

十六輪中における弘法伝説のもっとも大きな特徴は、井戸水が出る／出なくなる、という水の有無を問題にするのではなく、にごり水である／清水である、という水質が問題となっている点にある。これは、十六輪中の水環境を反映していると考えられる。すなわち、第2章で述べたように地下水が豊富な十六輪中では、どこを掘っても地下水を得ることができた。しかし、なかにはソブ水が湧く地帯があり、そこではつねに赤く濁った水しか得ることができない。同じ集落のなかであって、清水が湧く家の隣の家でソブ水しか湧かない家があるという事実は、地下水の流れが目に見えないだけあって、さぞ不条理に感じられることであろう。

それはいったい、なぜなのか。その理由を求めるために、十六輪中においては「弘法大師」という特別な人物を措定し、ひとつの集落のなかに清水とソブ水とがある理由を説明しているのである。

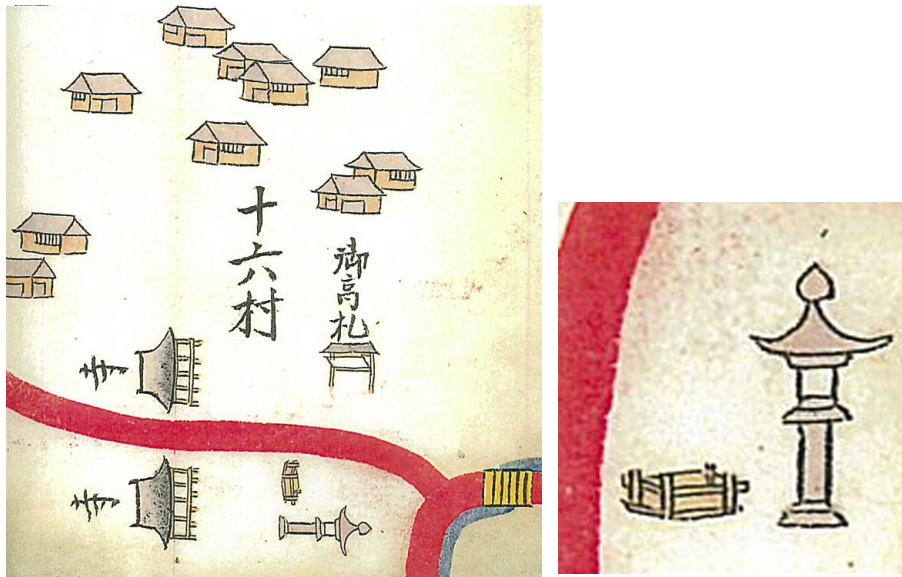


図 4-3 十六村絵図の弘法井戸拡大図

近世の記録

天保 12 年 (1841) に描かれた十六村の絵図には、弘法の井戸らしきものが描かれている。図 4-3 は、それを拡大したものである。弘法の井戸は集落の東端に位置しており、光照寺と慶円寺の間を通る道路沿いに描かれている。現在の位置と完全に一致している。

そしてその横には灯籠が描かれている。これは、大神宮常夜灯であると考えられる。現在、常夜灯は、弘法の井戸からさらに東へ下ったところへ祀られているが、近世当時は絵図のように隣り合っていたことになる。そして弘法の井戸と道をはさんだ向かい側に、御高札がある。このように集落東端部には、寺院、高札、常夜灯、井戸が集中しており、集落の公共の場を形成していたことがうかがえる。それも、宗教的意味づけをもつ公共性である。十六村でもっとも標高の高い水源地に祀られた村社八幡神社を中心とする宗教的空間とはべつに、集落のなかに、寺院、弘法の井戸、常夜灯を中心とした宗教的空間が形成されていたことがうかがえる。

かつて伊勢参りに向かう時は、常夜灯に火をともしてから出発し、お札を得て帰郷する住民を常夜灯のもとで迎えたことはすでに述べた。この場所は十六村の集落における起点であり、公共性の基盤にあったのは、清水が湧く共用の井戸であったのではないだろうか。

近世の弘法の井戸について記した文献資料として、『濃陽志略』と『濃州徇行記』がある。

『濃陽志略』は、尾張藩の松平君山 (1697 - 1781) によって編纂された地誌である。書物奉行をつとめた松平は、私撰地誌である『岐阜志略』(1747)、官選地誌である『張州府志』全 30 卷 (1752) を記すなど、精力的に地誌を編纂した。そののち、4 年の歳月をかけて美濃国内の尾張藩領を踏査し、宝暦 6 年 (1756) に『濃陽志略』をまとめて献上した。

『濃州徇行記』は、おなじく尾張藩の樋口好古 (1750 - 1823) によって記された地誌である。樋口は大代官の任にあり、尾張国内や美濃、近江などの尾張藩領を巡行し、村の情報を記録した。『濃州徇行記』の編纂は、寛政年間 (1789 - 1800) と考えられる。

両書は、実地調査にもとづいて村々の沿革、人口、租税、寺社、自然環境、生業などを記録した貴重な文献資料である。これによって1756年から1800年ころにかけての、美濃国尾張藩領村落の様子を知ることができる。両者の調査には半世紀ほどの時間差があるが、どちらも十六村の項には、弘法の井戸についての記載がある。内容は以下の通りである。

『濃陽志略』

「十六井、在村東、清泉迸出、雖盛夏極冷不涸、鄰邑井皆有鹵、此井獨清冽、人稱曰十六井」

『濃州徇行記』

「十六井、俗に弘法ノ御手洗と云、早年には却て水よく湧き田所にも水を掛け旱損を免ると也」

[平塚編 1937: 604-606]

すなわち『濃陽志略』では、「十六井と呼ばれる井戸が村の東にある。清い水が湧き出しており、真夏であっても冷水が涸れずに湧いている。隣村の井戸はみな鹵（アク）があるが、この井戸の水だけは清く、十六井の名で人々に知られている」と記されている。また『濃州徇行記』では、「十六井は、世間では弘法の御手洗と言われている。日照りのときにはかえって水がよく湧き、田んぼにもこの水をつかうため、旱魃を免れることができる。」と記録されている。

両者に重複する内容として、「十六井」としてひろく知られていたこと、日照りのときでも水が涸れないことがあげられている。さらに『濃陽志略』では、隣村の井戸はみな「鹵」すなわちアクがあるが、この井戸だけは清冽な水であったことが強調されている。また『濃州徇行記』では、この井戸が「弘法の御手洗」とよばれ弘法大師にゆかりがあったことが記されている。弘法大師とのゆかり、水質のよさ、豊富な水量という現在に伝えられている特性が、18世紀なかばにすでに形成されていたことがわかる。

大垣市で被圧地下水を掘鑿して自噴井を用いる技術がうまれたのは、1763年から1782年頃であった。『濃陽志略』が記された1756年には、十六輪中にまだその技術はない。では自噴井が普及する以前、十六村ではどのような水源を利用していたのだろうか。水環境から考えられる水源は、おたれ、相川、被圧地下水ではなく地表に近い帯水層を掘り当てた井戸、などである。このうち相川は集落から遠く生活用水としては不便であり、地表近くの水を掘り当てた井戸は、ソブが混ざる可能性が高い。おたれは、ガマが水源であるため涸れることはなく水質もよいが、水量は多くない。

そうしたなかで弘法の井戸は、「清水」が「湧き続けて涸れない」という性質から考えても、被圧地下水を掘り当てた井戸である。自噴井の掘削技術がもたらされる以前に、なんらかの方法で得ることができたと推測できる。それは「弘法大師」といわれるような、十六村外部の人間によって得られたものである可能性もあるだろう。十六村において水質と水量への問題があったからこそ、水質の良さと日照りにはかえってよく湧くという豊富な水量は貴重であった。生活用水として、あるいは『濃州徇行記』灌漑用水として、近世当時の十六村の生活のなかできわめて特別な水源であったと考えることができる。

「特別性」の衰退と現代的位置づけへ

時代が下り自噴井の掘鑿技術が拡大すると、十六輪中では各家や田んぼに自噴井が普及した。生活用水や灌漑用水としての水源が確保されるなかで、弘法の井戸の水は、どのように使用されてきたのだろうか。

うちらは、お正月に雑煮煮るのもあの水でやったし、ほとんどの家で味噌作ってたけど味噌作るときなんかはあの水を使った。日常のお風呂なんかは家の井戸を使った。さぎっちょ（左義長）で書き初めを焼いて上達を願ったが、書き初めのときの水もあれを使っとった⁽²⁶⁾。

昭和初期までは、正月2日早朝から村人や学童が弘法の井戸の初水をくみに訪れ賑わった。雑煮を煮たり、この初水を使うと味噌づくりが失敗せずおいしく出来上がるといわれ、学童は、この初水を習字に用いると上達するといわれた。また流行目に罹ったとき、この水で目を洗うとすぐに直るといわれ、遠くの村からも水汲みに訪れた⁽²⁷⁾。

このように弘法の井戸は「日常のお風呂」などとは違う特別な機会、言わば「ハレ」のときに使用される水であった。味噌づくりに失敗しない、習字が上達する、病が治るなど弘法の井戸水には実用的な要素以上の特別なちからがあると考えられていたことが分かる。しかしここでの表現が過去形であることから分かるように、生活が近代化するとともに弘法の井戸の特別性は弱まっていった。

（昔は）適当にみんな川でつかまえて、せっかく水があるからといって（弘法の井戸の中に）ぼいっていれとく。でも水が減ったりとか、水があっても循環しないから、魚が結局ころっと死んで骸骨になってる。そういうときに比べたら今と全然イメージ違う。（その頃は）誰も飲まないもん。誰も使用しとらんかった。そう考えると、弘法の井戸は生活用水や灌漑用水やない。ぼくが聞いているのは、防火用水と聞いた⁽²⁸⁾。

これは昭和38年生まれの子の語りである。内容からは弘法の井戸水に特別な清さを求める動機が薄れた状況を読み取ることができる。一方では生活の近代化が進み、電動ポンプや市水道の導入など水利技術に革新がもたらされることによって、弘法の井戸のハレ性は一次的に衰退したものと考えられる。

しかし平成21年（2009）に整備されリニューアルした弘法の井戸は、図4-4のパフレットからも分かるように、弘法大師の伝承と水質を押し出した。井戸は「名水」として宣伝され、現在では輪中外の人が汲みにおとずれるようになっている。そこには年中行事や治療に用いられたかつてのようなハレ性はないが、弘法大師のゆかりをもつ「特別においしい名水」という現代的な位置づけが確立している。

十六町の名水

弘法の井戸



弘法の井戸



足跡石

弘法の井戸の由緒

言い伝えによれば、平安時代初期の高僧、弘法大師が諸国行脚あんぎゃの折りに十六村にお立ち寄りになり、村人が飲み水や田の水に困っていることをお聞きになると、手にしていた錫杖しゃくじょうで、力強く大地をお突きになりました。すると、勢いよく清水が湧き出したといわれます。

村人は大いに喜び、大師の徳を称たたえて、この井戸を「弘法の井戸」と呼び、大切にお守りしてきました。江戸時代の書物に「村の東に清泉が勢いよく湧き、真夏でもきわめて冷たく潤れることはない」、「俗に弘法の御手洗みたらいといわれ、干ばつの時によく水が湧き凶作になることはない」と記されているように、昔から近郷に知られた由緒のある井戸であります。

なお、井戸のかたわらにある石は、大師の足跡石あししと伝えられています。

大垣市十六町自治会

図4-4 リニューアルした弘法の井戸のパフレット

4. 記念碑祭りと水防

記念碑

八幡神社の参道横にある広場には、「記念碑」とよばれる石碑がある（写真 4-10）。そこには、以下のような文章が刻まれている⁽²⁹⁾。

〈前面〉

治水功勞者祈念碑

坂井沖右衛門

坂井五一

岡崎安

岡崎勝吉

大人

十六区民建立



写真 4-10 記念碑

〈裏面〉

南宮山下十六里古来沮洳潦水停滯頻年水害野無

草色民有菜色里正坂井沖右衛門深憂之朝走夕犇殆忘寢食奮排百難新築堰堤実明治二年也里民安堵年増田産明治二十四年十月北濃根尾谷陥没濃尾二州地大地震人畜死傷家屋倒壊堤塘決裂其慘不可言也十六里亦被害当此時坂井五一岡崎安岡崎勝吉三氏大施復旧工事国庫亦補助焉於此乎塞者通平再来禾穀豊穰人足家給時隣村静里村以違定規増築堰堤訴于官三氏抗争太勉遂帰于勝訴四氏之功不可没也昭和三年十一月天皇即位之大典里民相議而大修八幡神社并建碑彰四氏之於治水功德請余文余謂善哉此挙由来我国為家族制度専主敬神崇祖常重家名培養国民精神以至于今日豈可模倣欧米之個人主義乎而三氏各有嗣祀独坂井五一氏一女澄子適于東京法学士岸清一氏無嗣祀哀哉

銘曰 新築堰堤 修理有年 仁以除害

智以制先 其人雖亡 其德永傳

昭和四年三月 南濃 牧野鉄撰

碑文は、以下のように読み下すことができる。

「南宮山下十六里古来沮洳、潦水停滯し、頻年水害、野に草色無く、民に菜色有り。里正坂井沖右衛門之を深く憂い、朝走夕犇殆寢食を忘れ奮い、百難を排し新たに堰堤を築く。実に明治二年なり。里民安堵し、年に田産増す。明治24年10月、北濃根尾谷陥没す。濃尾二州地大いに震え、人畜死傷、家屋倒壊、堤塘決裂す。其慘言うべからざるなり。十六里また害を被る。此時にあたり坂井五一、岡崎安、岡崎勝吉の三氏、大いに復旧工事を施し、国庫また補助す。此に於てや塞者通平し、禾穀豊穰再来す。人足り家給す時、隣村静里村、増築堰堤の定規に違ふを以て官の三氏を訴う。抗争に太だ勉め、遂に勝訴に帰す。四氏の功没すべからざるなり。昭和3年11月、天皇即位之大典、里民相議して八幡神社を大修し、並びに碑を建て四氏之治水功德を彰し、余に文を請ふ。余、善哉と謂ふ。此に我国の家族制度を為して主を専らとし、神崇祖を敬ひて常に家

名を重んじ、国民精神を培養し、以て今日に至る由来を挙ぐ。豈に欧米の個人主義を模倣すべきや。しかして三氏各嗣祀あり。独坂井五一氏一女澄子、東京法学士岸清一氏に適う。嗣祀なきこと哀しきかな。

銘曰 新たに堰堤を築き、修理すること有年。仁以て害を除き、智以て先を制す。其人亡と雖も、其徳永傳す。

昭和4年3月 南濃 牧野鉄撰」

その意味は、およそ次のようなものである。

「南宮山の麓に位置する十六村は、古来より低湿で水が停滞し、繰り返し水害を受けてきた。田畑に作物は実らず、村人の顔色は冴えない。庄屋坂井沖右衛門はこれを見て深く憂い、寝食を忘れて朝から晩まで奮闘し、困難を乗り越えて新たに輪中堤防を築堤した。明治2年のことである。これによって村人は安心し、田畑の収量は上がった。

明治24年10月、北濃の根尾谷を震源とする大地震がおこった。濃尾地方では人畜が死傷し、家屋が倒壊し、堤防が崩壊した。言葉にできないほどの惨状である。十六村もまた同様に被害をうけた。このとき坂井五一、岡崎安、岡崎勝吉の三名が復旧工事を施し、これには補助金も出た。それによって堤防は復旧し、ふたたび豊かな米の実りが得られるようになった。こうして人も家も栄えた時、隣村の静里村の住民が、増築した堤防は定規に違反しているとして訴えをおこした。これに対して三氏は真っ向から抗争し、勝訴した。

これら四氏のなした功績が消えることはない。昭和3年11月の天皇即位の御大典に際して、村人は八幡神社を修繕するとともに四氏の治水の功德を顕彰しようと、私にその文章を請うた。私は快諾した。我が国の家族制度において主を尊び、祖先や神を敬って家名を重んじ、国民精神を培養することで今日があるのである。欧米の個人主義を真似ることができようか。三氏はそれぞれ子孫を遺しており、そのうち坂井五一氏の娘は東京で法学博士の岸清一氏に嫁いだ。子供がいないのが惜まれる。

銘に曰く 新たな堤防を築きあげ、その修理に年月を費やした。仁で困難を打ち破り、智で未来を拓いた。彼らはすでに亡くとも、その功德は末永く伝えられる。

昭和4年3月 南濃 牧野鉄撰」

文章を書いたのは、現在の輪之内町の有志であった牧野鉄九郎である⁽³⁰⁾。ここに書かれているように、記念碑は昭和4年(1929)、昭和天皇即位の御大典に際して建立された。十六の輪中堤築堤の歴史については第2章で述べたが、明治2年に輪中堤防を完成させるために奔走した坂井沖右衛門、ならびに明治24年の濃尾震災で崩れた堤防を修復するために尽力した坂井五一、岡崎安、岡崎勝吉の4氏がなければ輪中堤防は得られなかった。碑は、この4氏の働きを顕彰するためにつくられたものである。

とくに強調されているのは、彼らの働きが個人主義的な立場でなしえるものではなく、家や子孫を重んじることによってはじめて可能になる、という点である。彼ら4人の働きは「十六村」の住民の未来へと伝えられていくべきものなのである⁽³¹⁾。

土地改良のとき、一番親方の人が輪中堤防壊そうかという話が出た。人口が増えているから家を建てようかといった。百年に一階の水害が来たら十六は壊滅だと大反対した。十六のなかでは、ほかに賛成意見はあまりあらせなかったけど、トップがそういうこと言ったでね。荒崎全体が開発されてた時代やった。わしは、そんなことしたら記念碑の四人が恨むぞ、呪われるぞと言った⁽³²⁾。

「堤防を壊す」という立場への反対意見として「記念碑の四人が恨む」という理由が成立することは、彼ら4人の功績が十六輪中住民にとって過去の話として語られるだけのものではなく、十六輪中堤防のなかで生きる住人達に、実際に影響をおよぼしていることを意味している。輪中堤防には村のために自己犠牲的に尽力した4人の労苦が染みこんでいるのであって、それを害することは彼らの思いを無碍にするものなのである。

記念碑祭と川ざらえ

記念碑が設けられて以来、毎年4月の第2日曜日に祭礼がおこなわれている。

祭りは午前中におこなわれる。写真4-11左のように、記念碑祭りは全戸から1人が必ず出席することになっているため、境内は賑わっている。8時30分ころから準備が始まる。八幡神社境内、記念碑のある公園を掃除し、神社係と当番瀬古の担当者は供物を整える。9時になると、神事にさきだって自治会長が挨拶をおこなう。

神事は、南宮大社から神職を招いておこなう。まず、4人の御霊を依り代である幣帛に迎えるところからはじまる（写真4-11右）。そして、修祓、宮司一拝、献饌、祝詞、玉串奉奠、神送り、撤饌、全員で一拝、の次第でおこなわれる。玉串奉奠は、宮司、自治会長、市議会議員、神社係3名、自治会役員、当番瀬古から3名が氏子を代表しておこなった。神事を終えると、酒を



写真 4-11 記念碑祭の様子 祭礼にあつまった住民（左）、記念碑と祭壇（右）

くみかわして直会となる。

これで神事は終了であるが、この後、瀬古ごとに分かれて川ざらえがおこなわれる。記念碑祭りが全戸招集なのは、祭礼後の川ざらえのためとされている。川ざらえは第3章で述べたように輪中内の水路の掃除であり、瀬古ごとに担当場所が決められている。そして川ざらえが終わった後は、瀬古ごとの懇親会がおこなわれる。それぞれの瀬古の集会所で開催され、お酒も入ってなごやかな宴会となる。

記念碑祭では、石碑に刻まれた4名が神として祀られている。築堤に尽力した4名の村人を祀ることは、住民が輪中堤防への意識を新たにし、その中で生活を営んでいることを再確認することになる。その後、全戸参加の水路掃除をおこなうことで、輪中築堤の伝説と、実際の現在の輪中堤防をむすびつける。さらにその後、瀬古ごとの宴会となることで、「共」の意識は促進される。その意味で記念碑祭りは、現実の輪中堤防と、それを守るための共同体、そして伝説の神格化された4名をつなぎ、十六輪中につたえられる水防の精神を宗教的次元で裏づけるものとなっている。

注

(1) 北浦から清水屋敷に移動した理由は不明である。住職によれば、「昔は北浦や清水屋敷という区別はなかったんやないか。徐々に大きな場に移ったんじゃないか」とのことであった(2011年5月22日聞き取り)。

(2) この説は、北山が十六の古老に聞いた内容に依拠している[北山 2008: 31]。寺院にご神体を預けていたのは、盗難防止のためであったという説もある。Kh氏からの聞き取りによる(2011.5.23)。

(3) Kh氏からの聞き取りによる(2011年5月23日)

(4) 慶円寺住職からの聞き取りによる(2011年5月22日)

(5) 北山が十六の古老に聞いた内容に依拠している[北山 2008: 31]。

(6) 北山が十六の古老に聞いた内容に依拠している[北山 2008: 31]。石上によれば、牛頭天王はインドにおいては祇園精舎の守護神であったが、わが国では御霊信仰を習合して疫病の神と見なされ、神体は須佐之男命と同一視された。各地の天王祭では、船を池に浮かべたり川に神を送るなど水辺の祭として行われることが多く、天王信仰は水神の性格を有している[石上 1979: 8]。十六輪中における社名、呼び名、祭神の関係は、こうした習合状態を表していると考えられる。

(7) 創建の由来は、北山が十六の古老に聞いた内容に依拠している[北山 2008: 33]。武藤によれば、御鋤祭は、伊勢の山に鋤形の榊の枝が生えるのを豊年の吉瑞とした祭である。60年に一度おこなわれ、鋤の訪れがあると豊作になると言われている。文政10年(1828)には、伊勢外宮の御師が桑の木を鋤形にし、榊の枝を添えたものを神体にして村々へ配った[名古屋博物館 2005: 89]。

(8) Ky氏からの聞き取りによる(2011年6月26日)。なお柳田は、シャグジ、ミシャグジ、シュクジン、シュクノカミなどとよばれる神々は、神社や天皇の形態が整う以前の古層の信仰をあらわしており、境界を祀る神で

はないかと推測している〔柳田 1941〕。また宗教学者の中沢新一（1950 - ）は、シャグジの一部は軍神と位置づけられ、八幡神社に転化する例があることを指摘している〔中沢 2003：170〕。個別の祭礼はなく、八幡神社の大祭にあわせて提灯をとすことになっている。その意味では、八幡神社とのむすびつきがあるとも考えられるが、詳細は不明である。

(9) 北山が十六の古老に聞いた内容に依拠している〔北山 2008：34〕。

(10) Ky 氏からの聞き取りによる（2011 年 6 月 26 日）。

(11) 北山が十六の古老に聞いた内容に依拠している〔北山 2008：35〕。湯祓いの内容は、旧暦 6 月晦日、境内に置いた大釜に神社の北側にあった池から清水をくんで湯を沸かす。神職が害虫よけのための湯祓いをおこない、参詣の村人も湯祓いをうけた、というものである。

(12) 寺院の檀家によっておこなわれる報恩講などは、あくまでも自治会とは別の檀家組織によっておこなわれているため、十六輪中全体としての行事ではない。ただし地蔵まつりに限っては、子供達の行事ということで自治会主導でおこなっている。

(13) 慶円寺住職の Tn 氏からの聞き取りによる（2011 年 5 月 22 火）。なお、自治会が神社を中心としているため、住職である Tn 氏は輪中の住民としては例外的に、自治組織の役員からはずさされている。ただし、草刈りや掃除などの作業労働には参加しているという。

(14) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる（2010 年 7 月 15 日）

(15) St 氏からの聞き取りによる（2011 年 1 月 20 日）。

(16) Kh 氏からの聞き取りによる（2011 年 3 月 14 日）。

(17) 祭神としては天照大御神であるが、たとえば Kh 氏が「しんめいさんは、水の神さまをまつつとると聞いとるよ」と語るように、十六輪中住民にとっては水の神として位置づけられている。

(18) Kh 氏からの聞き取りによる（2011 年 7 月 15 日）。

(19) 自治会長 Ts 氏からの聞き取りによる（2010 年 7 月 16 日）

(20) Tg 氏からの聞き取りによる（2011 年 11 月 10 日）。

(21) Km 氏からの聞き取りによる（2011 年 9 月 6 日）。

(21) Kh 氏からの聞き取りによる（2011 年 12 月 18 日）。

(23) 2011 年 12 月聞き取り

(24) 〔大垣市文化財保護協会 1975：18〕〔北山俤索編 2008：40〕および Kh 氏、St 氏からの聞き取りによる。

(25) 〔大垣市文化財保護協会 1975：18〕

(26) Kh 氏からの聞き取りによる（2011 年 12 月 18 日）。

(27) 北山が十六の古老に聞いた内容に依拠している〔北山 2008：40〕

(28) Wd 氏からの聞き取りによる（2011 年 9 月 11 日）

(29) 碑文のなかの経年状態で読みにくい部分については、北山の翻刻を参考にした。〔北山編 2008：41〕〔安田 1996：166〕

(30) 牧野鉄九郎は、文久 2 年に現在の輪之内町の庄屋の家で生まれた。慶應義塾で学んだのち帰郷し、新たに群界が組織された仁木村で第一代村長をつとめた。また郡会議員、県会議員をつとめ、大正 6 年には衆議院議員に当選した。詩文をよくし、輪之内町内には彼の建てた碑が随所に見られる〔輪之内町史編集委員会 1981：519〕。十六輪中には、治水記念碑のほか「森鉦太郎先生記念碑」同じく牧野鉄九郎の撰書でのこされており、

交流があったことがうかがえる。

(31) 治水の功労者が祭神となって祀られる例としては、輪中地域では岐阜県海津市の治水神社が知られている。祭神は、宝暦治水工事の責任者である薩摩藩家老の平田鞆負である。治水神社は、多くの犠牲をはらって三川分流工事にあたった薩摩義士を顕彰しようと、昭和13年（1938）につくられた。羽賀（1953-）は、薩摩義士の顕彰事業の背景について「困難なしかも広域的に利益をもたらす治水工事は戦争とその犠牲者に重ね合わせられ、その顕彰システムを模倣」する組織的なエネルギーがあったことを指摘している。またそれは、①当時頻発した洪水被害の切実さと、現実に進行する改修工事への期待とが、地域住民の宝暦治水への敬意としてあらわれたこと、②利害を異にする水利の関係者全体が結集力を維持していくためのシンボルとして歴史的な治水功労者の存在、神格化された存在を必要としたこと、という時代背景ともむすびついている〔羽賀 2005〕。

十六輪中の記念碑は、十六輪中住民が十六輪中堤防の築堤に尽力したのを、十六輪中住民が顕彰するものである。その意味では、局地的な顕彰事業である。それでも、輪中の築堤という困難な事業にたいして自己犠牲的に尽くした人物が祀られている点、水防に際して輪中住民が結束するためのシンボルとなっている点などは、同様の構造をもっている。

(32) Kh氏からの聞き取りによる（2011年3月14日）。

第5章 考察

本章では、以上で論じてきた十六輪中における水制御と水の神性について考察をおこなう。水制御技術、水共同体、水と神性について、それぞれの動態をまとめたうえで、十六輪中という共同体において水制御と水の神性がどのようにむすびつき、それがどのような方向性を作り出しているのかを論じたい。

1. 水制御技術の革新

水利用の変遷

十六輪中における水利用は、灌漑用水と生活用水に大きく分けられる。さらに、灌漑・生活用水と区別されるものとして弘法の井戸がある。それら三種の水利用を取水方法ごとに時間軸で示し、十六輪中における水利用の全体像をあらわしたのが図 5-1 である。

このうちおたれと弘法の井戸は、取水口の移動や改修工事などはあったものの、技術革新による大きな変化はなく、一環して利用し続けられてきた。両者を除くと十六輪中の水利用は技術革新によって変遷してきた。特に水利用の形態が大きく変わった時期として、18 世紀前後と 1950 年代があげられる。

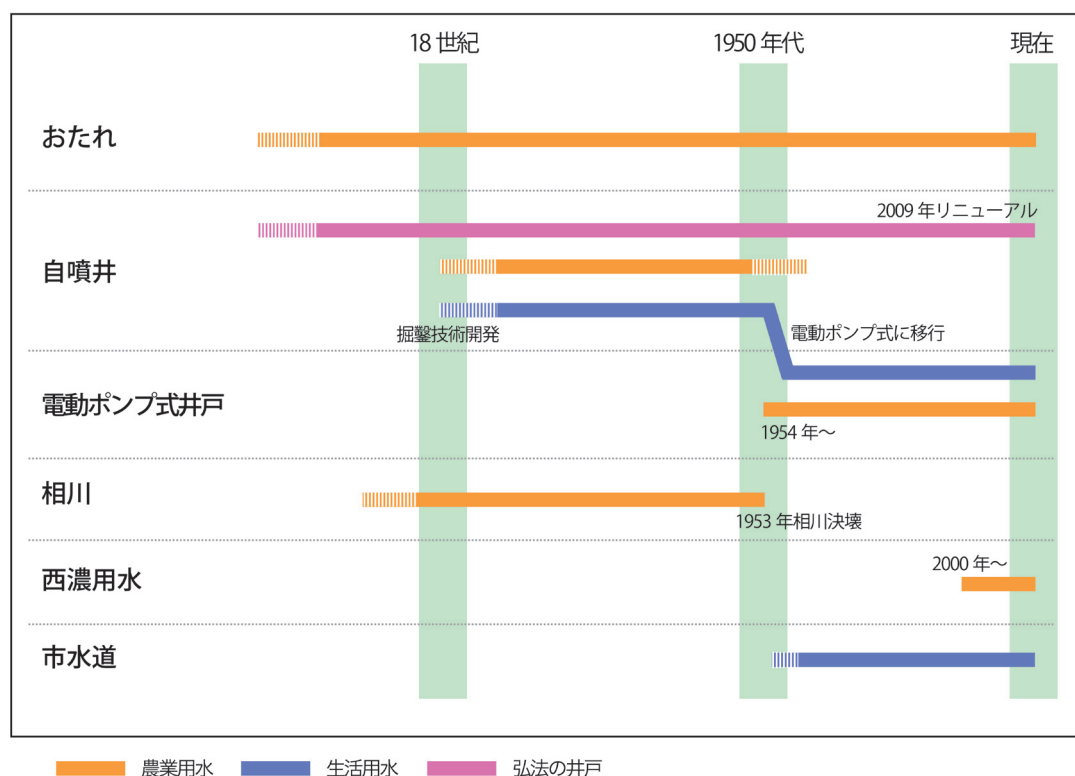


図 5-1 十六輪中における水利用の変遷

18世紀後半に掘鑿技術が開発された自噴井は十六輪中にもたらされ、灌漑用水としてあるいは生活用水として、各家や田んぼで利用されるようになった。輪中内のどこであつても掘鑿すれば自噴井が得られるようになったことが、十六輪中における灌漑用水・生活用水に与えた影響は大きいと考えられる。

そして1950年代には、近世以前から灌漑用水として利用されてきた相川が決壊し、それにもなう改修工事で取水が廃止された。また田んぼに20数個あつた自噴井は、1954年以降の土地改良工事で新たにつくられた大規模な電動ポンプ式井戸に移行し、水量の減少とともに使用されなくなっていった。また生活用水として市水道が導入され、家庭での自噴井の利用を廃止することも可能となった。

そして2000年には西濃用水が導入され、十六輪中の水利用は新たな段階を迎えた。

以上のような水利用の技術革新は、一度に得られる水量の増大化、操作方法の容易化という方向性をもっている。おたれ、相川、弘法の井戸しか水源がなかった時代にくらべて、自噴井を掘ることで、輪中内で得られる水量は圧倒的に増大した。また電動ポンプを取り付けた井戸は、自噴井にくらべ一箇所から大量の水をくみ上げることができる。しかも日照りが続けば水量が減少する相川や自噴井と異なり、電動ポンプ式井戸や水道は常に安定的に水を供給する。そして西濃用水は、未だかつてない水量を安定的に十六輪中にもたらした。

またユリの開閉で水を得るおたれや相川からの取水方法にくらべ、電動ポンプ式井戸や水道については、スイッチを入れる、蛇口をひねる、という操作で事足りる。取水によって堤防が弱体化する心配もなければ、数週間をかけて掘鑿する必要もない。

こうした革新のいっぽうで、十六輪中における水利用の変わらない特徴がある。それは複数の水源を複合的に利用する点である⁽¹⁾。灌漑用水で言えば1950年代までの灌漑では、おたれ、相川、自噴井の三種が使われていた。そして、相川からの取水が廃止されて以降は、おたれと電動式ポンプが併用されており、2000年に西濃用水が導入されてからは、それらを合わせた3種の水源が用いられている。

このように灌漑用の取水源が複数あることには、どのようなメリットがあるのだろうか。

①輪中内にまんべんなく、そして速やかに水を供給するのに適している。たとえば、西濃用水やおたれの取水口は輪中西部にある。そのため輪中東部の水田へは水の供給が遅い。しかし、電動ポンプ式井戸の数を増やすことによって、輪中東部へも速やかに水が入る。

②十六輪中内の都合で、欲しいときに水が得られる。「西濃用水が来るまでの間に、しろかきとかするためにポンプの水を使う」と語られていたように、西濃用水は輪中から遠く離れた揖斐川を水源として順に供給されてくるものである。それに対して地下水やおたれは、輪中内や隣接地域のガマを水源とするため、住民が欲しいと思った時に、待つことなく水を得ることができる。

③リスクを分散することができる。電動ポンプ式井戸を使う理由として、「西濃用水が故障すると困るから」と語られていたように、十分な水量のある西濃用水ではあるが、それひとつに絞ってしまうと、何かあったときにまったく水が得られないことになる。

以上のような理由から、十六輪中では意識的に取水源を複数確保しておこうとしてきたと考えられる。そして生活用水においても、そうした傾向が見受けられる。きれいな湧く家庭では、市水道が導入されてからも自噴井に電動ポンプをとりつけ、市水道と井戸を使い分けている例が多く見られた。この場合水道代金などとの兼ね合いもあるが、意識的に水源をひとつに絞らず、複数確保しておこうとする姿勢がうかがえる。これは、豊かな水源をもつ十六輪中であればこそ可能な水利用のかたちである。

水防体制の維持

小倉は1983年の報告において、十六輪中では出水時に三段階の水防体制が作られていることを述べている。第一出動では自治会長と自治会役員が、第二出動では各瀬古の水防係が、そして「警戒水位を突破したときには、〈総出〉といわれる第三出動が要請される。この要請によって、各戸の男子は、ショベルや懐中電灯、各班備付けの掛け矢を持って各丁場の警戒にあたる」のである。そしてこうした堤防警備には、「各戸から1名、必ず男子が出ることになっている。なお、ここでは、一般的に他の町村で行われている、出不足料取り立て慣行はない。十六輪中にとって、堤防の維持・管理は、すなわち輪中住民全体の生活を守ることであり、その役目は男子の仕事なのである」[小倉 1983: 98-99]。

ここに書かれた水防体制は、それから30年近くたった現在でも変わっていない。現在の十六輪中においても、出水時の出動体制は三段階となっており、最終的には「総出」がかかり、それは全戸が参加する必要がある。このように依然として十六輪中では、人海戦術で堤防を警護し、堤防決壊やオーバーフローを避けるのである。その意味では、水防においては技術革新にとまなう大きな変化がおこっていないことになる⁽²⁾。

なぜ水防活動には変化が見られないのだろうか。水利用は技術革新によって発展してきたが、水害を防ぐことについては技術革新が及んでいないのだろうか。そのようなことはなく十六輪中周辺の河川改修工事も進められてきた。実際に、昭和28年の決壊後に改修工事がおこなわれた相川は、それ以降決壊しておらず、住民のなかには相川決壊を知らない者も多い。

しかし昭和34年に設けられた大谷川洗堰はその後16回の越流を数え、そのうち2回は輪中堤防を越えて水が流入している。2000年に入ってから3回の越流がおこっている。2007年に洗堰の嵩上げがおこなわれてからは越流していないが、「去年、夜中の1時くらいやったかな、みなさん出てもらって」というように、たとえ実際に越流しなくても危機感は繰り返されており、洗堰からの水害は生々しく輪中住民の体験にしみついている。

毎年のように水についた時代にくらべれば、確かに水害の被害は減少している。しかし洗堰がある以上大谷川西側は遊水地であり、常に越流の危険性がある。そして十六輪中には今も排水機が設置されていない。水害が発生する構造自体は根本的に変わっていないのである。こうして十六輪中では、水害リスクをぬぐいきれない状況が続いており、住民は水害への恐れを抱き続けている。これこそが、十六輪中において水防体制におおきな変化がおこっていないことの原因である。

なお、今後洗堰がなくなり輪中に排水機が設けられたら、あるいは水害への危機意識が薄れ、水防体制が衰退していく可能性はある。しかし洗堰がなくなり排水機が設置されれば、そのぶん河川の水位が増える。するとそれを「どっかでカバーしないかん」ことになり、すなわち河川堤防決壊の危険性が増すことになる。このように治水技術の限界、あるいは自然の恐ろしさを実感として語る十六輪中住民において、水防体制や水防意識が完全に消滅することは考えにくい。

2. 水共同体の変化

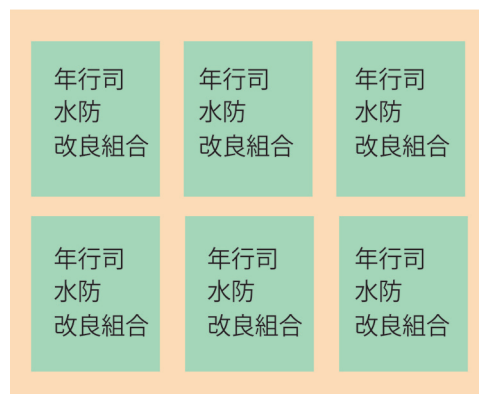
第1章で述べたように輪中の本義は「共同体」にあり、それは「水防」と「農業の水利用」を両立するための水制御を協働しておこなう「水共同体」であった。水防において全戸が出動し、「村人みんなが農業をおこなう純農村だった」とされる十六輪中もまた、そうした「水共同体」の条件を満たしている。

具体的に水共同体としての十六輪中の構造を見てみよう。十六輪中の社会組織は、自治会と瀬古から構成されていた。瀬古ごとに、まとめ役の年行司、水防の担当者として水防係、農業の担当者として改良組合が選出されている。そしてそれらの瀬古をとりまとめる十六輪中の自治会、改良組合が組織されている（図5-2）。さらに自治会が氏子組織を構成する十六輪中では、この組織がそのまま神社祭礼への奉仕主体となる。瀬古は水防、農業、祭礼の小単位であり、自治会はそれを統括する役割をおっている。

つまり十六輪中という水共同体は、水防、農業水利用、祭礼をとともにおこなう共同体である。すなわち水防の単位であり、それは灌漑水利用の単位とイコールであり、さらに祭礼をおこなう単位ともイコールであった（図5-3 上部）。

しかし急速に進む農業離れによって、こうした水共同体のありかたは変化している。

高橋による1983年の報告では、十六輪中には107戸の兼業農家があり、「経営の委託に出している農家はわずか17戸であって、今後出す方向で検討すると答えている農家は15戸である。約三分の二の67戸は、今後とも出すつもりはなく第二種兼業農家を維持していくつもりだと答えている」〔高橋 1983: 52〕とある。しかし報告書から30年がたった現在では、「自分でやってみえる方は三分の一くらいかな」と言われるほど、経営委託が進んでいる。その背景には、たとえ時間があっても農業をすると赤字になるという厳しい経済状況がある。そのため田んぼは持っているが農作業には携わらない、つまり灌漑用水にはまったく関与しない住民が増えている。



自治会／改良組合

瀬古

図5-2 自治組織の模式図

実際の十六町自治組織には瀬古大野が入っている。大野は別の輪中堤防を持ち、水防活動の組織が異なるためここでは十六輪中に単純化して示した。

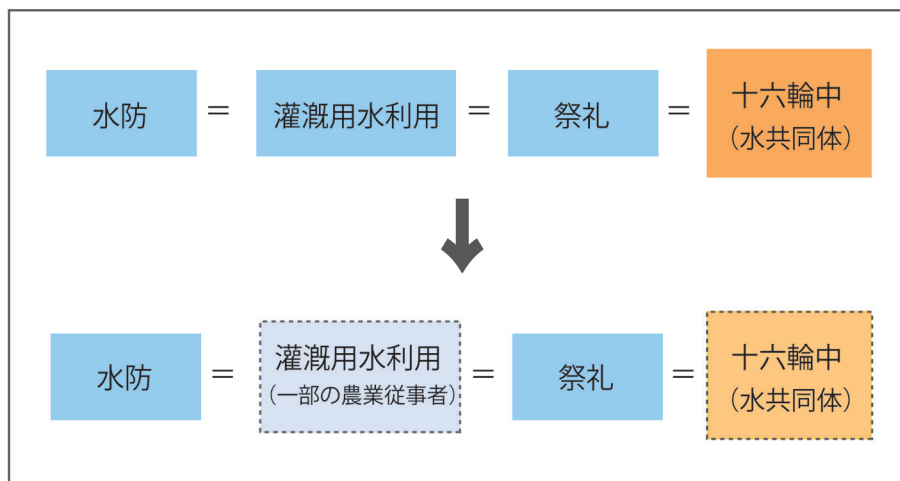


図 5-3 水共同体の変化

灌漑用水を利用するのは一部の農業従事者だけとなっており、灌漑にたいする関心は輪中住民全体で共有するものではなくなった。しかし瀬古を小単位とする水防活動、祭礼については、現在でも変わらず住民にまんべんなく役割が与えられている。すなわち図 5-3 下部で示したように、十六輪中の水共同体は、農業水利用の部分は縮小したが、水防の単位、そして祭礼の単位として協働する、という形で保たれていることになる。

3. 水の神性にみる紐帯

十六輪中においては、水が様々な神性とむすびついていた。相川には社があり祭礼がおこなわれる。また自噴井には水神がいると語られ、弘法の井戸は伝説をもっている。さらに輪中堤防を築いた村人は、石碑で顕彰され神体となっていた。このように十六輪中における水の神性は、多層の次元であらわれている⁽³⁾。こうした水の神性は、どのように住民と水を結びつけているのだろうか。

水防をめぐる紐帯

(1) 記念碑祭

輪中堤防を築いた4名を祭る記念碑祭は、記念碑を建てた昭和4年からおこなわれている。1983年の安田による報告では、記念碑祭りのあとに川ざらえがおこなわれることが記録されており、「祭と川ざらえ」というの組み合わせは現在と変わっていない⁽⁴⁾。

第4章で述べたように、記念碑祭は現在なお輪中住民を洪水から守っている輪中堤防の由来を確認するものである。そして輪中のために自己犠牲的に尽くした歴史上の住人を祀ったうえで、自らも共同体の一員として輪中内の川ざらえにあたる。その後、水共同体の小単位である瀬古での宴会がおこなわれる。こうしてみると記念碑祭は、輪中に生きる住民の歴史的な位置づけを確認し、さらにそれを「共」の形で現在に位置づける、水防の紐帯として機能している。

（2）相川と神明神社

「あらくれ川」である相川は、かつては灌漑の取水源であると同時に決壊氾濫する川として、両義的な位置づけにあった。しかし昭和28年の決壊で取水が廃止されてからは、水利用の対象という側面は失われ、現在では水防の対象という側面のみが残っている。

相川は昭和28年以降は決壊していない。だがけして決壊のリスクがなくなったわけではなく、危険水位となって全戸出動がかかることもある。また洗堰が嵩上げされることにより決壊リスクが高まるという考えも聞く。その意味で相川堤防上に祀られた神明神社は、過去の決壊点という歴史的記憶を意味するにとどまらず、現在の輪中住民にとっても水防の要所である。

安田は1983年当時の神明祭を「毎年7月16日、村人は堤上の祠の前に提灯をともし御神酒を供えて、水難除け、豊作を祈願する」[安田 1983: 61]と描写している。日付、そしてシンプルな神事の内容ともに、現在と変わっていない。稲作離れが進んだ現在では、「豊作祈願」は共通の願いではなくなっているとも言えるが、「水難除け」は、輪中に住む者全員が共有しうる神明神社への願いとなる。

水利用をめぐる紐帯

（1）自噴井

十六輪中には「自噴井には水神が住んでいるため埋めてはいけない」という言い伝えがあり、実際に十六輪中の田んぼには、筒を残した状態で埋めずに残っている自噴井が数多く見られる。特定の祭礼があるわけではないが、田んぼに残された井戸筒とともに、輪中のあちこちに水神がいることになる。

それらはすでに利用されていない水源だが、実際の所自噴井は過去のものではない。家庭にある自噴井に電動ポンプをつけて、市水道と併用している例が多く見られた。現在も生活用水を提供する井戸があることは、井戸に水神が住むという伝説を忘却させることのない要因のひとつであると考えることができる。

（2）弘法の井戸

昭和初期まで病の治療や正月の初水、書き初めなど、ハレの特別な水として利用されていた弘法の井戸は、その後「誰も飲まんもん。誰も使用しとらんかった」と語られるほどに特別性を弱めていく。この背景には、1950年代以降の市水道導入、電動ポンプの導入など水のインフラ整備が近代化し、上質の水を常に得られるようになった状況があると考えられる。

しかしその井戸は、平成21年に名水としてリニューアルされた。現在では自宅に井戸を持つ輪中住民のほか、輪中外からも水を汲みにおとずれるなど、かつてのような賑わいを取り戻している。もともと「水の都」として知られる大垣市は、市内の湧き水紹介に力を入れており、十六輪中がそうした流れに参加するのに不思議はない。興味深いのは、リニューアルにあたって弘法大師ゆかりの井戸であることが強調され、「自噴であること」にこだわり、ポンプをつけなかった点にある。「干上がったときは干上がったときで、自噴だからいい」という姿勢は、観光化や集客などだけでは説明できない動機を感じさせる。

現実には十六輪中の水利用は近代化が進み、また稲作離れによって灌漑用水への関心が失われていくという一面がある。そうしたなかで、弘法の井戸をあえて弘法大師が掘った際の自噴井のままとしたのは、①変遷する水利用のなかで、近世以前から変わらず湧き続ける弘法の井戸の特別性の再評価であり、②現在では近代的な水利用技術に囲まれているものの、本来は自噴の水が豊富な土地なのである、という十六輪中住民の原点回帰的な思想を読み取ることができる。

以上のように十六輪中においては、水にまつわる神性が現在もなお維持されつづけている。実際の水利用では技術革新が進み、また水害が減少するなど近代的な変容を見せているが、そうした技術革新にともなう近代化が完全な精神面の変容を与えておらず、変わらない部分を持ち続けているのである。

それは十六輪中における水の神性が、抽象的な世界の物語ではなく、実生活における水利用や水防と密接に結びついているからではないだろうか。すなわち記念碑祭は輪中堤防の守護と、相川の神明神社は河川堤防の守護と、井戸の水神は自噴水と、そして弘法の井戸は特別性を誇示するように現在でも美味しい水を自噴で湧きあげているのである。こうした水の神性は、水共同体の精神的紐帯を考える際に無視できないものとなっている。

4. 受け継がれる水共同体のエートス

以上で見てきたように、十六輪中では水利用の近代化が進んでいる一方で、旧来の取水方法を併用した複合的な水利用がおこなわれている。また水害は減少しているが洗堰によって水害のリスクを抱えつづけているため、全戸参加の伝統的な水防体制が維持されている。そして実際の水利用や水防を基盤とする水の神性が、輪中住民に共有されている。

これらを考え合わせると、十六輪中という水共同体は図5-4のような構造で表すことができる。

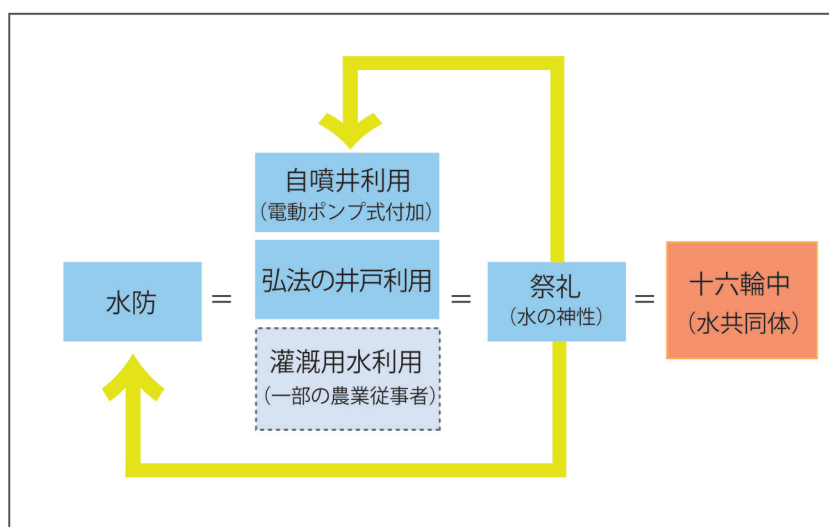


図 5-4 水共同体の実態

たしかに稲作離れが進み灌漑用水の利用者は減少したが、家に井戸を残して市水道と併用し、あるいは美味しい水として弘法の井戸水を共同利用している十六輪中では、「水利用」の要素が単純に失われたとは言えない。そして実際の水利用や水防は、背景に祭礼や伝説など水の神性を伝えており、水制御が神性によって強化、統合されているのである。

ここで水の神性が水利用や水防活動の紐帯となっていることは、水制御の技術が神性という精神面をとりこんでいることをあらわしている。つまり実際の堤防や水（水害）や、それを利用あるいは防ぐための制御技術と、神性という精神面がむすびついていることになる。それは輪中住民が水と関わり合うなかで形成してきたものである。

主体的にかかわるなかでものに意味を見出していくというはたらきを、地理学者のオギュスタン・ベルクは「風土」の概念を用いて説明している⁽⁵⁾。風土とは、事物が意味（おもむき）をもつ関係性、「社会の大地に対する関係」をあらわすものである。人々は、水を利用あるいは防ごうとはたらきかけることで水の意味を見出していき、それを神性として象徴的に表現する。こうして水の神性という象徴的システムと実際の水利用や水防の技術という物質的システムが、通態的にむすばれるのである。すなわち十六輪中という水共同体には、実際の水との関係性においてそこに神性を見出す、風土的な仕組みがある。

このようにして見出された水の意味づけは、あくまでも十六輪中の水環境と水利用にもとづいたものであり、一般化しうるものではない。記念碑、相川、自噴井、弘法の井戸に見出された水の神性は、それと関わる十六輪中においてはじめて意味を持つのである。その意味でこれは、建築家のバーナード・ルドフスキー（1905 - 1988）や、社会哲学者のイヴァン・イリイチ（1926 - 2002）が「ヴァナキュラー」という語であらわそうとした概念で説明できる。

ルドフスキーは、「特権階級の特権階級による、特権階級のための建築物」で構築されていた従来の建築史には含まれない、「建築家なしの建築」をあらわすための用語のひとつとして、ヴァナキュラーの語をもちいた〔ルドフスキー著 渡辺武信訳 1984：16〕。

またイリイチは、産業化によってもたらされた労役「シャドウ・ワーク」と対比させるために「ヴァナキュラーな活動」の存在を主張した。彼によればヴァナキュラーとは、「交換という考えに動機づけられていない場合の人間の活動」を表すことばであり、「人々が日常の必要を満足させるような自立的で非市場的な行為」を意味している。ヴァナキュラーな行為は、「任命された教師や専門家に従属」あるいは「配分される」のではなく、むしろ「相互的な互酬のさまざまな形態によって」、そして「共有されること」によって広まる。伝統的な諸文化は、「生活のあらゆる局面に」埋めこまれるヴァナキュラーな価値にもとづいて存続していた。〔イリイチ著 玉野井芳朗ほか訳 2005：115-150〕。

十六輪中において、水とのかかわりあいには特定の専門家あるいは行政に委ねられるものではなく、輪中住民に共有される課題であった。彼らは、水を防ぐあるいは利用する最善の方法を経験的に作り出した。そして水との日常的な関わり合いのなかで水に神性が付与され、それが共有されていくのである。このように風土的な水利用と水の神性は、ヴァナキュラーなものと位置づけることができる。

以上のように十六輪中は「豊かな水利用」「水害リスクにたいする危機感」「水の神性がおりなす世界観」を共有する水共同体である。実際の水利用・水防の技術は、神性をふくんだ水の世界とむすびついており、水制御技術と水の神性は融合している。これは、水害のリスクと恐れを持ち続け、かつ豊富な水源に恵まれた十六輪中ならではの構図である。

そして十六輪中には、そうした「水共同体」の構造を維持しようという姿勢がある。水防や祭礼に関わる厳格な出動要請は「水共同体」として当たり前のことであり、出不足などの代案は生ずるべくもない。ここには、水共同の一員として輪中に生きる住民に共有される内在化された倫理的志向、すなわちエートスの形成を読み取ることができる。このエートスは抽象的な思想ではなく、実際の水防、水利用、祭礼などをおして実践され、経験的に蓄積されていく。また、それは歴史的に継承されてきたものであり、今を生きる輪中住民は、水共同体の歴史の線上に位置づけられている。

もっともそれは、歴史的に固定されたものであるという意味ではない。十六輪中では、水の技術革新を拒絶するのではなく柔軟に受け入れており、それにともない水共同体は変容している。しかしたとえば洗堰の嵩上げによって水防活動を止める、西濃用水や市水道の導入によって他の取水源を廃止するという方法はとらない。「輪中は水害から守られなければならない」のであり、「輪中内部で湧き続ける水源は残すべき」である。輪中住民として継承されてきたエートスが、その判断を方向付けているのである。

十六輪中における水と人が有機的にむすびついた関係性は、水と切り離された生活とは全く異なるものである。バランスのとれた人と水との関係モデルを模索する時、十六輪中の水共同体のありかたには、多くのヒントが見いだせるのではないだろうか。

注

(1) 十六輪中の農業的土地利用について研究した高橋は、土地改良前の十六輪中の水管理について、次のように論じている。「灌漑用水の確保については、河間によるものと、井戸によるものがある。(中略)」河間にの水は、豊富な相川の湧水を堤外から取るため、輪中堤に三箇所取水口が作られていた。一方井戸の多い所は水田一筆に一本の割合近くまで掘られたが、共同井戸もあった」[高橋 1983: 39-40] このうち、輪中堤外から取水する三箇所の取水口とは、おたれと相川からの取水口に該当すると考えられるが、残りの一箇所については、土地改良前を知っている方に訊ねても不明であった。

(2) もっとも、「父親が遠くにいったら、奥さんが出てくる」と語られていたように、必ず男子が出て行かなければならないというジェンダー的な縛りについては、やや薄くなっている可能性がある。ただし、ある祭礼の奉仕のため、その家の主人の代わりに妻が出ていたことがあった。その場では問題なく祭礼が執り行われていたが、後日、「本当は女の人ではいかんのか」という声も聞かれた。これは水防などとは関係ないものだが、性的な役割の認識がなくなっているわけではないと考えられる。

(3) こうした神性のありかたは、十六輪中の水環境にもとづいていると考えられる。十六輪中は、河川、自噴性の地下水、隣町の湧き水など、複合的な水源にかこまれている。これらの水とのかかわりのなかで、複合的で多様な神性が形成されたものであろう。すなわち「十六輪中における水の神性」は、「十六輪中の複合的な水環境」「複合的な水利用」とがむすびつくかたちで形成されている。

(4) ただし 1980 年の報告には、「毎年 4 月 6 日、村人は老若男女すべてが八幡神社脇の遊園地に集まり、蓆、ごぎを広げて腰をおろし、手作りの昼食をともにしながら、にわか造りの舞台に目をやった。秋の祭りに次ぐこの祭りは、村人だけで祝う「記念碑祭り」で、神社境内にある「治水功労者記念碑」に因む祭りである」[馬淵、安田 1980: 71]。とあり、かつては石碑の前で出し物が楽しまれていたらしい。

(5) 地理学者で哲学者であるオギュスタン・ベルク（1942-）は、和辻哲郎の『風土』に着想を得て、風土論を押し進めた人物である。ベルクによれば近代社会は、ウェーバーのいう「世界の幻滅」の道をたどった。近代科学は、大地と人間を二元的にとらえ、外的世界を「客体」に還元した。それは「～である」という客観的事実のみで構成される「環境」であり、理性的な主体がそれを認識する。そして主体は、客体の状態に還元された世界の操作をおこなう。しかし実際には、純粋な客体としての「環境」は存在しない。そこにあるのは、「～として」のおもむきを持つ「風土」である。風土は「社会の大地に対する関係」であり、風土においては、あらゆる事物が意味（おもむき）をつくり、あらゆる場所が人間的価値意識を付与される。人間の居住する風土は「世界性」を持つ、「生態象徴的」なものである [ベルク著、篠田勝英訳 1996]。

結論

最後に、各章をととして考察してきた本論文の全体像を示しておきたい。

本論文の目的は、輪中地域における水を利用／防ぐための技術と、水にあたえられた宗教的な言説や行為の動態を分析し、水害のリスクを抱える輪中地域における水と人との歴史的動態を明らかにすることにあった。そのために（１）農業用水利用、生活用水利用、水害対応の具体的方法と歴史的変遷を明らかにした上で（２）水にまつわる祭礼、伝説、しきたりの内容を分析し、十六輪中における両者の関係性を考察した。

第１章「輪中の自然環境と歴史」では、木曽三川下流域の自然環境と輪中の歴史を論じた。

木曽・長良・揖斐川と支流が流れる濃尾平野の木曽三川下流域は、地表・地下ともに豊かな水に満ちた土地であり、同時に不安定な土地でもあった。輪中形成は、不安定なフロンティアを開発しようとする試みであった。近世初期におこなわれた輪中の発展は多くの土地を拓いたが、河道が狭まることになり結果として水害の悪化を招いた。そうした状況を打開するために、明治以降三川の分離がおこなわれた。河道が直線に整備されるとともに輪中堤防は切り離され、輪中は解体されていった。現在では部分的に残された輪中堤防を見ることができる。そうしたなかで、完全な輪中堤防を残しているのが十六輪中である。

第２章「十六輪中の環境」では、十六輪中の自然環境、歴史環境、社会環境について論じた。

十六輪中は揖斐川支流沿いに位置しており、相川、大谷川に囲まれている。地下水が多く排水条件にも恵まれているが、相川は突発的な水害がおりやすく、洗堰が設けられている大谷川からは越流の危険がある。そのため現在にいたるまで、水害へのリスクを持ち続けている。

集落の歴史は古い輪中築堤は明治に入ってから実現した。反対する周辺集落との交渉によって輪中築堤をなさしめた村人は功労者として讃えられ、顕彰されている。

社会組織としては、「瀬古」が自治の小単位として機能している。なお生業として稲作が突出していたが、近年では水田経営を委託する方式が進み、稲作離れがおこっている。

第３章「水制御の技術」では、水利用、水防活動、水管理の具体的な技術を論じた。

①水利用

現在、農業用の灌漑水としては、西濃用水、おたれ、電動ポンプ式井戸が併用されている。これらの灌漑用水は改良組合が担当している。また生活用水としては、市水道とともに井戸を持ち、両者を併用している例が多い。灌漑用水、生活用水と異なる水利用として、住民共有の弘法の井戸があげられる。弘法の井戸は現在でも自噴で湧いており、井戸周辺が整備され、大垣市の名水のひとつに位置づけられている。

昭和 20 年代までは、農業用水として自噴井、相川、おたれが使用されていた。しかし自噴井は湧出量が減り、相川は決壊後の改修工事にあわせて取水が廃止された。なお近世の絵図によれば、相川からの取水は 19 世紀にはすでにおこなわれていた。

②水防

家単位では、床上浸水を避けるための土盛、浸水で家具が濡れないようにする水かたづけ、ライフラインが停止したときに備えた炊飯などが伝統的な対応方法としておこなわれている。

輪中単位では、川ざらえや草刈りなどが住民全戸の義務となっている。また出水時には段階的な出動体制が定められており、第三出動においては全戸が参集され堤防警備に参加しなければならない。こうした水防対応が維持されている背景には、水害が絶対来なくなることはありえず、財産は住民自らが守るのが当然であるという思想がある。

③水管理

灌漑用水の取水は改良組合が担当するが、輪中全体の水害に関係する部分は、自治会が中心となって水管理をおこなう。取排水の管理はユリと呼ばれる調整施設によっておこなわれるが、開閉のタイミングが難しく、操作によって輪中内の氾濫が起こる可能性がある。排水機の設置されていない十六輪中では、そのタイミングを見極めることで内水の氾濫を防いでいる。

第 4 章「水の神性」では、十六輪中における水の神性を論じた。

十六輪中では、村社八幡神社を中心とする祭礼を自治会中心でとりおこなっている。祭礼への奉仕は、定められた当番瀬古がおこなうことになっている。なお水にまつわる神性としては、社と祭礼があるもの、伝説としきたり、社ではなく石碑で祭礼をおこなうもの、など多層である。

相川堤防上には神明神社が祀られており、毎年 7 月 16 日に祭礼がおこなわれている。神社はかつての決壊点を示しているとされ、祭礼の提灯がきれいに灯ると豊作になるという伝承がある。

自噴井には水神が住んでいると伝えられている。そのため井戸を埋めてはならず、使わなくなった井戸も息口を残しておかなければならない。このタブーは受け継がれているため、輪中内には現在も自噴井の跡が残されている。

弘法の井戸は、弘法大師が掘ったという伝説がある。伝説では、弘法の井戸は濁り水の湧く輪中内で唯一の清水であると語られている。この伝説は、ソブ水と清水が湧く十六輪中における水質の違いの理由を説明するものとなっている。井戸は、近世期に自噴井掘鑿技術が広がる以前から湧いており、特別なものとして知られていた。井戸水はかつては正月や病気などハレの時に用いられたが、インフラの近代化とともに一時衰退する。しかし 2009 年にリニューアルされ、現在ではふたたび輪中住民によってひろく親しまれている。

記念碑は、輪中堤防を築く際と修復する際に尽力した村人の 4 名を顕彰する治水碑である。毎年 4 月に、彼らをご神体として祀る祭礼がおこなわれている。祭礼は全戸参加が義務づけられており、神事の後に瀬古ごとに分担箇所に分かれて川ざらえをおこなう。終了後は、瀬古ごとの集会所で宴会となる。

第5章では、各章のデータをまとめ、十六輪中の水制御と水の神性を考察した。

①水制御技術の革新

水利用については、取水方法が技術革新によって歴史的に変容している。なかでも取水方法が大きく変化したのは、自噴井掘鑿技術がもたらされた18世紀と、電動ポンプが導入され相川からの取水が廃止された1950年代である。技術革新によって十六輪中における取水量は増大し、操作方法は容易になっている。しかし導入された新たな取水方法に完全に移行することはなく、常に複数の水源が確保されてきた。

水防については、堤防改修工事が進み水害の回数は減少しているが住民は水害への恐れを抱き続けている。それは洗堰があるためであり、たとえ洗堰が完全になくなったとしても、それによって河川水位が上がれば堤防決壊のリスクが高まるためである。そうした思考を背景にして、全戸参加での水防対応が続けられている。

②水共同体の変化

かつて十六輪中住民は、水防単位であり、灌漑用水利用単位であり、祭礼単位でもあった。それが十六輪中における「水共同体」の形であった。しかし稲作離れがおこったことで灌漑用水を共同で利用する単位ではなくなった。ただし水防、祭礼単位においては瀬古と自治会による組織が維持されているため、水共同体は形を変えて保たれている。

③水の神性

相川の祭礼、記念碑祭、自噴井の水神、弘法の井戸伝説など、十六輪中における水の神性は現在も伝えられ共有されている。むしろ弘法の井戸が、リニューアルに際して自噴であることにこだわりをみせたように、水に対する意識に原点回帰的な動きさえみられることは無視できない。すなわち、水制御の技術革新による変化は、精神面での完全な変容をあたえていないと言える。こうした状況は、水の神性が抽象的な思想ではなく、実際に現在の水利用や水防とむすびについているためと考えられる。

④エートスの継承

水利用や水防の神性とのむすびつきは、技術と精神性とは結びついていることを意味する。それは、水と主体的に関わるなかで水の神性を見出してきたことをあらわしており、水と人との「風土」的な関係を表している。十六輪中は「豊かな水利用」「水害リスクにたいする危機感」「水の神性がおこなす世界観」を共有する水共同体であり、それはこの地域の水環境にもとづいた「ヴァナキュラー」な価値意識である。また輪中住民には、この価値意識を共同体として維持すべきであるというエートスが内在化されているため、水利用、水防、祭礼などへの参加実践は厳格に守られている。水共同体のエートスは歴史的に継承されてきたものであり、これによって水制御技術と精神性は切り離されることなく維持されている。

文献・資料

- 網野善彦 1978「中世の桑名について」名古屋大学文学部『名古屋大学文学部研究論集』74 pp.187-205
- 安藤萬壽男編 1975『輪中 その展開と構造』古今書院
- 安藤萬壽男 1988『輪中 その形成と推移』大明堂
- 池谷和信編 2003『地球環境問題の人類学 自然資源へのヒューマンインパクト』世界思想社
- 池谷和信編 2009『地球環境史からの問い ヒトと自然の共生とは何か』岩波書店
- 石上堅 1964『水の伝説』雪華社
- 石上七鞘 1979『水の伝承 民間信仰にみる水神の諸相』新公論社
- 井田徹治 2009『見えない巨大水脈 地下水の科学』講談社
- 伊東孝ほか 1996「樋門の分析：江戸の木樋と明治の煉瓦樋門」『土木史研究第16号』土木学会 pp.507-516
- 伊藤重信 1974『長島町誌 上巻』長島町教育委員会
- 伊東俊太郎 1996『講座環境と文明 環境倫理と環境教育』朝倉書店
- 伊藤安男ほか 1979『輪中 洪水と人間 その相克の歴史』學生社
- 伊藤安男編 1996『変容する輪中』古今書院
- イリイチ・イヴァン著 玉野井芳朗ほか訳 2005『シャドウ・ワーク』岩波書店
- 海津正倫 1994『沖積低地の古環境学』古今書院
- 海津正倫ほか 2004「遺跡分布からみた完新世後期の濃尾平野における土砂堆積域の変遷」日本第四期学会『第四期研究』43 (4) pp.287-295
- 大垣市 a 2010『大垣市史 民俗編』大垣市
- 大垣市 b 2010『大垣市史 輪中編』大垣市
- 大垣市文化財保護協会 1975『大垣の伝説と民話』第一集
- 大垣輪中水防事務組合 2009『平成21年度水防計画』大垣市
- 大迫輝通 1983「十六輪中の農地と農家」岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済』第3集 特集十六輪中 pp.25-38
- 小倉正紀 1983「十六輪中の社会生活 一聞き取りを中心に」岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済』第3集 特集十六輪中 pp.39-54
- 加藤尚武 1998『環境と倫理』有斐閣
- 加藤尚武 2001『価値観と科学／技術』岩波書店
- 神山智美 2013「荒崎水害訴訟控訴審判決（岐阜県大垣市）に関する判例研究」九州国際大学法学会『法学論集』第20巻第1・2合併号 pp.84-119
- 川本彰 1967「農業発展と村落組織 輪中地帯村落組織に及ぼした大規模土地改良事業の社会的影響」『明治学院論叢研究年報 社会学・社会事業』pp.227-307
- 岸本雅行 1983「十六輪中住民の生活圏の変化」岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済』第3集 特集十六輪中 pp.65-78
- 岸本雅行ほか 1996「交通系に見る変容」伊藤安男編『輪中の変容』pp.81-98

- 木曾三川 その流域と河川技術編集委員会 1988『木曾三川 その流域と河川技術』建設省中部地方建設局
- 木曾三川流域誌編集委員会 1992『木曾三川流域誌』建設省中部日本建設局
- 北見俊夫 1981『川の文化』日本書籍株式会社
- 北山倂索 1983「十六輪中と関係村々との治水争い」岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済 特集十六輪中』第3集 pp.7-24
- 北山倂索編 2008『十六町のあゆみ』大垣市十六町
- 岐阜県県土整備部河川課 2013『伝統的防災施設 私たちが守り伝える先人の知恵 「霞堤」や「輪中堤」を残し、地域を洪水から守ろう』岐阜県
- 岐阜県 2014『河川調書 平成26年7月1日現在』岐阜県
- 岐阜県 2004『一級河川木曾川水系 牧田川圏域（相川、大谷川、泥川）河川整備計画』岐阜県
- 岐阜経済大学地域経済研究所 1983「特集 十六輪中」『地域経済』3 pp.1-173
- 木本凱夫 1975「岐阜県高須輪中の土地基盤整備の進展」『三重大学農学部学術報告』50号 pp.49-65
- 金田章裕 1999『古地図からみた古代日本』中央公論新社
- 五来重 1942「弘法清水」高野山大学密教研究会『密教研究』81号 pp.99-108
- 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2007『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第138集 朝日遺跡Ⅶ』
- 坂本太郎ほか校注 1965『日本古典文学大系 日本書紀』岩波書店
- 篠原徹 1990『自然と民俗 心意のなかの動植物』日本エディタースクール出版部
- 篠原徹 2005『自然を生きる技術 暮らしの民俗自然誌』吉川弘文館
- 柴田明夫 2007『水戦争 水資源争奪の最終戦争が始まった』角川書店
- 白井義彦 1964「土地改良・その他による西濃輪中地域の変貌」『地理科学』3 pp.105-121
- 水資源開発公団ほか 1988『木曾川用水史』（非売品）
- 管豊 2006『川は誰のものか 人と環境の民俗学』吉川弘文館
- 高橋幸仁 1983「十六輪中における農業的土地利用の特色」岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済』第3集 特集十六輪中 pp.39-54
- 垂井町編 1996『新修垂井町史』垂井町
- 東海三県地盤沈下調査会 1985『濃尾平野の地盤沈下と地下水』名古屋大学出版会
- 鳥越皓之編 1994『試みとしての環境民俗学 琵琶湖のフィールドから』雄山閣
- 鳥越皓之 2012『水と日本人』岩波書店
- 中沢新一 2003『精霊の王』講談社
- 中澤辨次郎監修 1936『輪中聚落地誌』日本農村問題研究所
- 中嶋伸恵 2005「水防意識に基づいた輪中地域の景観変容に関する研究」Japan Society of Civil Engineers『土木史研究論文集』24号 pp.53-61
- 名古屋市博物館 2005『御鞆祭真景図略』名古屋市博物館
- 名古屋大学文学部社会学研究室編 2008『水環境の再構築（2）大垣市を事例として』名古屋大学文学部社会学研究室調査報告書6
- 農業土木学会古典復刻委員会編 1992『農業土木古典選集明治・大正期 土木工要録』日本経済評論社

- 野本寛一 1996「環境の民俗」野本寛一ほか編『講座日本の民俗学 4 環境の民俗』雄山閣
- 羽賀祥二 2005「宝暦治水工事と〈聖地〉の誕生」名古屋大学附属図書館研究開発室『名古屋大学附属図書館研究年報』3 pp.75-102
- 日野西真定編 1988『弘法大師信仰』遊山閣出版
- 平塚正雄編 1937『濃州徇行記』大衆書房
- ベルク・オギュスタン著 篠田勝英訳 1996『地球と存在の哲学 環境倫理を超えて』筑摩書房
- 松尾国松 1939『濃尾に於ける輪中の史的研究』大衆書房
- 松原義継 1977『本阿弥輪中 藩政時代における輪中農業の成立と変貌』二宮書店
- 馬淵旻修 安田守 1980「十六輪中の成立と現況」岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済』第2集 pp.53-73
- 水野時二 1971『条里制の歴史地理学的研究 尾張・美濃・越前を中心として』大明堂
- 宮村忠 1985『水害 治水と水防の知恵』中央公論社
- 村上陽一郎 1986『近代科学を越えて』講談社
- 村上陽一郎 1994『文明のなかの科学』青土社
- 安田守 1983「十六村の行事と農耕儀礼」岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済』第3集特集十六輪中 pp.55-64
- 安田守 1996「十六輪中の景観変遷」伊藤安男編 1996『変容する輪中』古今書院 pp.154-176
- 安田喜憲 1991『大地母神の時代ーヨーロッパからの発想』角川書店
- 安田喜憲 2004『文明の環境史観』中央公論社
- 安田喜憲 2006『一神教の闇 アニミズムの復権』筑摩書房
- 柳田國男 1941『石神問答』創元社
- 柳田國男 1970『定本 柳田國男集第27巻』筑摩書房
- 山泰幸ほか編 2008『環境民俗学 新しいフィールド学へ』昭和堂
- 吉岡勲監修 1986『低地のくらし 輪中と治水』岐阜県小学校社会科研究会
- 吉田光邦 1979『技術文明と宗教 理性と感性のあいだ』日本経済新聞社
- ルドフスキー・B 著 渡辺武信訳 1984『建築家なしの建築』鹿島出版会
- 輪之内町史編集委員会 1981『輪之内町史』輪之内町

インターネット資料ほか

国土交通省 河川に関する用語

http://www.mlit.go.jp/river/pamphlet_jirei/kasen/jiten/yougo/

岐阜県博物館ウェブサイト（収蔵品ギャラリー考古）

<http://www.gifu-kenpaku.jp/syuuzou/6362>

大垣市統計書

http://www.city.ogaki.lg.jp/soshiki/1-11-0-0-0_37.html

東海農政局 西濃用水第二期農業水利事業所

<http://www.maff.go.jp/tokai/seibi/kensetu/seinou/pages/keii.html>

ナショナルアトラス（国土交通省国土地理院 日本国勢地図 1990 年）

<http://www.gsi.go.jp/atlas/>

気象庁 過去の気象データ（国土交通省）

<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

東京国立博物館情報アーカイブ

<http://webarchives.tnm.jp/pages/oldmaps/index.html>

e-gov 法令データ提供システム（河川法）

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S39/S39HO167.html>

J A 前納岐阜

<http://www.gf.zennoh.or.jp/gifu-kome/safety/kijunPdf/h26-hatsu-sl.pdf>

独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター 2004『濃尾平野水文環境図』CD - ROM

図、表、写真リスト

序論

- 表 0-1 本論中に語りを引用させていただいた方々

第1章

- 図 1-1 木曾三川全域地形図
図 1-2 濃尾平野における地形環境の変遷
図 1-3 濃尾平野地形図
図 1-4 濃尾平野傾動図
図 1-5 木曾三川流域雨量図
図 1-6 大垣、桑名、掛斐川、木曾福島の雨温図
図 1-7 自噴性地下水の仕組み
図 1-8 濃尾平野地質断面図
図 1-9 濃尾平野の自噴性地下水帯分布の変遷
図 1-10 木曾三川の河道変遷図
図 1-11 濃尾平野における縄文、弥生遺跡
図 1-12 濃尾平野における条里地割の分布域
図 1-13 輪中堤防の発達モデル
図 1-14 濃尾平野における輪中形成の推移
図 1-15 江戸時代の木曾三川
図 1-16 三川分流の過程
図 1-17 現存する輪中堤
表 1-1 河川延長と流域面積

第2章

- 図 2-1 大垣市十六町の町域（左）と地形（右）
図 2-2 十六輪中の地形
図 2-3 十六輪中周辺の河川環境
図 2-4 相川の年間水位変動
図 2-5 相川周辺のガンマ分布図
図 2-6 十六輪中における地下水の水質と湧出量
図 2-7 十六輪中の水路模式図
図 2-8 十六輪中における相川堤防決潰地点
図 2-9 瀬古の分布模式図
図 2-10 明治 24 年（1981）二万分の一地形図

図 2-11 平成 21 年（2009）国土地理院 25000 分の 1 地形図

図 2-12 ハツシモの栽培こよみ

表 2-1 十六輪中でおきた相川決壊と、大谷川洗堰の越流

表 2-2 荒崎地区と十六町の人口

表 2-3 平成 23 年度の農業日程

写真 2-1 大谷川の洗堰

写真 2-2 雨の日にあられたガマ

写真 2-3 ソブ水

写真 2-4 輪中堤外へと流れる排水口（左）と逆水門の仕組み（右）

写真 2-5 平成 14 年の大谷川越流被害

写真 2-6 輪中堤防

写真 2-7 十六輪中堤防の切割

第 3 章

図 3-1 西濃用水の主要幹川

図 3-2 おたれの取水口の位置

図 3-3 電動ポンプ式井戸の位置

図 3-4 弘法の井戸の位置

図 3-5 十六輪中におけるユリの位置

図 3-6 自噴井の分布

図 3-7 水温管理

図 3-8 自噴井を掘る様子

図 3-9 相川灌漑の取水口と決壊地点

図 3-10 相川取水方法の概念図

図 3-11 近世絵図にみる灌漑取水口

図 3-12 十六村絵図にみる相川取水口

図 3-13 紀州流の塚

表 3-1 弘法の井戸の水質

表 3-2 水防倉庫の装備

表 3-3 塚の材料

写真 3-1 西濃用水の取水口

写真 3-2 おたれをせきとめるユリ（左）、輪中内におたれを引き入れるユリ（右）

写真 3-3 ポンプ②

写真 3-4 整備以前の弘法の井戸

写真 3-5 現在の弘法の井戸

写真 3-6 味噌汁桶

写真 3-7 防災訓練における切割の締切

- 写真 3-8 水防倉庫
- 写真 3-9 草刈りの様子
- 写真 3-10 川ざらえ
- 写真 3-11 十六輪中のさまざまなユリ
- 写真 3-12 湛水時の十六輪中
- 写真 3-13 自噴井の形状
- 写真 3-14 相川に残る取水口の跡
- 写真 3-15 Sk 家の井戸へ降りる階段（左）、Tk 家の井戸舟（右）

第4章

- 図 4-1 十六輪中の寺社の位置
- 図 4-2 おたれ取水口の拡大
- 図 4-3 十六村絵図の弘法井戸拡大図
- 図 4-4 リニューアルした弘法の井戸のパンフレット
- 表 4-1 十六輪中の年間祭礼行事
- 表 4-2 平成 22 年度の行事当番
- 表 4-3 弘法の井戸伝説の構造
- 写真 4-1 光照寺の本堂
- 写真 4-2 八幡神社の鳥居と参道
- 写真 4-3 八幡神社境内の井戸跡
- 写真 4-4 社軍司神社
- 写真 4-5 神明神社
- 写真 4-6 大神宮常夜灯
- 写真 4-7 日吉神社
- 写真 4-8 神明祭の様子
- 写真 4-9 暗闇に灯る 神明祭の提灯
- 写真 4-10 記念碑
- 写真 4-11 記念碑祭の様子

第5章

- 図 5-1 十六輪中における水利用の変遷
- 図 5-2 自治組織の模式図
- 図 5-3 水共同体の変化

謝辞

御世話になったすべての方の名前を挙げ、御礼を申し上げることはひかえるが、学位論文を書くために私を導いてくださった方々をふりかえることで、謝辞としたい。

岐阜県郊外の片田舎で育った私にとって、自然環境とのかかわり方は、長らく関心の対象でありつづけた。幼いころ、里山と水田は遊び場であったが、こわいものや触れてはいけないものがある場所でもあった。しかしそこは開発の対象となり、のどかな田園風景のなかに大きな道路や店舗が建った。好奇心から娯楽に満ちた新しい施設をつかうたびに、失われた景色にたいする漠然としたうしろめたさを感じた。今思えば、人間の業のようなものにたいする子供らしい潔癖な正義感だったのだが、その感覚は長じてもどこかにしこりとして残っていた。

いちど社会に出た私がふたたび大学に戻ったのは、自分のなかにあるわだかまりをとことん追求する手がかりが欲しかったからかもしれない。名古屋大学文学研究科に入学した私は、充分にその望みを叶えることを得た。文学研究科の諸先生方は、分野にこだわらずに門をたたく私の聴講をこころよく迎え入れてくださった。そして諸先輩方には、様々な勉強会や研究会をとおして、ぶつかり合いながら思索を深めていく方法を実地で教えていただいた。こうして私は、自分のなかにある素朴な疑問を、学術的な研究という形で掘り下げていく術を学ぶことができた。

大学院に在籍している間、私は仲間とあるいは単独で様々なフィールドを訪ねた。調査地は山間や平地など多岐にわたっていたが、すべて都市を離れた地域であったことは、自然と人間の関係にたいする私の関心によるものであったと思う。調査地で出会う人々の、からだに刻みこまれた知恵には、深い敬意をおぼえた。なかでも十六町では、洪水とむきあいながら、自らを律することで生活をたもつという住民の高く厳しい意識に接して、つよい衝撃を受けた。彼らは、冷静に治水や工事の利点を語り、そしておなじ姿勢で神を語った。部外者が首をつっこむことで少なからず迷惑をかけてしまったことを詫びるとともに、多くのことを学ばせていただいたことを心から感謝したい。

そしてなにより、これまで積み重ねてきた研究を学位論文としてまとめる機会をくださった、名古屋大学の阿部泰郎教授をはじめ、文学研究科の比較人文学講座の先生方に心から感謝の意を表したい。

2017年6月

下本英津子